真・恋姫†無双 雛里 鳳凰一雙舞い上がるまで

TAPeT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双 雛里 鳳凰一雙舞い上がるまで

【Nコード】

N7404W

【作者名】

T A P E t

【あらすじ】

真・恋姫無双の雛里 です。

雛里ちゃんが嫌いな方及び韓国人のダサイ文章を見ることが我慢ならないという方は戻るを押してください。

それでも我慢して読んで頂けるなら嬉しいです。

コメントは外史の作り手たちの心の安らぎ場です。

しばらくはTINAMIで書いていたものをまんまと移ってくるよ
うな形になります。

基本的にマイナーではないはずだけど影の薄い雛里ちゃんをメイン
ヒ論として行きます。

後、オリキャラが結構登場します。本来の恋姫無双の話から大いに
離れているところがあります。

イギリスドラマードクター・フーから設定を持ってきています。

他色々と危険な外史ですが、それでもよろしければ見て行ってくだ
さい。

第一章 一話 直刀、死す（前書き）

真・恋姫無双の雛里 です。

雛里ちゃんが嫌いな方及び韓国人のダサイ文章を見ることが我慢ならないという方は戻るを押ししてください。

それでも我慢して読んで頂けるなら嬉しいです。

コメントは外史の作り手たちの心の安らぎ場です。

しばらくはT I N A M Iで書いていたものをまんまと移ってくるような形になります。

基本的にマイナーではないはずだけど影の薄い雛里ちゃんをメイント論として行きます。

後、オリキャラが結構登場します。本来の恋姫無双の話から大いに離れているところがあります。

イギリスドラマードクター・フーから設定を持ってきています。

他色々と危険な外史ですが、それでもよろしければ見て行ってください。

第一章 一話 直刀、死す

タタッ！

タ、タッ！

朝、ここ、北郷流剣道道場では、中々見れない場面が広げられていた。

「たああああっ！！！」

「…はああっ！」

ターッ！

それは、現北郷流道場の師範である、北郷直刀なおと

と、師範代理、もとい次期師範と言われている、直刀の孫、北郷一刀の対練であった。

対練と言えど、その勝負の格の違いというもの、少しでも剣を握ったものであればわかるというものであった。両方とも一歩も譲ることなく剣を交わっていた。剣と行っても竹刀であったが、それでも二人の動きはまるで真剣で戦っているように熱かった。竹刀のはずの剣を避ける二人の目はまるで真剣を避けるように的確にその軌道を見切り、紙一枚差でそれを避け、反撃を刺していた。あんな竹刀に防具無しに当たると皮膚が切れそうだと観戦している人の誰もが思っていた。戦っている祖父も、孫もどっちも剣に限っては達人の境地に上がっている人たちであった。

北郷一刀のご両親は、一刀が幼いうちに先にこの世を去った。一刀の父上は遺伝的に身体が弱かった。彼が一刀の母親と結婚した頃には、彼の両親とも病で世を去っていた。

直刀は最初自分の娘が愛する男を見たとき、断固結婚を反対した。一人娘で大事に育てた娘をあげるには足りない男だった。それに娘の息子が生まれたら自分の代わりに北郷流を継がせようとした彼としては、あんな虚弱な男に娘をやりたくもなかった。結局直刀の反対にぶつかつた一刀のご両親は愛の逃避を敢行し、結婚した。そして生まれたのが一刀であった。

直刀が心配していた通りに、一刀の父親は一刀が六歳になる頃に病で妻と息子とお別れして、それに続くように母親も夫を失った衝撃で病を得て一刀の側を去った。一刀の両親が死んだ後、なんだかんだして連絡が届いた親戚が一刀の祖父であった直刀であった。一刀の父親の側には近い親戚がなく、母も一人娘だったため、直刀が一刀を引き取つたのは当然のことであった。

驚くことにも直刀は一刀を実家に連れて帰る代わりに、自分が一刀が住んでいた東京に引越してくる方を選んだ。実家を整理した直刀はそこから出たお金で一刀と一緒に住む家を得た。そして残った金で近くの敷地を買ってそこに新しく北郷流道場を建てた。

幼い時に両親を失った一刀は凄く落ち着いて、静かな子に育った。直刀の望み通り一刀は祖父の修行を受けたせいか、幼い時から剣のこと以外には興味を持たなかった。当然学校の授業にも興味がなく、成績も悪かった。そんな問題に直刀が気がついたのはいつか小学校で一刀のクラスの授業参観に行った時であった。授業でどんな子も親たちの前でいいところを見せようと手をあげて騒いでいる中、一刀だけが机に頭を俯いて眠っていた。その後直刀は問題を直感し、

一刀に学問にも励むことになった。

幸い身体のことばかりは父親の弱い身体を受け継いでいなかったのか、一刀は祖父の修行にもよく付いて行き、勉強にもそこそこ頭角を見せるようになっていた。高校一年生になる今になっては、剣では師範代理の名を得るほどになり、一刀と本気の対練を出来るものは、祖父の直刀ぐらいとなっていた。

スッ

「！」

「隙ありじゃ！」

ターッ！！

直刀の竹刀が一刀の頭を真っ二つにするかのような勢いで通った。

一瞬、地面に落ちた二人の汗に足を滑った一刀の隙を直刀が容赦なく突いたのである。

「…今のは偶々だ。やり直そう」

「馬鹿もん！戦場でも手滑って剣落としたら敵にちよっとまったって言うつもりか？負けは負けじゃ！今日の食事当番はお前じゃ」

道場の皆が見ていた真剣勝負は、祖父と孫の家の食事当番を決める賭けであった。

「しかも汗で足が滑るなど、精神が散っている証拠じゃ。儂を見る！一度も足など滑っておらんわ！」

「お祖父さんが足など滑ったら困る。その年でそんな事故にあったら腰が折れる」

「ぬあんじゃとー!」
「事実を言ったまでだ」

口ではそう言うも、剣を正位置に戻して、互いに礼をした。

・

・

・

「なあー、なあー、かずぴー」
「……………」

朝祖父との食事当番の勝負に負けて低気圧の一刀の姿にも関わらず、
中学校からの旧友である及川がやってきた。

「今日さ、暇？」
「……………負けた」
「えー、そっか……そんなじゃ無理かな……………」

なんだかんだ言って、負けたの三文字で一刀の状態を理解する様子
を見ると、長い付き合いなのだけは確かであった。

「…何の用事だったんだ？」
「うん？興味あるんか？」
「……………」

にしても、やはり今日の勝負の結果が少し気に入らなかつた一刀は一応及川の話聞いてみることにした。及川がこんな風に朝から構ってくるような用事は、大体放課後の何かイベントに一刀を巻き込むためのものであつた。

祖父の話通り学問には励んだものの、奥な性格や口が少ないことによつて学園内のコミュニティーには中々入っていなかつた一刀であつたが、及川にいつも振り回されてあつちこつち一緒に行つていた。及川でもなければ一刀は完全に学園で孤立していただろう。それでも一刀本人は別に構わなかつたが。

一方及川にもいつも一刀と一緒にどこかに行くには訳があつた。一刀は性格こそあまり外形的ではなかつたが、一目で見ると中々モテるのであつた。要するに、一刀と一緒に出かけると自然に一刀に興味を持った女たちの中で自分も構うことができたのである。そして、今日及川の用事というものはまさにそういう用事ストリートであつた。

「なー、実はなー、今日隣の北高校の女三人とこつちの男三人と合コンしよつて話したんやけどよ」

「今日の夕食はカレーにするとしよう」

「最後まで聞けよ！」

残念ながら一刀は直ぐに興味を無くしたようだ。

「なー、頼むよ。行くつて行つたやつが急にパーにしてこのままだと人合わないつて」

「お前のそのやり方は散々やられている。どうせ俺を座らせて、後は俺はほつたらかしにしてお前だけ遊ぶ気に決まっている」

「いや、ありゃ俺のせいちゃうしー、かずびーがちゃんと混ぜらな

いせいだろ?」

「気に食わない」

「そういわないでよー」

「……………」

「頼むよ、今回だけ!後で昼奢るから!かずぴーが好きな特製メロンパン一ヶ月分!」

「!」

特製メロンパンという言葉に一刀は少し反応した。

特製メロンパンというのはこの聖フランチェス学園にある売店にある一日五個判定で出る、100%メロンの原液を使った普通のメロンパンより倍はでかいメロンパンのことであった。値段は高かったものの狙う人が多かったため、毎日鍛錬している一刀の足で、昼休みを知らせる鐘が鳴る途端走って行っても、手に入れることは週に一回ぐらいだった。

らしくないと思うかもしれないが、他の食べ物には適当で食えるならどうでもいいと思っている一刀だったが、それがお菓子となった話は別だった。スイーツやパン、お菓子などに限っては一刀の口はかなり厳しかった。この学園のメロンパンは、そんな一刀の口から合格のサインが出た上々のスイーツだった。

「……………ほんとだろうな」

「ふふーん、そんなのかずぴーみたいな良い子にはわからん裏口があるってー」

「……………」

「で、どうするん?ええやろ?一日ぐらいへーきやろ」

「……………」

一刀は迷った。
あの特製メロンパン一ヶ月分……お爺さんの夕食……

「行く」

その結論が出るには一秒もかからなかった。

・

・

・

放課後、一刀は仕方なく（メロンパンに釣られて）及川と一緒に合コンの集合場所に向かった。

「かずぴは座ってるだけでええ。後は俺に任せときな」

「俺は別に良い。約束だけは守っとけ」

「わあっとる、わあっとる」

「で、もう一人男が居るとい話じゃなかったか」

「ああー、それが……実はなー……」

「……」

こいつ、また俺を騙した、と一刀は思った。

「契約は決裂だ」

「って、ちょっと待てーい！」

帰ろうとする一刀の手首を掴む及川だったが、一度気を決めた一刀を止めることは中々難しかった。

「頼むでーかずぴー、通算99回目振られた親友を考えて今回だけ…！」

「友として通算百回目にさせるわけにはいかない」

「かーずーぴー」

それにしてもこの及川、必死である。

「ちょっと、放しなさい!!」

「？」

「あ」

ふと帰ろうとする一刀と、それを全力で食い止める及川の耳に鋭い声が聞こえた。声がする方を向くと、街の中の噴水の前で男女の群れが喧嘩をしていた。

「あ、あの二人って…」

「……北高の制服だな」

「そう、俺が言ったのってあの二人だって。どや？」

「そういう話をしてる場合じゃないようだ」

一刀はその道噴水の方に向かった。騒ぎの中心では及川と待ち合わせる事になったっていた北高の制服を来ている女の子二人と、その二人に絡まっている質をの悪そうな男三人であった。

「いいじゃん、一緒に遊ぼうぜ」

「だから、待ち合わせがいるって何度いえばわかるんだよ」

「おい、おい、こんなかわいい顔の女の子を待たせているなんてありえんだろ、なあ？」

「ありえないんだな」

「いいから、そんな奴らほっといて俺たちと遊ぼうよ。そんな幼稚な連中より俺たちと大人の遊びしようぜ」

一刀は別にその絡み合いに関わる理由なんてなかった。気が変わって帰るところだったし。だけど、女が嫌っているところをしつこくしている男の群れが何故か気に入らなかった。

「やめたらどうだ？」

「ああん？」

「」

「聖フランチェス学園の制服……」

「よー、俺もいるぜ」

「及川！遅いわよ、あんた！」

「わりーわりー、ちょっとそこの子来ないって口聞かなくて……」

そんなことを言ってるうちに、ナンパをしていた男たちと一刀は厭しい目つきでお互いを睨み合っていた。

「遅れてきて何を言おうと思ったら……おい、悪いけどこの娘たちは俺たちと遊ぶと話がついているんだ」

「誰もそんなこと言っていないわ！」

後ろで及川と知り合いのような北高の女子高生が言い返した。

「と、言っている。今引いたら見逃してあげよう」
「へー、こわいこと言うじゃねえか」

三人のリーダ級のような男が前に出て一刀と鼻と鼻がぶつかりそうなほど近くまで顔を出してにらみ合った。

「女の前でかっこいいとこ見せようとしてるのははよく分からんけどよ…俺はそんなあまくねーんだよ!」
「!」

その一瞬、リーダ級の男に眼を取られていた一刀は、後ろのもう一人背の低いチビが自分の足を引っ張ることに気づくのが遅かった。

身体の重心を失った一刀の身体は、続いてくる目の前のチンピラの拳を避けられず、そのまま後ろの噴水へと倒れた。

バシャー

「ぷははははー! いい様だ! よくやったぞ、チビ」

「へへ、見るよアイツ、まるで濡れ鼠だぜ!」

「俺たちに刃向かうところなるんだな」

三人組はそう水に落ちてびしょぬれになった一刀を見ながら笑っていたが、それを見ていた及川は顔を真っ青にした。

「おい、かずぴー! 大丈夫か!」

「……………」
「!」

及川が顔を青くしたのは、一刀があの人三人にやられたからではな

った。寧ろこの状況、無言のまま何も喋らず水に濡れた髪を直すこの男がどうか自分が思っているような事をしませんようにと祈っていただけだった。

「……及川」

「あ、ああ……」

「悪いが、メロンパンはお預けだ。他の用事ができた」

「お、おい……落ち着きなつて。あー、つたく、今日はこんな騒ぎ起こそうに来たんじゃ無いってのに」

「何、どうしたのよ。あの子大丈夫なの？」

「な、何かこわいしー……」

後ろに居た北高の二人は半分他人事に思いながら話していた。

「お、おい！お前ら早く、かずぴに謝れよ！でないとまずいつて！」

「はあー？貴様も水浴びしてーのか？何馬鹿な事……>>こぎつ！

<<…うぎゃー！ー！ー！」

「兄貴ー！」

「大丈夫なんだな？！」

「う、腕が、腕が！ー！」

「ああ…もうおせー…俺は知らんぞ……」

及川がそう頭をおとしてため息をついてる間も、無表情の顔をした、まるで仮面をかぶってるような顔をした一刀は、何の心の動揺も見当たらないその顔で三人組のリーダー級の男の脱骨された腕をさらに後ろにひっくり返していた。

「や、やめろ！折れる！おれるって！」

「てめえー！」

チビが腕を掴んで両手がない一刀に向かって懐のナイフを取り出し掛かってきた。

「つて、ちょっと！何を…！」

刃物まで出てきて驚く及川の友たちであったが

「……………」

スッ！

「ぐえっ！」

そんなチビの横顔に一刀の蹴りが入った。

軽いチビはそのままさっきの一刀みたいに噴水に落ちた。

バシャーっ

そうしてるうちにも一刀は腕をへし折りつついた。

「うぎゃぎゃがぎゃぎゃー！！！」

「ねー、あれ、止めた方がいいんじゃない？」

「おい、お前早く謝れや！じゃねえとアイツその腕ちぎり取られるまでやってるぜ！」

「わ、悪かった。悪かったからもう許してくれー！」

腕が折られる痛みが我慢できなかったのか涙に鼻水までだしながら兄貴は言った。

「……………ならばよし」

くぎっ！

「うぎゃーっ！」

謝ったとほぼ同時に、一刀はへし折っていた腕を一気に反対側に折って元のところに腕の関節を戻した。

「あ、兄貴ー……」

「大丈夫？」

後ろで何もできないまま経っていたデブと噴水から上がってきたチビ その姿こそまさに濡れ鼠だった が腕の痛みで広場の床を転んでる兄貴を起こした。

「うう……き、貴様……」

「…謝ろう」

「はー！？」

「頭に来ると、つい理性が吹っ飛んでしまうのでな。だが、お前らの行動にも原因はある」

淡々とそう述べる一刀はまるで凡人のようだった。

さっきまで兄貴の腕を千切る勢いでへし折っていた男と同一人物とはとても思えない。

「ぐぬぬ……」

「こつちの話は同じだ。このまま去ってくれ」

「あ、兄貴。行こうぜ。相手が悪すぎるぜ」

「ちっ……お前ら、覚えてろよ！」

そんなくだらない言葉を垂れ流しながら、三人組は周りで騒ぎを見に来た人たちの群れを押しつけながら逃げていった。

「……………はぁ……………」

彼らが行くところを見ながら一刀はまたやっちゃったな、と思いなからため息をついた。

「おい、かずぴー、大丈夫なん？」

「あ…すまん。せつかくの申し出が始める前からパーになっちゃった」

「い、いや…別に、ていうかこっちは感謝したいところなんだけど……………」

及川の友たちはそう言いながらも、びしょ濡れになっている一刀を見て少し引いていた。

「あーあ、なんなのよもう。みよっちがいい男だと言って付いてきたのに、これじゃあ遊ぶ気にもならないわ」

「って、ちよつと、姫路……………」

その後ろに居たもう一人の女子高生はさっきまでの出来事が何もかも呆れたかのような顔でそう呟いた。

「ああ、もうやめやめっ！あたしは帰るよ。みよっちもこんなんじや遊べないでしょ？」

「それは……………」

「いや、まあ、気にすんなって。こっちが派手にやっちゃんだんだからさ。また後で会おうぜ。な？」

「はあ？あんたばかじゃないの？冗談もほどほどに言いなさい。こ

んなこと起してまたここに来る気なの？」

「姫路……！」

「何よ！みよつちも実はそう思ってるでしょ？あー、もう最悪！変なちんぴらたちにナンパされるかと思ったら、今度は良い子ぶった正義の味方さんが皆やつつけましたって？特撮物じゃあるまいしーだっさいってーの」

そう言いながらその女子高生は先にその場を離れた。

「ちよつと！姫路！ごめんね、及川。後で連絡するから……ちよつと！待っててば！」

もう一人の及川の友たちもその娘に付いてその場から離れて、残ったのは及川と一刀……

「あーあ……しゃあねえな。俺たちもかえろっ……ってかずぴー！」

一刀はもうその場に居なかった。

・

・

・

「……」

一刀は一人で濡れた身体を風に乾かしながら道場に戻っていた。直刀の道場は夜遅くまであるので、夕食当番にされたときは、家で料

理を作つて道場に持つていくのが普通だったが、今回はそんなにして
いる暇もなかった。そんな一刀の手にはパンがたくさんがビニ
ール袋があつた。

「またやらかした」

頭に来ることがあるとついつい一般人には抑えていた力が溢れてく
る。

冷静な判断と動きを基本にする北郷流にとって感情の制御ができぬ
ということとは実践でつまり死を意味する、との直刀の教えにより、
いつも感情を抑えている一刀だったが、このような小さい事でもそ
の蓋を開けてしまうほどでは、まだまだ修行が足りない、と自分で
も思つてきていた。

今日は祖父さんにも負けたし、色々と自分の弱さに呆れてため息を
つきながら一刀は道場に上がってきた。

「うん？」

上がってきた一刀はふとおかしいと思つた。道場が静かだった。い
つもならまだ祖父さんが門下生たちが残つていて、人たちの掛け声
が上がつてるところなのに…

おかしいと思ひながら一刀は道場の中に入った。

「祖父さん？」

「…息が荒いの」

祖父、直刀は道場の一番奥側で座禅をしていた。

「また己の感情を制御せず勝手に力を使ったのか」

「……………」

「仕方のない奴め、何とか言い訳でもしてみろい」

「どうしたんだ？他の人たちは」

直刀の叱咤に答えず、一刀は自分の疑問だけ聞いた。言い訳などするつもりはないという意味だ。

「……………今日は先に帰らせたわい。それより座れい。話がある」
「……………？」

いつもの豪快さ見当たらない祖父の姿に一刀はおかしいと思いながら濡れた制服のまま直刀の前に座った。

「一刀、お前に、この道場を継がせようと思っておる」
「……………突然何を言い出すのかと思えば……………」

直刀の突然の言い出しに、一刀はあまり驚かない顔で返した。

「俺はまだ未熟だ。それは祖父さんが誰よりも良く知っている」

「お前は十分成長した。もう、俺が老いた身体で師範などしたらんでも、お前に道場を任せることができる」

「俺はまだそんな資格がない。今日だって祖父さんに負けた」

「……………それは偶々じゃった」

「それが偶々ならどうして俺がこのパンを買ってきている」

「ところでそのパンは夕食のつもりかい。俺は食わんぞ」

「祖父さんの分なんて最初からない」

「老いた人を飢えさせるつもりかい」

「空腹の方が座禅にはいい」

「座禅はもう終わりじゃ。お前のその腐った根性をたたき直してやる」

「老いて飢えた身で無理をすると死ぬ」
「な・ん・じゃ・と・お！」

話がどんどん親子喧嘩に移ってる。

「と、今はそういう話ではおらんかったの」
「そうだね……他のはいい。ただメロンパンとアンパンは譲らない」
「違うわい！お前に道場を継がせるという話を……くふっ！！」
「！……祖父さん？」
「くふっ！うぐっ！」

咳を始めた直刀はその咳がどんどん激しくなって、直刀は座禅していた姿勢を崩して一刀の方へ倒れた。

「祖父さん！」
「……くふん！……たく、最後まで隠そうとしたのが……お前がくだらないことを言うからじゃ」
「……どういうことだ？」
「どうもごうもおらんわ。まったく、こんな病にやられているぐらいじゃ、先に言ったお前の父に一喝することもできんわ」
「病……どういうことだ……いつからそんな」
「老病じゃよ。見つかった時はもう遅いとか言っておった」
「そんな……」

突然の話に一刀は金槌で叩かれたように呆気無い顔で直刀の顔を見た。こんな顔だっただろうか。こんなに老いて、力を失った老人の顔をしているこの人が、本当に自分の祖父なのか？

「……祖父さん」
「そんな顔で見るでない。…それより、お主に見せたいものがある」

そう言いながら後ろにおいてあった布に包まれた長い物体を持ってきた。

「それは……？」

「北郷家に伝わる家宝……のようなものじゃ」

「家宝？」

布を解いたら、中にある者は剣であった。

鞘には赤い染料で鳳凰一双が、剣の下から先つちよの方に舞い上がる絵が華麗に描かれてあった。

「この剣が……家宝？」

「そうじゃ。いや。正確にはこの鞘だけが家宝じゃな」

「……剣の鞘だけ？じゃあその剣は？」

「まあ、見りゃわかる」

そう言つて直刀は剣の鞘を掴んで、一瞬それを少し外して剣身を見せた。

「……！」

その剣の刃を見た瞬間、一刀は身体が凍ったようにその場で固まった。

「……あ……あ……あ……」

冷たい、冷たい気がその剣から流れてきて、一刀の身体を鎖のように縛ってきた。

「あ……うう……」

「刀はなんとか身体を動かそうとしたけど、身体が言うことを聞かなかった。」

「分かったかの」

直刀が剣を鞘に抑えた途端、一刀の身体も開放された。

「はあ……今は……一体……」

「この剣は、元々鞘がない剣だったという。それが戦国時代である男の手に落ちた。その男はこの剣で、数々の敵を切り捨て、この剣に流された血だけでも何万人分に至ったという。その後剣の主は死んで、戦は終わったものの、まだ血の味を忘れなかった剣は自分を握った剣士を操る妖剣となったという。そしてこの剣の力を恐れた我らの先祖が、その時代有名であったある匠に、この剣の妖を抑えられる鞘を作るように申し込んだ。そして作られたのが、鳳凰の火の力を潜めたこの鞘じゃ」

「それで……その妖剣を封じている鞘だけが家宝だって？」

「そうじゃ。じゃが、我ら北郷家がこの剣をこの鞘に封印して何百年が経った今でもこの剣はまだ血迷っておる」

そう言いながら直刀は、その剣を一刀に渡した。

「その剣の鞘を外してみろ」

「……だけど」

「やってみろ」

「……わかった」

「一刀はその剣をもらって、なんとか鞘を外そうとした。けど、どん

なに力を使っても鞘は剣に食い込んだように外れなかった。

「どうなってんだ？」

「鞘はその剣を握ったものの度量を図る。剣の妖の力を押さえて剣を使えるものでなければ、その鞘はその剣を離さない」

「……………」

「その鞘の名前は鳳雛。鳳のひよ子という意味じゃ。鳳凰の熱い力が、剣の冷えそうに冷たい妖気を押さえておる。そして、いつかその役目を果たせば、鳳雛はその役名を果たしてやがて本当の鳳凰になって天に舞い上がると伝わる」

「鳳…？」

「一刀、その剣を持ったものは、北郷家を、そして北郷流を継がなければならぬ。そして、いつかその剣を使いこなせるようになった時、お前は本当の意味で北郷流の継承者となるじゃろう」

「……………」

一刀は祖父の顔を見た。

その顔は、まるで明日にでも死ぬ人が、自分が死んだ後を準備するような顔であった。朝までは自分と互角に戦った人どうしてこんなに急にこんなことを言うのだろうか。

「祖父さん…俺は…まだ、この剣をもらう準備が出来ていない。まだ俺は未熟だし、祖父さんの言ったとおりまだ自分の感情も制御できてない。こういう話は早過ぎる」

「そんなことは分かっている。じゃが、もう時間がおらんじゃ」

「どういうこと？」

「……………俺はもう、お主が成長するのを待ってあげられないのじゃ」「そんな…そんなこと言わないでよ」

嫌だった。

「祖父さんはまだ建装だろ？まだ現役だ…こんな話をするのは、まだ早い」

認めたくなかった。

「武人には分かるんじや。その時が来ると、自分が死ぬ時が分かる。儂の残った時間はもうそうない」

「祖父さん……」

「ご両親は早くも死んでしまった。」

「今まで頼れる肉親は祖父さんだけだった。」

「なのに、その人が今また自分からはなれるという。」

「呪われた家宝一つ渡しながら……」

「祖父さん……俺は……」

「儂の話はどうでも良い。それよりだ」

「どうでも良くてたまるか！祖父さんは……俺はどうすればいいんだよ…祖父さんまで居なくなったら、俺は一体どうすればいいんだよ……」

「やっと乾いてきた一刀の服にまた水玉が落ちる。」

「皆勝手すぎる……皆そんなに急に行ってしまう…俺は……残る俺の気持ちには誰も考えやしない……」

「一刀……」

直刀は静かに剣を持った一刀の手に自分の手を重ねた。

「すまぬの、一刀…桃季」

とうき

の分まで、お前を見守ってやるつもりじゃったが……まさかこんな風になるとは……」

「……祖父さん……」

「お前を一人を置いて行く儂を許せ」

「……ああ……ああ……」

一刀の目からは涙が止まらず流れて声にならない唸りが漏れていた。それに比べて直刀の目からは一粒の涙も出ていなかった。

哀しくなかったのではない。一刀が来る前に、泣くだけ散々泣いてしまったのだ。一刀の分け合う涙なんて、もう直刀の目にはのこってなかつのだ。

そして、その翌日の日が昇る前に、北郷直刀は静かにこの世を去った。

第一章 一話 直刀、死す（後書き）

如何でしたでしょうか。

これからもよければ見ていってください。

後、韓国人である自分は誤字や脱字などを見つけるに限界がありません。

故に、そういう類のものを見つけてくださった方は指摘くださるとすぐ助かります。

あ、直刀という名前は一斗缶さんの小説「恋姫十無双」北郷一刀
争奪戦?」から持ってきています。
すぐく面白いので是非見てください。

第一章 二話 流れ星（前書き）

今回は雛里ちゃんのサイドに移ります。

幼い乙女が願った夢を流れ星は叶ってくれるのか否か……

第一章 二話 流れ星

「それじゃあ、今日はこのぐらいにしましうか」

「起立、礼！」

「「「ありがとうございますー」」」

漢王朝、その地の中心にある荊州は、昔から学者や奇才を持った人たちが集まることに有名であった。

その中でも、最も徳望のある一人が、水鏡先生こと司馬徽であった。彼女は荊州で一番名高い私塾を運営していた。

才がある女の子たちや、いい先生の下で子供を勉強させて、いつか高位官吏にさせようとする富裕な貴族たちの娘たちがその水鏡先生私塾に集まった。

水鏡先生は才のある娘ならお金をもらわず自分の知識を与え、あるいは自分の足で大陸のあつちこつちを回りながら、親を失った娘たちを連れてきて、ここで智謀を与えた。

そんな水鏡先生の私塾の生徒たちの中でも現在最も頭角を見せつつある二人。

「ねえ、ねえ、雛里ちゃん、知ってた？」

「うん？何、朱里ちゃん」

いや、頭角という言葉だけでは足りないだろう。彼女らは他の生徒たちとは圧倒的に違う何かを持っていた。

いわゆる天才。そう、この二人、朱里こと諸葛孔明と、雛里こと鳳士元はいつかこの大陸で最も大事なことをする人たちになるだろうと彼女らを見ている誰もが思っていた。

「今夜ね、流れ星が落ちるの」

「流れ星？」

「そう、流れ星がた〜くさん落ちてきて夜の空がまるで雨が降っているみたいになるの」

「す、すごいー！でも、朱里ちゃんどうしてそんなことが分かったの？」

私塾で最も頭の良いこの二人。

普通学問を鍛える場所の一位と二位の人たちと言ったら、犬猿の仲とまではしなくても互い競争していて少なからず緊張感が漂うというのが普通だけど、この二人は学院でも知られてるほど仲の良い娘たちだ。

「へへ、実はね。この前水鏡先生の部屋に行った時、これを見つけたの」

「これって……街で回ってる瓦版？」

「そう、ここにね。今日の夜、月が一番高い時に流星雨が落ちるって書いてあるの。天文に詳しい人から聞いたって話だから間違いないよ」

「そうなんだ……でも、月が一番高い時だなんて、私そんな遅くまで寝ないで起きていられるかな……」

「うう…それは私もちょっと心配だよ」

この二人、奇才でも一番だが、幼さでも一番だった。

月が一番上に上がるところか、月が上がったらもう目元に眠りの妖精が来て踊っているという。

だけど、今回ばかりは見逃すわけにはいかなかった。

こんなイベントが、後生きてるうち何回あるか分からない。

これは千載一遇のチャンスだったのであった。

「だから雛里ちゃんにも言ったんだよ。二人でお互い眠れそうになつたら起してあげるの。ね？雛里ちゃんもみたいでしょ？流れ星」
「……うん、見たい」
「良かった！じゃあ、約束だよ」
「うん、一緒に流れ星見よう」

そうやって二人はゆびきりして夜流星雨を見るために互いを助けあうことを誓ったのであった。

> p f <

そして、夕食が終わって、塾の皆が眠りに付く頃、同じ部屋を使う朱里ちゃんと雛里ちゃんは、眠りを我慢しながら夜が深めるのを待つのであった。

「時間、早く行かないかな」
「そうだね。早く流れ星みたいもんね」
「星がたくさん落ちて来て、雨みたいに……」
「他の人から聞いたんだけど、星が落ちる時、長いしっぽができながら落ちてきて、それがたくさん流れ星が一時降ってくると、すごく綺麗だった」
「早く、直接見たい」
「うん、うん！」

今はわくわくして、二人ともまだ眠気に気付いていなかったけど、夜が深まると、どんどん瞼が重くなっ行って行く。

「ううう……はあ……はあ……」

「雛里ちゃん、眠っちゃだめd……はあはわ……ん」

「あわわ……朱里ちゃん、口大きい」

「はわっ！く、口を塞ぐの忘れちゃったよ」

月はまだ登りつつある。

流星雨が落ちるまではまだ少し時間がある。

コンコン

「朱里、雛里？」

「はわっ！」

「ごめんなさい!？」

寝る時間がとくに過ぎてるのに起きていた二人は、引き戸にノックする音が聞こえてびっくりして布団の仲に潜り込んだ。

がらっ

「あら、二人とも起きていたのね」

「す、水鏡先生……」

「ご、ごめんなさい」

部屋にノックしたのは水鏡先生であった。

二人は怒られそうでおそおそ謝罪するが、部屋の中に入って来る水鏡先生の顔には怒りは感じなかった。

「いいのですよ。私こそ、こんな夜遅くにごめんなさいね。流れ星を見るため起きていたのでしょうか？」

「ご存知だったのですか？」

「もちろん、あなたが持つてきた瓦版が、どこから来たかと思っっているのです、朱里？」

「あつ」

朱里ちゃんはしまったと思う顔で口を開けました。

「他にも何人が寝ないでいましたけど、今日は特別に見逃してあげましたわ」

「あの、先生」

そんな中で雛里ちゃんはさつき水鏡先生が言っていた言葉に疑問を持つて口を開けた。

「私たちに、何か用事があったところに参られたんですか？」

「その通りですよ、雛里」

「用事、ですか？」

「ええ、二人には特別、流れ星を一番良く見られる特等席を紹介してあげようと思ひまして……」

「流れ星が一番良く見える……」

「特等席……」

今の二人にこれ以上を心が引かれる話はなかった。

「行きたいですか？」

「はいっ！！行きたいでしゅ！！」

「そう、それじゃあ、他に寝ている皆さんが起きないように、静か

に行きましようか」

「はわわ」

「あわわ」

一瞬、自分たちの肯定の声があまりにも大きすぎたことに気づいた二人は顔を赤らめた。

> p f <

水鏡先生が特等席と言った場所は、塾から少し離れた自分の屋敷二階だった。

「わー」

二階に出ると、周りが開かれていて空がよく見えた。

「はい、二人ともここに座りなさい」

「はい」

「失礼します」

二人が水鏡先生に勧められてバルコニーに用意されている椅子に座ったら、部屋に中に戻ってお茶を淹れて戻ってきた。

「外だと少し寒いですから、これで身体を温めなさい」

「ありがとうございます」

「…ございま…しゅっ！」

離りは少し寒かったのかお茶をもらってから直ぐに口にしたが、暑すぎたのか舌を少し焼けてしまっただけからふーふーとしながら気

をつけてお茶を飲んだ。

「あの、水鏡先生」

ふと、お茶を飲んでいた朱里が水鏡先生を呼んだ。

「なんですか、朱里」

「どうして、私たちだけここにお呼びになったのですか。他に流星雨を見ようとする娘たちも居たって言いましたよね」

「そうですね……」

水鏡は自分も椅子に腰をかけながら言った。

「実は、今日二人をここに連れてきたのは、流星雨のこと以外にも、二人にお話したいことがあったからです」

「お話ですか？」

「ええ、朱里、雛里、私は今日貴女たち二人に、道号を付けてあげようと思います」

「はわっ!？」

「道号……?」

朱里が驚く反面、雛里はキョトンとした顔で水鏡先生を見つめていた。

「そ、そそそんなこと……私たちが道号だなんて、他に、私たちよりも賢い人たちも沢山……」

「謙遜なのはいいことですよ、朱里。だけど、その謙遜さが自分の智を穢すことになってはいけません」

「はわわ……」

「あの、道号ってどういうことですか？」

「そう、雛里は知らないのですね。それじゃあ、ちょっと説明をしましょう」

そう言った水鏡はお茶を少し飲んでから二人を見た。

朱里はもじもじしていて、凄く恐れ多いそうなかおをしていて、雛里は『道号ってなんだろう』と自分が知らない何かあることに好奇心を覚えながら早く水鏡先生が説明してくれることを待っていた。

「道号というのは…その人の名前、字、そして真名とはまた別としてその人の日頃の行動や名声を高めるための名前です。私の水鏡とというのがそれですね」

「あわわ……」

「私たちは、まだ塾で勉強している生徒に過ぎます。なのに道号だなんて……普通は卒業する生徒の中で最も成績が良かった人たちにあげるのでは……」

「普通ならそうかも知れません。だけど、この乱世の中、これから何があるか分かりません。朱里の姉上がそうしてたように、二人も突然この塾を出て、自分の主君を探しに行ってしまうかも知れませんが……」

「先生……」

「……」

その時、雛里は朱里の顔を見て何かを感じた。

朱里は水鏡先生の言葉を聞いて、何だか思いを読まれたかのような顔をしていた。

もしかしたら、朱里は本当にこの塾を出て、百合お姉さまのように自分の主君を探す旅にしようとしたのだろうか。

でも、そしたら私は？

どうして朱里ちゃんは私にそんなことを言ってくれなかったのかな。

「百合にはできなかつたけど、あなたたち二人は私がこの塾を運営しながら最も優れた娘たちだったと自身しています。ですから、二人が外に行く前に、二人に私の手で道号を付けてあげたいと思ったのです」

「先生……………」

この塾を出る。

雛里にはその話がまだ遠いことのように覚えた。いや、寧ろありえないとさえ思っていた。

塾を一步出ただけでも、知らない人たちばかり。

外は怖いことがたくさんあった。盗賊や山賊に限らず、雛里は人が怖かった。朱里や先生みたいに親しい人たちじゃないと、声をかけるおろか見られるだけでも怖くて逃げてしまいそうだった。そんな自分が外に出て自分が従う主君を探し出せるのかな。

雛里にはまだまだ水鏡先生が言っていることが遠い未来の話に覚えた。

だけど、水鏡先生が言ったように、彼女たちが自分たちの智謀という羽をはためかせる時は咄嗟に、そしてその時は近い未来に訪れるものだった。

「分かりました。諸葛孔明、水鏡先生から道号を頂けること、光栄に思います」

朱里は心を決めたようだ。

私も…………道号をもらいたい。

もらっただけなら構わない。

まだ、まだ時間はある。

「わ、私も、先生に道号をもらえて、嬉しく思います」

「そう、私も二人に道号を付けてあげられて嬉しいですわ」

水鏡先生は笑みながら二人の頭を帽子越しで撫でた。

「それじゃ、まず朱里」

「はい」

朱里は座った席から立って、水鏡先生を見た。

「朱里、あなたの智は奇才であって天から召された天才と言っても決して過言ではないものです。一つを教われた自分から百を編み出すその智謀は、将来あなたの主君の未来を大きく変えるでしょう。あなたの能力を十分に使いこなせる主君は数少ないでしょう。だからあなたは時を待っています。その場所に居座って、あなたという存在を十分受け入れられる器を持った主君を……そんなあなたの号を臥龍とします」

「臥龍……」

臥龍、臥している龍……

朱里ちゃん、何だか凄い号をもらっちゃったよ、と雛里は思った。自分にもあんなに重い道号がつけられたらどうしようかも思った。

「雛里」

「は、はひっ」

雛里は呼ばれて反射的に立ち上がった。

どうか、朱里ちゃんみたいに重い名ではありませんように……

「あなたの能力も朱里と同じく天に召されたとしか言えない奇才、特に戦略に限っては、朱里さえも手こずるほどの才を持っています。ただあなたはまだあまりにも幼く、己の能力をさらけだそうとしない。でもいつかあなたも自分の能力を開花させるときが来ると思いますが、いつかあなたの智謀を欲しがる主君が現れると、あなたはあの人のためにその智謀を隠すことなくこの乱世にはばたくでしょう。だけど、今はまだ小さい。そんなあなたに道号として鳳雛という名を与えます。あなたの真名のような雛から、いつか天を自由に羽ばたく鳳凰のように、自分の智謀を広めるあなたになることを祈ります」

「鳳雛……」

鳳凰の雛……私が……

「雛里ちゃん、すごい！鳳凰だって」

「う、うん！朱里ちゃんだって、伏してる龍だって」

「うん、これからも、道号に相応しい軍師を目指して頑張ろうね」

「…うん！」

朱里ちゃんは本当に嬉しそう。

でも、私はちよつと心配。

こんな号。私にほんと相応しいのかな。

私は本当にそんな器なのかな……

でも、朱里ちゃんと一緒なら、きっと大丈夫だと思う。

朱里はいつも私を守ってくれた。一緒にいてくれたから。

だから、朱里ちゃん、これからも私と一緒に居て。

> p f <

キラッ

「！」

「あはっ！」

「ちょうど時間のようですね」

流れ星が…落ちてくる。

一つ、二つ、

凄く多い。

たくさん星が落ちてくる。

「凄い！凄く綺麗です！」

「…綺麗…」

朱里ちゃんは騒ぎ出し、雛里もその姿に目を取られていた。

「…そう、こういう話を知っていますか？一つの流れ星がなくなる前にその流れ星を見つめながら三回同じ願いを願うと、その願いが本当に叶うと言います」

「ほんとですか？ねえ、雛里ちゃん、やってみよう」

「う、うん」

キラッ

「来た！」

「えっと、えっと…！」

「胸が大きくなりますように！胸が…」

「あわわ…雛里ちゃんそんなこと祈るんだ」

雛里はそう驚いていたが、残念ながら朱里の二度目に願いを言う頃には、流れ星は落ちていた。

「胸が……ああ、消えちゃった。難しいよ、三回も言うのって…」
「う、うん……」

「雛里ちゃんは何祈ってたの？」

「え、わ、私はまだ…決まって…ああ」
「思い出した？」

「…うん」

雛里は何か閃いたように明るい顔になると、今度はちゃんとするんだぞ、といわんばかりに次の流れ星が落ちてきた。

「仕える人が優しい人になりますように、仕える人が優しい人になりますように、仕える人が優しい人になりますように……」

三度全部言っつて目を開けた雛里の前にはまだ願いをした流れ星が見えていた。

「ああ……出来た、朱里ちゃん、私できたよ」

「……」

「？朱里ちゃん？」

「……！」

嬉しそうに朱里を見た雛里だったが、朱里も水鏡先生も何故か顔が固まっていた。

「どうしたの、朱里ちゃん」

「雛里ちゃん、あの流れ星、何か大きくない？」
「あわ？」

雛里は朱里の言葉にキョトンとしながらまた自分が願いをした流れ星の方を見る。

先より大きく見えた。

いや、大きいというか、

「あわわー！こっちに来てるー！？」

「はわわー！」

「二人とも落ち着いて……！」

二人が慌てる中でも流れ星はどんどん近づいてきた。

そして…

どーん！

「ひゃあああ！！」

「きゃー！！！」

流れ星が塾の近くまで来て落ちた。

流れ星が落ちた余波に地面が揺れて三人が先までお茶を飲んでいた卓の湯飲みが落ちて割れる。

やがて、揺れが静まり、また周りが静かになった頃、二人で互いを抱きついてブルブルと震えていた朱里と雛里は目を開けた。

「終わ…ったの？」

「そつみたい……！先生！」

「…私も大丈夫ですよ」

同じく姿勢を低くしていた水鏡も立ち上がった。

「流れ星、こっちに落ちてきた…」

「うん……」

「…二人とも今日はもう帰りなさい」

「先生？」

「私は星が落ちたところに行ってみます。危ないかもしれないから、二人とも来てはいけません。いいですね？」

「は、はい……」「……はい」

「それでは、二人とももう塾に帰りなさい」

そう言つて水鏡は先に流れ星が落ちた場所に向かうためにその場を去つた。

「雛里ちゃん……」

「朱里ちゃん、どうしよう…私が変なこと願つちやつて…流れ星さん、怒つちやつたかな」

「そ、そんなわけないよ。きっと偶然、偶然。雷だつて普段は遠くから落ちるけど、近くに落ちるだつてあるじゃない。この前も塾の前の一番高い木に雷が当たつて雛里ちゃん怖くて布団におも……」

「あわわー！その話はいわないでっばー！」

思い出すにも恥ずかしい過去の話を引き出されて雛里は顔を赤くしながらぼかぼかと朱里を叩いた。

> p f <

「でも、本当にどうしようかな」
「……………うん……………」

気になった。

流れ星が落ちた時は怖かったけど、どんな風になっているか見てみたい気分もそれほど大きかった。

「朱里ちゃんは行きたいでしょ？」

「雛里ちゃんは行きたくないの？」

「……………行きたい」

「だよな」

「でも、水鏡先生が来ちゃ駄目って……………」

「ううう……………」

二人とも先生に逆らったことがない優等生だったため、好奇心と先生の言う事を聞かないという罪悪感の間で彷徨っていた。

「……………」

「……………」

二人は互いを見つめ合う。

こういう時は一人が先に行くって行ったら他の娘はついて行くという。

が、誰が先にそれをいうかが問題だったのである。
そして普段ならそれは朱里の役目だった。

だけど、

「……………行くっ」

今日だけは鳳雛の方が少し早かったようだ。

「雛里ちゃん」

「朱里ちゃんも行きたいでしょう」

「……うん、一緒に行こう。バレて怒られても一緒だからね」

「……うん！」

二人はそうやっていつもみたいに二人手をつないで水鏡先生にバレないよう後を追いつつ始めた。

> p f <

「ううう…暗いよ…」

「そ、そういえば、今真夜中だったよお……」

と、好奇心に釣られて外に出てきたは良いものの、外は真っ暗。どこがどうなっているのは良く分からなかった。

「た、確かあつちだったけど……ひ、雛里ちゃん、どうする？」

「……怖い……でも……」

雛里は、答えの代わりに朱里の手をもつときゅつと掴んだ。

「……うん、行こう」

朱里も雛里の手を握り返しながら流れ星が落ちた方向へと向かった。

二人が向かう方向には塾の後門であって、良く水鏡先生や生徒たちが薬草を採りに行く時に使う小さな扉があった。

朱里と雛里がその扉をそつと開けると、壁にかかつてある松明を除けば、山に向かう道は真つ暗であった。もう流れ星も止み、月光だけでは木が厚く生えてあり、二人が怖がらないほど山道を照らすにはどうも足りなかった。

「く、暗い…」

朱里は何も見えない、昼時間なら良く薬草を採りに先生と行く山道をぼーっと見つめていた。そしていたら、

「朱里ちゃん」

「うん？」

雛里が壁にかかつてあった松明のうちの一つをとって手に持っていた。

「…行こう」

「……うん」

いつもならここまで積極的ではないはずな雛里ちゃんが今日はなんだがすつごく張り切っちゃってる、と朱里は思った。

でも、そんな友たちの少なからずの成長を微笑ましく思いながら松明を持った雛里が行く先を繋いだ手を離さずに付いていくのであった。

・

・

「この当たりのはずだけど……」

「先生の姿も見当たらない……もしかして迷っちゃったかな」

「あわわ……」

朱里が不安なことを言ってしまうと、雛里がその言葉に反応して身体をカタガタと震え始めた。

「だ、大丈夫だよ。まだ帰る道はちゃんと覚えてるし。それに……それに……」

そんな雛里を見て朱里はなんとか雛里が開き直りそんな言葉を考えるけど、やはりここまで来たことが間違いないのかと後悔してしまうのは朱里も同じだった。

「…雛里ちゃん、もう帰ろう。あまり深くまで行くと戻れなくなるよ」

仕方なく、朱里は雛里にそう言ってみる。

昼はいつも通る道としても、夜の真つ暗な道を松明一つの明かりに依存してこれ以上入るといふのは、小さい二人にはとてもできるものではなかった。

「……！」

「雛里ちゃん、どうしたの？」

「……なんか、聞こえる」

「聞こえるって……もしかして……」

山には夜に動く野生の動物たちもある。

もし、そういうものが近づいているのとしたら……

だけど、怖いことを考えつつ震えてる朱里に対して、雛里は頭を横に振った。

「……違うの。動物の鳴き声とかじゃなくて……もっと……」

ひゅー……ひゅー……

「ひゃっ！」

夜の森の中を響くその音は、口笛の音。

人の口から発してる、小さくて、高い口笛の音。

「……こつちだよ」

「あ、待って、雛里ちゃん！その声を探して行くつもりなの？」

音がする方へ進もうとする雛里を朱里は一度止める。

「だって、こんな森の中で口笛を吹いてる人なんてそう居ないし……
……もしかしたら、誰か森で怪我して助けを呼んでるのかもしれないよ」

「だからって、これ以上入ったら、私たちまで遭難しちゃうよ？他の人たちを呼んで来よう」

「他の人たちって行っても、水鏡先生はどこにいるか分からないし、他の人たちは皆寝てるし……」

「それは……」

「それに、普通助けを呼ぶとしたら声を大きくして叫んだりするの
に、小さい口笛の音しか聞こえないよ。もしかすると、凄く酷い傷
で声も出ないほどなのかも……」

「……」

雛里の訴えに朱里はそれ以上異議を唱えることができなかった。なにせこんなにも強く自分の意見を言う雛里は朱里でも初めてみるものだった。

もしかしたら雛里は、何かを感じているのかもしれない。自分には分からない何かを……あの流れ星が落ちた時から、なぜかこの雛里ちゃんは自分が知っている雛里ちゃんとは違う、そんな気がした。

「……わかった。でも、本当にもうちよつとだけだからね。私たちが迷子になったら本当に大変なことになるんだから」

「……うん、ありがとう、朱里ちゃん」

雛里が朱里が自分の意見を聞いてくれたことに微笑んで、また口笛が聞こえたところへと耳を傾げた。

ひゅーーー

また聞こえてくる。

さつきよりも声が小さかった。

それに、夜の森の中の風に混ざってどこから聞こえるのかよく分からない。

ひゅーーー

「……こつちな」

「よくわかんない……音が色んなところから聞こえるよ」

下手に動くこともできない。

ただどつっ立っていたって何も変わることもなかった。

ひゅー……ぴいー……

「！」

その時、以前よりも確かな音が聞こえてくる。

「こつちだよ」

と、雛里が差した場所は……

> p f <

絶壁のような傾斜の下り道。

いや、『道』ではない。そこは人が、増しては若い少女が行けそうな道のりではなかった。

「そ、そこに誰かいますかー？」

雛里ちゃんはその下り坂に松明を向けながら人の気配を探った。

「そこに誰かいたら長く口笛を二回吹いてください！」

ひゅー……

ひゅー……

朱里の声に反応して、口笛が短い間をおいて二度響いた。どうやらこの下に誰かいるらしい。

「どうしよう、朱里ちゃん。あんなところじゃ私たちだけじゃ無理だよ」

「…うん、とにかく、帰って誰か人を呼んでこないと……」

「うん……」

状況を大体把握した二人は、助けを呼ぶためにその場から去ろうとしました。

その時、

雛里ちゃんが踏んでいた地面が崩れて、

「雛里ちゃん!!」

「あ………」

雛里は絶壁のような下り坂へと落ちて行った。

さっ

たっ

ささっ!

ばさっ!

何度か地面にぶつかるような音がして、やがて静かになった。

「雛里ちゃん!!」

朱里は雛里が落ちていく最後に投げに行った松明を当てに下に落ち

た雛里の影を探そうとするも、暗い闇の中で松明の小さな光はあまりにも虚しいものだった。

「雛里ちゃあああん!!」

第一章 二話 流れ星（後書き）

この物語は、雛里ちゃんを主人公にするため、逆に朱里のことを引き離していくこととなります。そのところはご了承ください。

第一章 三話 出会い（前書き）

出会った二人。

二人の運命を変える今夜。

第一章 三話 出会い

雜里SIDE

「……………ううう」

痛い……

どうなったの？

いきなり地面が崩れて……………私……

「はっ！」

ぱっと目を開けて上を見あげてみます。

絶壁のような土の壁が見えます。

もう……………戻れない。

「うう……………うぐう……………」

どうしよう……………

くらい。朱里ちゃんも居ません。

どうして私こんなところまできちゃったのでしょうか。

あの時、朱里ちゃんが帰ろうって行った時帰っていたら、こんなことには……………

「ふええ……………」

怖くて……………泣いてしまいました。

泣いても誰も助けに来てもらえないのに、泣いてしまいました。
泣くことは、他に何もすることがない時にすること。

今私にできることなんて、この状況に恐れながら泣くことしかできませんでした……

「…おい」

「!?!」

ひっ!

誰か居る!

「だ……誰ですか?」

「……はあ……」

今確かに、男の人の声が聞こえました。

暗くて良く見えません。

松明を持っていたせいで、ちょっと暗さに目が慣れるに時間がかかりそうです。

「だ、誰ですか……?」

「……お前の下の……バッグ……」

「え?」

「……一番下を開けてみる」

私の下……

あ。

気づけば、私が倒れていた下は固い地面ではなく、何かちょっと柔

らかいモノになっています。

「……動けないのか？」

「い、いいえ、あの……」

身体は……大丈夫。ある意味奇跡だよ。あんなところから落ちたのにちょっと痛いぐらいで怪我はないみたいです。

暗くて声しか聞こえないその人は、どうやらさっきまで私が探していた口笛を吹いていた人でしょうか。

「あの、……大丈夫、ですか？」

「……」

返事がありません。

「あ、あの……」

「バッグの一番下……」

声は先言った言葉を繰り返していました。ばつぐつて……これのことですよね。

私が乗っているその物体は、かなり大きいものでした。

暗くてよく分からないけど、取り敢えずそれから降りてきて手で私に乗っていた場所を触ってみます。

表面はちよつとカチカチしていて、押すと中へと入ります。

何かを入れる箱みたいです。

そうやって手で探してみると、何か金属の飾りみたいなものにひっかかりました。

「あの、これ…どっやって開ければ……」
「……………」

また返事がありません。
もしかしたら…もう…

「そのまま引っ張ってみる」

引っ張る？

これを……

えいっ

ジィーという音を立てながら、開く音がしました。

「……中にランタンがあるはずだ」

「らんたん？」

「……丸いやつだ。多分、そこにはソレしか入ってない」

あの人の言うことが良く分からなかったけど、取り敢えず中に手を入れて回してみると、何か丸い円柱みたいなものが手に引っかかり
ます。

それを手にとったら…

カチッ

って音がしながら、いきなりその物体から光が出てきました

「あわわー！…！」

びっくりして持っていたモノをおとしてしまいます
落とした光を出すモノは地面に落ちて、光が指す先に人の影が見え
ました。

「……………」

> p f <

「あ

……………」

やっと見えた。

口笛を吹いていた人が…

「あわ、あ、あの……………」

「……………」

木に背中を任せて座っているあの男の人は、顔をこっちに向けて、
右手で反対側の脇の方を支えた姿勢でこっちを見ていた。
黒い上衣に、左手には白い上着が握られてあります。

「あの、それ…怪我したのですか？」

「……………肋骨が折れたようだ」

男の人は小さく呟いて、

「それを持ってきてくれ」

「あ、はい……………」

私は、先落としたらんたんというものをもつ一度手にとって、あの

人が座っているところまで行きました。

「……………！」

近づいた私を見たあの人は、先までは見えなかった私の姿を見たらびっくりしたように眉を潜めました。

「…子供だと知ったら…ここまで誘い込まなかったことを…」

「へ？」

「…済まない。俺のせいでは…」

あ。

この人はどうやら、自分が私たちを呼び寄せたせいで私が自分と一緒に遭難するはめになったのだと思っているようです。

「大丈夫です。それより、あの……………ちょっと見せてもらえますか？」

「……………大した外傷はない。ただ中から肋骨が何本折れたただけだ」

男の人をちゃんと見たら、他のところは掠った傷ぐらいで、大したことないようですから、手で支えているところが主な負傷のようです。

怪我したところを見せてもらおうとしたら、怪我をした男の人はそう言いながら見せてくれません。

「手で支えていても何も良くなりません。何かを入れて、ちゃんと支えを作っておかないと後で傷がひどくなるかもしれせん」

「……………」

そうは言いましたけど、暗くて何か支えにできそうなものも見当たりません。

「……お前に見せてなんとかなるものではない」

「こ、子供だつて見くびらないでください。わ、私だつて応急処置することぐらいできます」

「……お前は……？」

「私は、水鏡女学院の生徒で、名前は鳳統って言います」

「………」

また男の人が黙り込みます。

代わりに呻き声を出している様子が、どうも怪我しているところが痛くて話がうまくできないみたいです。

とにかく、早く誰か来てくれないと本当に大変なことになります。

「誰か！！誰か助けてください！朱里ちゃん！せんせいー！！」

大声を出しながら持っているらんたんを振ってみます。

とにかく、ここに居るってことを伝えなければなりません。

「誰か！！」

「………ほづとつ………」

ふと、男の人が私を呼びました。

「ちょっと待ってください、今助けを………」

「鳳統………ここはどこだ」

「はい？」

「どこだ？」

突然そんなことはどうして……

「ここは荊州の水鏡先生の私塾の水鏡女学院の近くの……」

「けいしゅう……」

「はい……あの……」

「お前は……鳳土元か？」

！？

この人、どうして私が教えても居ない私の字を……

「ど、どうして分かったのですか？」

「……うう……」

そしたら、その人はまた呻き声を出しながら顔を俯きました。

「だ、大丈夫ですか?!」

「っ!」

その時でした。

あの男の人はいきなり、

私を襲うように口を塞いで自分の身体に私の背中を密着させました。

> p f <

「うううっ!」

「静かに……」

何!?

どうなってるのですか？

も、もしかしてこのまま私を襲ったり……!

「ううううっ!」

「……っ！」

口を塞いでいた手を思いっきり噛んだら、男の人は痛みで手を放しました。

「な、ななななんですか？私はあなたを助けてあげようとしたのにどうして……」

「シーっ……」

私が訴えることも聞かずに、男の人は静かに噛まれた手の人差し指を口に付けます。

何なのです、この人って……
わけがわかりません。

「……おい、こっちに来て」

「い、ヤです！」

「いいから来い。気づかれた」

「え、気づかれ……」

アウーーーーー！！！！

「あわわーっ！」

お、おおおお

「狼の群れだ。………数がかなりある。いつもなら追い払われるが、この体じゃうまく連携がとれている狼の群れを相手するのは無理だ」
「あ、あわわ、あわわわー！！」

し、私塾の山に狼があるって聞いたことはありませんけど、こんな夜

にまさか本当に狼が……！

「ふ、ふええええー」

もう駄目……これじゃあ水鏡先生たちが来る前に、狼たちに食われて私……

「うるさい奴だ……」

「ふええー」

「おい、そこに俺の剣がないか？」

「ふえー……」

「……鳳士元……」

「ひいっ！」

泣いていた私は、男の人が叫ぶ声に怯えて我に戻りました。

「泣くな。今泣くことはお前が生きて帰ることに何の役にも立たな

い

「ひ、ひぐっ……」

「……」

アウー……！！

アウー！

狼の泣き声がまた聞こえます。今度はもっと近いです。
このままだと本当に……

「いいからこっちに来い」

「……っ」

怖い。

あの男の人に近づくのも
狼の群れも……

でも、

どっちも危ないのならあの人のところに行くと、生きれるかも知れない。

「う、ううう……」

私はしびれる足で一歩ずつまた男の人の方に近づきました。

「そこに大人しく座っている。目も閉じてる。声も出さな。いいな？」

「は……はい」

「……」

私があまりの恐さで絞るような声でやっと頷くと、男の人は少し眉を潜めて、

なでなで

「あわわっ？」

帽子越しで私の頭を撫でてくれました。

「な、なんですか？」

「……安心しろ」

「へ？」

「俺の責任だ。お前は俺が命を賭けても守ってあげよう」

「あ……」

その時、私は気づきました。

この人は悪い人じゃないんだって。

本当に、私のことを助けてあげようとしているんだなって。

「つと、きたな」

「！」

グルル

お、狼……

「親か……いや、様子見の奴か？」

グルル

一匹の狼が私と男の人を影の中から睨みつけていました。

「雑魚は失せろ。親玉はどこだ」

グルル

「飢えに目を眩んで群れの命を聞かず勝手に駆けてきた奴が雑魚でなければ何だ」

グルルルルルル

男の人の声を聞いたかのように狼の泣き声は更に荒くなります。

「……………すー」

グルルルルルー

でも、何故か狼はこっちに襲ってきません。
どうして……

こっちには女の子一人とと、怪我した男の人だけ。
最近この山にはあまり狼に食われそうな動物が残っていないはずで
すからかなり飢えているはずですが……

あウウウー！

ぐぐる！……

「大将のお出ましか」

男の人がそうつぶやくと、前に立っていた狼一匹が突然後に下がりました。

だけど、もう大丈夫なのだろうかと思ったその次、

「ひいっ！」

さっきの狼の倍は大きい狼の影がこっちに来ていました。

あ、あわわ、あわわ、あわわー！！
も、もう本当にどうしようもないです！
あんなに大きい狼なんて聞いたこともありません。

「鳳土元、落ち着け。相手に乱れた姿を見せては食われる」
「ひっ！」

男の人の静かな声に、私は更に怯えてしまいます。
この人は、一体何をしようとしているのでしょうか。

「随分と飢えているな。群れの連中も……お前は親玉で間違いないな」

……

大きい狼は何も言わずにこっちを睨みつけています。

「そうだな。このまま俺とこの娘をお前の群れに食わせることは難しいことではないだろう。正直、お前ほどの立派な親玉がある群れなら、私が傷ついてない身体だとしても勝てる自身がない」

男の人はそう狼に話をかけつづけます。

「けど、所詮は子供一人に人間の雄一匹だ。群れに食わせたところで、飢えを鎮めるほどにはならない」

グルルー

「見逃してくれれば、近いうちにお礼をしよう。群れがお腹いっぱい
に食えるほどの肉を用意してやる」

ぐルルーっ！

「……人間を信用しないか……なら聞くが、彼女が水鏡の弟子だとい
うことを知っているか？」

……

私の話を聞いた狼が突然唸ることを辞めました。

「そう、こんな山の中の狼だ。いくら人間が嫌いと言えど、それほ
どの人物を侮るはずはないだろう。この娘はあの水鏡先生の弟子だ。
この娘を食べば、彼の悲しみは言葉では言い切れないものだろう。
一瞬の口の満足のために犯すことには罪が深すぎると思わない
かい」

ガルルー！

「……」

「あ、あの、どう、なってるんですか？」

「……」

男の人が黙ってしまって、私は嫌な気がしてあの人を促しました。

「……俺を信用できないというのなら俺は食って構わん。だが、こ
の娘は見逃せ」

……

「だが、ここで俺を見逃せば、これの何倍の肉がお前らの腹を満たすことになる。俺一人食ったところで、どうせ群れで飢え死ぬものが出るのは同じはずだ」

……

大きい狼の唸り声が静まりました。

「あ、あの……」

「しっ」

私がか何か訊こうとしましたが、男の人はまた私を黙らせました。

グルルッ

「…感謝しよう」

最後の狼の泣き声に、男の人は安堵の息を出しながら頭を下げました。

アウウー……!!

ウウー……!!

大きい狼が上を見上げて鳴き声をあげると、森のあちこちからまた鳴き声が上がってきます。

「はぁ……うまくいったな」

「今…狼と協商をしたのですか？」

「まあ、そういったところだ」

「ど、どうやって……」

「狼はなかなか人間と同じところが多い。考えていることぐらい、狼の立場になってみれば分かる。…頭が回る親玉で運が良かったところだな」

どうってこともないかのようにそう言った男の人は先私自分から逃げる時に落としたらんたんを拾って上の方を照らしました。

さっき私が落ちてきた鉄壁のような坂が見えます。その上に上げれば人が通れる道ですが……

「遠いな。この負傷で上がるのは危険か」

そうでした。

狼から食われる危険が消えたとしても、まだ私たちが遭難されたって事実には変わりありません。

「……あつ！」

「どうしたんですか？また胸が痛んで……」

「さっき親玉に人探してくれと頼んどけばよかったーああ俺って奴はいつもこう……！」

「あわわ……」

「ああ、この馬鹿……」

そう言いながら頭を抱える男の人の姿を見たら……

「え、えへへ……」

「？」

「あ、いえ、ごめんなさい、でも、ちょっと思ったのと違うなあと思ひまして……」

思わず笑ってしまった私を見て、男の人はキョトンとした顔で私を見つめました。

「……鳳土元」

「あ、はい、…私は姓は鳳、名は統、字は土元って言います」

ふと自己紹介がまだでしたので、危険も去ったところで、私は改めて自分の名を言いました

「やはり……か」

「あの、ところで、先私がまだ字もいっていないのに、どうして私の字がわかったのですか？」

「……その質問に答える前にだ……」

男の人は凄く難しい顔になりながら、

「先水鏡私塾と言ったな。それは確かに司馬徽の字だ。そしてお前は鳳統土元……更お前は、先ここが荊州と言っていた」

「は、はい……あ、そういえば、あなたはお名前は……」

「……北郷一刀だ。姓は北郷、名は一刀、字はない」

「北郷：一刀さん」

不思議な名前です。

字もないって珍しいですし、二字姓に二字の名前……。

「どうしてこんなところだ……」

「……………」

男の人は言葉に迷っているように視線を泳がせました。

「分からない。もしかすると、俺は今夢の中に居るのかも知れない」
「夢？」

突然何を言っているのでしょうか。

「俺は浅草に行く電車に乗っていた。そこで突然地震の警告で電車が急停止して、俺はその衝撃で倒れた……そこで気がいたら、その地面に伏せていた。……お前はどっ思う？」

「あわわ……………」

正直、何を言っているのかさっぱりわかりません。

「とは言つが、この痛みはかなりリアルだ。きっと夢ではない。それに、夢だとしたらお前みたいなかわいい娘が俺の夢に出てくるはずもない」

「あわわ?!」

か、かわいいって

初めて会う男の人にかわいいなんて言われちゃいました！

「ということとは……やはりこれが現実と認めるべきだな……鳳土元、今の皇帝は誰だ？」

「……>>かあ<<」

「……鳳土元？」

「あわ！？は、はいっ？」

「……どうした？」

「だ、大丈夫です。なんでもありません」

「……」

あまりの言葉にまた我を失っていました。

一刀さん……でいいのでしょうか。

一刀さんは私を心配げに見つめてくれますが、何かあんな言葉を言われた直にそんな顔をされたらちやんと顔を見れないです。

「……本当に大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫でしゅ！>>カジツ<<ううっ！」

「大丈夫か？！」

かみました！

盛大にかみまひた！

「ううう……」

「……ふっ、面白い娘だな」

「ひ、酷いでひゅ！」

「あ、すまん、それで、今の皇帝は誰だ？」

少しばかり笑った顔を直ぐ平然に戻して、一刀さんは先の質問を繰り返しました。

「劉宏……です。あのどうしてそんなことを……」

「……まだ時間はあるのか」

「あの……」

「鳳土元」

「は、はい」

淡々としていた一刀さんの声が何かを決めたかのようにはっきりとした声に変わりました。

「俺は、どうやらこの世界の人間ではなさそうだな」

「……へ？」

「先ず、俺はこの大陸の人間ではない。俺が住んでいたところは大陸で東へ進み更に海を越えたところにある。二つ、俺はこの時代の人間ではない。俺はこの時代から約1800年後に生まれた人間だ。三つ、俺の時代で、鳳土元という人間は男ということにやっている。よってここは俺が住んでいた世界とは場所も、時も、歴史も全く違う別の世界ということになる。何か質問はあるか？」

……

この人は、何を……

「……はい」

「何だ？」

「……頭は大丈夫ですか？」

先ずそこから確かめていきましょう。

> p f <

「負傷があるのは胸の方だけだ。が、頭を打った記憶もなくてはない」

「……」

やはり、ちょっと頭がおかしくなったのでしょうか、この人。話し方もちよつと変ですし。

「……鳳土元、お前は俺の言うことを信じていないな」

「はいっ、いきなりそんなこと言われたって信じられるはずがありません。まずは言っている相手が何か勘違いをしているか、それともどこか頭がおかしな人ではないのかと確かめるのが普通です」
「合理的だな。だが、これを見てもそんなことを言うのか？」

そう言いながら一刀さんは手に持っていた光を出すらんたんと言ったものを見せました。

「こんな火でもないのに光だけを発するモノがこの大陸に存在するか」

「それは……」

確かに、こんなもの、見たことも聞いたこともありません。まるで、この時代のモノとは思えません。

「そしてあのバッグも、この時代の識物ではない」

「……確かにそうですね」

先触った感触：ガチガチなのが麻のそれと似てましたけど、それはまた違う感触でした。

「ポリエステルと言った未来の識物だ。この服も、あれと同じ材料を持って、少し細かくして作られている」

「……」

一刀さんは地面に落ちてあつた白い上着を私に出しました。それを触つてみると、凄く柔らかそうな感触です。これとあれが同じ識物で作られたとは考えにくいです。

ですが、この辺りでは見ないものという事は確かに納得できます。でも、だからって一刀さんのことを信じることはまだ早いです。

「……更に、俺は聞いてもないお前の字を知っていた。それは、俺の時代でお前のことが歴史に残され物語られているからだ」

「！」

「鳳統土元、諸葛亮孔明と共に司馬徽が劉備に紹介した荊州稀代の天才たちで、各々鳳雛、臥龍と呼ばれた。司馬徽曰く、その二人のどっちかを得ることができれば天下を手に入れられるだろう、そう評価している」

「……………>>パクパクつ<<<」

私だけではなく、会つてもいない朱里ちゃんのことまで……………それに今日与えられたばかりの道号まで知っていました。

もしかして……………この人は本当に……………

「そうか。鳳雛……………中々面白い話だ」

「一刀さん……………分かりました。一刀さんを信じます」

「…ありがとう、鳳土元。俺は俺のことを信じてくれる人には嘘は言わない主義だ……………ところで一つ言っておこう」

「何ですか？」

「先から遠くからだが人の声が聞こえてくる。さっきのお前の連れが誰かをよんできたのではないか？」

「！」

……………ちやーん

雛里ちゃんーん

雛里いいー！

聞こえる！

「朱里ちゃん！！先生ー！！！」

「雛里ちゃん！」

「雛里！」

「先生ー！こつちです！」

私が残っている力一杯で思いっきり叫んだら、あそこからバサバサつとする音が聞こえて、やがて……

バサッ

「あつ！雛里ちゃん！」

朱里ちゃんが……

「朱里ちゃん！！！」

「雛里ちゃんーん！！！」

朱里ちゃんを見た私はその瞬間、朱里ちゃんに向かって走って行って、朱里ちゃんをガシッと抱きつきました。

「朱里ちゃん……朱里ちゃんーん！」

「よかった。雛里ちゃん……本当に……無事でよかったよ」

「う……ふええー！」

朱里ちゃんを見つかつて安心できた私は、思わず先まで我慢していた涙を流してしまいました。

「雛里」

「！先生ー！」

先生も見えてきて、私は今度は先生に抱きつきました。

「ごめんなさいー！ごめんなさいー！」

「いいのですよ。二人の気持ちを考えずに無理矢理帰らせようとした私の間違いでした……本当に無事で良かったです」

「先生……」

朱里ちゃんと先生と私は、そうやって暫く三人で抱きついて泣いてばかりいました。

> p f <

「……っん」

「！」

ふと、呻き声を聞いて、二人に抱きつかれて泣いていた私はパツと気がつきました。

「あ、先生、朱里ちゃん。あそこに、怪我をした人が居ます。胸の肋骨が折れて、動けないままずっとここに居たそうです」

「はわわ！」

「まあ…大変ですね」

先生は再開の嬉しさは少し後にして、一刀さんのところに行きました。

「大丈夫ですか？」

「……予測するに、あなたが水鏡先生と見て間違いないでしょうか」

「はい、そうです。あなたは……」

「……北郷一刀と言います。少しばかり事故にあって……夜中に助けを求めていたことが弟子の娘を危険に晒すような嵌めになって申し訳ありません」

「それよりも、今はあなたの方が重要です……いつからここに居たのですか？」

「……気がついた時は既に暗くなつた後でした。詳しい時間は……」

「急いで治療をしましょう。取り敢えず、何か支えになれるものを詰めて、私たちの塾まで案内します」

「……お助け感謝します」

一刀さんはそうやって先生の支えで座つた場所から立ち上がりました。

「朱里、雛里方をのちよつと手伝ってください」

「はいっ、雛里ちゃん、行こう」

「うん……あ、待って」

大して怪我したところはなかったのですから、朱里ちゃんと一緒に歩いて行こうと思つたら、ふと一刀さんの荷物箱が残つてあるということに気づきました。

これ、持っていった方がいいよね……ちよつと重そうだけど……

「よいつしよつと……あ」

以外と軽い。

良くみたら下に車輪がついてあって地面に転がせながら持つていけるようになってる。

「雛里ちゃん、それは……？」

「一刀さん……あの男の人と一緒にあった荷物……朱里ちゃん、これ持つていくの手伝って」

「うん、分かった」

私は朱里ちゃんと一所にその箱の柄を掴んで先生が行った後を追いました。

・

・

・

第一章 三話 出会い（後書き）

TINAMIでこれを投稿してる時はページを分けることができていたので>pf<で分けていますが、ここでは消そうと思うと話の分けどころがわからなくなるので、このままで行かせて頂きます。
>pf<で一度話を斬るか、場面が変わるツ的な感じになると思ってください。

第一章 四話 理解し合う(前書き)

大きなものを失った後、新しい大切なものを掴むことができる
れば、失うこともそう恐れることではないのかもしれない。

第一章 四話 理解し合う

「本当に行くん、かずびー？」

「……ここにもう当てがない」

祖父さんが亡くなって二年が過ぎた。

俺は、祖父さんと後を継ぎ道場を運営した。大体のことは既に俺が管理していたので（会計全般や修練の進み方など）それほど衝撃はなかった。

祖父さんはこんなことを随分前から準備していたのだ。

老いた自分がいつ亡くなっても大丈夫なように、俺を準備させていた。

……その事実が、俺を更に惨めにしたことも知らずに。

そして、高校卒業のこの日、俺は制服のまま旅に出る。

「修練に修練を重ねた。が、祖父さんが言っていた境地に上がることができなかった。祖父さんの日記に書かれてあった場所に行けば手がかりがあるかもしれない」

高校の教育を終えた俺は、担任が止めることも聞かずに大学進学をやめた。特に行きたいところもなかったし、そんなことよりももっと重要なことがあった。

祖父さんから受け取ったこの剣。

祖父さんの部屋にあった過去の書籍らを調べたところ、この剣の名や氷龍、神殺し氷龍の名付けられていた。そして、戦国時代の終わり頃、この妖剣を封印するために作られたのが、北郷家の家宝とされる氷龍の鞘、鳳雛。

二つは違うところから来たものの雌雄一体でその力は同等。氷龍は

人を殺す殺気に満ちてあり、鳳雛もまたそれを止めるべく氷龍を外に出すことを許さない。

剣を抜こうとする者が剣を扱うに足りない者であれば、剣の思惑ままに操られる羅刹と化して、人を殺すだろうと、本ではそう書かれていた。鳳雛はそんな事態を止めるための安全装置だった。

が、その安全装置を解く方法が見つからなかった。

俺がまだ未熟だということだろうか。
わからなかった。

ただ、このまま祖父さんがくれた宿題を解けないまま道場の師範をやっていたところで、俺はいつまでも死んだ祖父さんがいる場所にたどり着くことができない。そんな気がしてならなかった。

それで、結局俺はあの鳳雛が作られたと書籍が残しているところに行ってみようと思った。そこに行けば何かが分かるかもしれない。

「そつか……まあ、かずぴーは一度決めたら捻らないしな。しかたないわ」

「…お前が言うな」

残り高校二年か散々振り回されていたことを考えると、この剣が抜けるようになった暁には最初にお前をこの剣の鑄にしてあげたいくらいだ。

……とは言え、

「ありがとう、及川」

「そういうなって。親友だろ？」

「ああ……」

祖父さんまでもが亡くなり、及川は俺の気持ちを分かってくれる唯一な存在だった。

及川がなかったら、俺はもうとっくにこの地を離れていた。

「で、いつ帰ってくるん？」

「計画は……二ヶ月ぐらいだ。何か手がかりがあればもっと長くなるかもしれない」

「うーん、結構長いな。と見せかけてー」

「うん？」

何だ？

ドーン！！

「そんな長い旅をするかずびーのための旅行鞆を用意してきたぜー！安心せな。中身はもうちゃんと詰めたるから」

「要らないことをやるな」

「ちなみに経費はおまえんちから落とした」

「お前また勝手に人の家の金取っていったのか！」

「暗証番号を1111にする馬鹿に言われたくねー」

くっそー、祖父さん、数字には弱かったからな……

「まあ、そう言うなってちゃんと必要なもので詰めたる」

「……わかった。持って行こう」

「ああ、一番大きいのは開けない方がええでー。ドガンとするかも知れないから」

「どんだけ詰めてるんだ……後お金はどれだけ使った」

「……………円」

「窃盗で訴えるぞ、おい」

「ちゃんと必要なもの入れてるよ。例えばこの一番下には……ほら、携帯のランタン！」

「俺は洞窟探検に行くんじゃないねえ」

後でこ・ろ・す

「そろそろ時間ちゃうか？ 駅まで送る？」

「いや、いい。ここで別れにしよう」

「うーん、学園が寂しくなるな」

「ふっ、そう思う者は誰も居ない」

「いや、俺はそう思ってるでー」

「及川のことなら信じてあげよう」

「嘘ウサ」

「だろうな」

もうそろそろ行かないと時間に間に合わないか。

「……」

「いってきーな、かずぴー」

「あぁ……」

俺は後を振り向かずそのまま前に進んだ。

「さようなら、かずぴー、また会えるかしらへんけどな。応援してるぜ」

・
・
・

・

・

> p f <

ちゅんちゅん

「……………」

朝、光が朝を告げて俺は目を覚ました。

「……………嫌な夢だったな」

及川が出てくるなど、悪夢とさえ言える。

「そして……………これが現実」

周りを見てみると、まるでこの時代の部屋とは思えない構造。

眠る寝台に机一つに椅子が二つ。地面は石で舗装されてあつて外からの窓に格子で奇妙な形が飾られている。

昨日、水鏡先生たちに運ばれ、ここに連れられた俺は、水鏡先生に簡単な治療をされ、ここで寝かせていただいた。

昨日の出来事は、本当に思いの他の災難だった。

気がつけば倒れていて、電車での事故によって肋骨が折れていて、

真夜中の山で遭難。

鳳土元、あの娘が来ていなければ、俺はあのまま山の中で朝を迎えていたやもしれない。

そうか、鳳土元。

そして、昨夜の話によって、俺がいるこの場所が俺がいた世界ではないことを確信した。

違う場所、違う時間。そして違う歴史がここにあった。

三国志の舞台に輝く英雄のほずの人たちが幼い、しかも女の子であったことに少なからず違和感を覚えていたが、俺は見ても信じないほどの馬鹿ではない。

「っ」

まだ、胸が少し痛むが…手当がいい。これぐらいなら動けるはずだ。取り敢えず外に出てあの人たちに感謝の言葉を改めて……

「……………」

いや、待て。

昨日あの娘がなんと言っていたっけ。

>>私は、水鏡女学院の生徒で、名前は鳳統って言います<<

「……………」

がらっ

「「「「「「「「「「あっ」

「……………」

部屋を開けると、そこには見慣れぬ女性たちが立っていた。

「……………」

「あ、ああ、あの」

がらっ

門を閉じてふと窓のほうを見る。

「ひゃっ…！」

「……………」

誰かが急いで頭を隠した。

この部屋は囲まれている。

「…参った」

俺はどうやらこの「女」学院にとても迷惑人になりそうな予感があった。

> p f <

「皆さん、そこで何をしていますのですか！」

「ひゃっ…！」

「水鏡先生！」

「あの……その……あはは」

「騒がしくしないで、自分たちの日課に戻りなさい」

「「「ご、ごめんなしゃい！」」「」

外が騒がしくなると思ったら静かになり、

がらっ

外から門を開いて昨夜の水鏡先生が入ってきた。

「ごめんなさい。山の奥の私塾で、年頃の女の子なのにあまり男の人に会うことがないもので……」

「……自分はどうかやらこの場所に長くいては迷惑になりかねないようですね」

水鏡先生、姓名司馬徽。

朝の光を浴びてるその人の姿は中年……というには少し若い姿だった。

綺麗な顔で、それに先ほどの女の人たちを一言で動かせるほどの力リスマを持っている。

余程人望がなければこんなところで女性として学問を広げerことは難しいだろうと思いつながら、俺はそう言った。

「とんでもないです。雛里ちゃんから話は聞きました。狼の群れにあつたとか……」

「……それもまた自分のせいです。助けを呼ぼうと吹いていた口笛が、人以外のものを呼んでしまったのでしょう」

考えてみると、夜中に口笛を吹くなどありえない考えだった。

「ただ、あまり大きい声を出せば胸が痛んで仕方がなかった。」

「山で遭難をして助けを求めることは当然のことです。それよりも怪我の方はどうですか」

「もう痛みは感じません。改めて本当にありがとうございます」

「大したことではありません。ですが、本当に感謝すべき相手は私ではありません」

「……」

「そう、鳳土元だ。あの娘があんな夜中にあんなところに来なければ……俺は……」

「そういえば、何故彼女はあんな夜にそんな山の奥に……？」

「それは……私の責任です。あの娘たちと一緒に流れ星を見ていたのですが、そのうちいくつかがこっちに落ちてきて、それを観察しに行った私があんな娘たちから目を離れた祭に、あの娘たちも好奇心に負けて塾を出てきたのでしょうか」

「なるほど……彼女は今……」

「昨夜の行動への罰も兼ねまして……今は倉の掃除をさせています。といっても、日課として朝に何かはいつもやっていますので大した罰にはなっていないんですけどね。寧ろ、あの娘たちは今倉の掃除をさせた方がためになるのです」

「……？」

「どういう意味だろうか？」

「と……倉か……さすれば」

「他の娘たちからの……」

「ええ、男の人と一緒に来て昨夜既に大騒ぎになっていますから」

どうしたことかと塾の生徒たちが集まって凄まじい勢いで質問をし
てくるというわけか。

それであまり人が寄らない倉の掃除を…

「本当に色々と迷惑をかけてしまってますね」

「誰もそんなふうには思っていないせん。さあ、それではこつちの話
は終わりとして…あなたのことを訪ねても宜しいでしょうか」

「あ、はい」

さて、困った。

俺の現状をありのまま伝えたところで、この人がそのまま信じてく
れるとは思いがたい。

どうすれば……

うん？

「あれは？」

「あ、昨夜雛里たちが持ってきたのですが…あなたのモノだと聞いて
います」

及川が持ってきた旅行用の鞆。

「何なのですか、あれは？」

「……私物です。中身は……？」

「開けてはいません」

あそこに何か…決定的に俺のことを証明できるものはないだろうか。

鞆に近づいて立っている鞆を横にさせて一番大きいところを開けよ

うとしたが、
及川が言ったことが何か気にかかって他のところを開けることにした。

一番下のところにはランタンしか入ってなかった。そのランタンは今俺が寝ていた寝台の横の小さなテーブルに置いてある。

及川、この中に何か俺のためになるようなものを詰めてくれたと言っていたな。

頼むから、頼りになるものが出てくれればいいのだが……

と思いながら、俺は下から二番目のところを開けてみた。

ジイー

> p f <

「……………」

カメラだった。

ポラロイドカメラ。

「……………」

後に何かカードがある

『これで何かあったら取っておくとえーで。ああ、電池とかきつと
かずぴー使えないだろうから完全フィルム式の古い奴でいれといた。
ポラロイドフィルムはたくさん入れたるからたくさんとって沢山楽
しんでや』

「遊びに行ったわけじゃねえ。つつかこれ俺の金で買ったんだろ
写真なんてとるかよ。」

でも、今では最高のアイテムだ。

「それは…なんですか？」

「……水鏡先生で…宜しいでしょうか」

カメラにはフィルムが入ってあった。

これで丁度いいだろう。

「自分が誰か先ず聞きたいと思えますが……先ず俺の名前は北郷一
刀と言います。姓が北郷で、名前が一刀です」

「北郷…一刀さんですか？」

「はい、そして、自分はこの世界の人間ではありません」
「………」

俺の話法が一般人に対して問題があるということは分かっているが、
言う度にそんなに狂人を見るような顔で見られると流石に少し傷つ
く。

「自分は生まれたのはこの大陸から東に行ったところの日本と言っ
島国です。自分はその国で1800年ぐらい後に生まれます」

「……北郷、さん」

水鏡先生が口を開けた。

「あなたのことは雛里から昨日大体のことは聞いています。雛里も
あなたに同じことを言われたと聞いています」

「自分がそう言いましたから」

「なら、それを証明できるのですか？」

当然、これほどのふざけた話をするには、ふざけたぐらいありえない証拠が必要だろ。

「これなのですが……『カメラ』というものです」

「かめら？」

「はい、その場所の姿をそのまま写して残しておく機械です」
「……」

「よく分からないようですから、一つ試してみましよう」

俺は椅子に座っている水鏡先生ご自分に向けてカメラのシャッターを押した。

ガチっ！

「！」

水鏡先生は驚いたような顔をするが、フィルムがカメラから出てきて、しばらくすると……

「これは……！」

「こつこつ装置です」

そこには、水鏡先生が椅子に座った写真がそのまま映ってあった。当然のことだが、水鏡先生は驚きの様子を隠さなかった。

「……真を写すとして写真と言いますが……写真が良く似合う方です
ね」

ちよつとフィルムが小さいけど……見た感じよりちよつと若く見える。きのせいかな？

「それで、これなら自分がこの世界の人間ではないという証拠になるでしょうか」

「……………そう…なりそうですね」

少し呆気無い顔だけど、どうやら信じてもらえそつだ。
俺は俺のことを信じてくれる人を最も信用する。

> p f <

「それなら北郷さん、あなたが別の世界が来たということは分かりました」

「はい、ですが、どうやってここに来たのかは自分にも分かりません」

「それなら、私が答えることが出来ると思いますが…」

「はい？」

「昨日、私や雛里たちがあの山に行ったのは、あの夜流れ星の一つがそこに落ちたからです」

「流れ星？」

「はい、そして、私が昨夜流れ星を探したところ、何の跡もありませんでした。そしてあなたがそこに居たのです」

「……………つまり、その流れ星が自分だと、そう思っているのですか？」
「可能性は…ないとは思いません。何せ別の世界から来たと言われる人ですから」

別の世界で流れ星で落ちてくるようなハイパーテクノロジーは俺の

時代にはありませんが……
だけど、他の代案がない以上、そう思った方が正しいのかもしれない。
い。
だけど、何故？

何故俺はこんなところに落ちてきた？
何のために……

「あなたは、これからどうするのですか？」
「……分かりません。自分は……ちよつとした修行のために……！」

そう言えば……

ない！

鳳雛が……ない。

「昨夜……そこに剣が落ちてませんでしたか？」
「剣……いいえ、そんなものは……」
「……」

及川、お前の鞆はあるのに何故一緒においた俺の剣はいないんだ？

「大事なものののですか？」

水鏡先生が焦っている俺を心配そうに見ている。

「……家宝です。亡くなった祖父さんの遺品でもあります」
「ああ……」

先ずはこの状況、俺にとっては分からないことが多すぎる。知っている人など誰も居ない新しい世界に一人で漂流しているようなものだ。

……違う。それは当分昔から、生まれてきてからの話だ。

もしかすると、この世界でもあの世界でも、俺の居場所がないのは同じなのかも知れない。

家族を失い、唯一の友も遠いところでおいてきた。更に残り人生の全てとまで思っていた祖父さんの家宝までも失ってしまった。

正直、絶望的だ。

「……朝食を持ってきましょう。先ずはそれを食べて、今後のことについてじっくり考えてください。それまでにはこの私塾であなたを保護します」

「……お気遣いに感謝します」

見えない。

この先のこと……目標が見えない。

> p f <

昔から、一つに集中したら他のことを知らなかった。

一度決めたことを諦めない、離さないまま、それを成し遂げようとしていた。

だけど、一度もそれをちゃんと終わらせてみたことはない。

だって、現実に終わりというものはないのだ。死というもの以外には……

俺の記憶の中の父さんという存在は、既に生きることを諦めた人だった。

いつの間にか父さんという存在が自分の前から存在を消して、母さんはいつも泣いていた。

俺は、母さんのことがとても好きだった。だからそんな母さんを見たくないと思った。だから、俺は母さんを笑っていられるように母さんが好きだろうと思うことは何でもした。

厨房の仕事を手伝いから始めて、いつのまにか朝御飯を作って朝起きないお母さんの前に送ったり、外を出歩いて拾った五百円の玉をお廻りさんにあげないでそのままお花屋に行つて、母さんが大好きだった桃色の薔薇を買ってきて母さんのベッドの側の花瓶に飾ったり、歩くことができなくなった母さんの肩や脚を毎日に丁寧に揉んであげると、母さんはそんな俺の姿を見ながら力が入らないその顔に表情を作ってくれた。

けど、言った通りに、俺は一度も自分が夢中になったことをちゃんと成し遂げたことがなかった。

ある日、桜が落ちる頃だった。

家は四方が塞がれていて、母さんは好きな桜を見ることができなかった。

俺は、家にあつた大きいにバケツを持って外に出て、そこに落ちてくる桜の花びらを少しずつ集めた。拳甸にはまだ落ちてもない花びらを落とそうとして近所で見えていた祖父さんに怒られたりもしたが、結局そのバケツは桜の花びらで一杯になった。

その花びらを母さんの寝台に飾ろうと。母さんに春が来たことを告げようと、と思った俺が急いで家に戻った。

だけど、母さんはそんな俺のことを待ってくれなかった。

.....

一年も.....経たなかった。

あんなに頑張ったのに、母さんは一度も俺を見てくれなかった。ただ、俺の顔から映る父さんの顔を見ていた。それだけ。

それから.....

コンコン

> p f <

雜里 side

「誰なの、あの人？」

「昨日あの人と何かあったの？」

「ねえ、名前は？どこから来たの？」

「あ、あわわ.....」

な、何なの？どうして皆大勢でこんな塾隅っこの倉まで来て.....

「はわわー！皆掃除に邪魔です！早く出て行ってください！」

朱里ちゃんが止めることも聞かずに、皆私たちに質問をし続けます。

「ね、名前はなんだってー？」

「ほ、北郷一刀さん？」

「姓が北で、名前は郷で字が一刀？」

「うっん、姓が北郷で、名前が一刀、字はないって」

「珍しいわね」

「どこからきたって？」

「そ、それは……」

「ねえ、あの人と昨日何かあったの？」

「何、何かって？」

「きゃはー、そんなの決まってるじゃない……あんなことか……そんなことか！」

「あ、あわわー」

そ、そんなことなんて……

「皆さん！」

「ひいっ！」

「水鏡先生！」

やっと、先生が来てくれました。助かりました！

「元直、あなたは今日の朝御飯の担当でしょ？何故ここに居るのです」

「きゃはー、ごめんなさい」

「他の娘たちも、朱里と雛里の邪魔をしないでさっさと戻りなさい！」

「……は、はい」「」「」

他の生徒たちが皆倉から出て行って、私と朱里ちゃん、水鏡先生だけが残りました。

「二人とも大丈夫ですか？」

「は、はい……」「大丈夫です」

「はあ……こんなにも早く噂が広がるとは思いませんでしたね……やはり女の子ばかりのところですからそういう噂は広まりが早いようです」

「あわわ……」

皆、男の人だから一刀さんのこと興味深く思ってるのかな。

「二人とも、今日授業は休んでもいいですよ。当分は、二人が居ると騒ぎを起こしやすいですから、自分の部屋で勉強してもらえますか？」

「「はい」「」

まさか、こんなに大変なことになるだろうとは思いませんでした。

正直、昨日の出来事が未だにちょっと信じられません。

他の世界から来たという男の人が居て、光を出す機械を持っていたり、飢えた狼たちを話し合いで帰らせるなど……何かの夢を見ていたようです。

「それと、雛里」

「はい」

「北郷さんに朝食を運んでもらえますか」

「あわっ？……は、はい……でも、どうして私が……」

突然の言葉にちょっと追いつけなくて問い返したら、

「「どうやら、突然の状況に、あの人も少し困っているようですから、

最初に会ったあなたがなんとか良く話して落ち着かせてください」
「……はい」

良く分からないけど、取り敢えず断る理由もないから頷きました。
それに、昨日はあの騒ぎでまともに話もできませんでした。だから、
今日はこの機会に、ちゃんとお話してみたいことがあります。

「先生、私も行っていいですか？」

「構いませんが、大丈夫ですか、朱里？」

「はい」

朱里ちゃんも一緒に来ると言って、水鏡先生はそれを他の言葉は言
わずに許してくれました。

「朱里ちゃん？」

「私もあの人に話したいことが山ほどあるの。いいでしょう、雛里
ちゃん？」

「…うん」

何か、ちょっと朱里ちゃんの様子が変だけど、大丈夫かな。

> p f <

私たちの朝食を部屋で食べた後、一刀さんの朝御飯を持って塾から
離れに立てられている建物まで来ました。

普段先生が遠くから来たお客さんを泊めるために建てたものです。

「一刀さん？」

「雛里ちゃん、名前で呼んでるの？」

「うん？あ、うん……何か北郷さんというのはちょっと変だなと思
って……」

「……」

何か、朱里ちゃんの顔がちょっと怖いんだけど、気のせいかな。

がらっ

「……一刀さん？」

「……」

一刀さんは寝台で横になっていました。
寝てるのかな

円卓に朝御飯を置いて近づいてみました。

「一刀さん？」

「……1800年前の中国大陆の荊州の司馬徽が開いている私塾
の裏森に流れ星になって落ちて来た……それがこの世界の俺の始め
だ」

「……はい？」

一刀さんは腕で顔を隠していました。

「あまりのふざけた状況に笑いも出ない」

「……」

ゆっくりと一刀さんの腕を一刀さんの顔から離せたら、

一刀さんは泣いていました。

「一人一人俺の前から去っていくと思っただら……今度は俺から皆と離れてしまった。もう俺は本当に一人になってしまった」

「一刀さん……」

「何をすればいいのか、俺はこれから何をしていけばいい」

一人、

まるでこの世界で自分一人だけが残されてしまったような気持ち。きつと一刀さんはそんな気分になっていると思います。

自分が今まで生きてきた場所。一緒に生きてきた人たち。それを全て一瞬に失ってしまった。

私は凄く幼い時にここに来ました。

両親は私が住んでいた村を襲った盗賊たちから私を守って亡くなられたを聞いていますが、私はお父さんやお母さんのことを全然覚えていません。

だけど、分かる気がします。

一人になってしまった孤独感。

それはきつととても堪えられそうにない悲しくて、辛い感情のほずです。

人は一人では生きていけないのですから。

「一刀さん」

私は自分も知らないうちに一刀さんの大きい手を掴んで一緒に泣いていました。

「……………鳳土元？」

「……………大丈夫です。一人じゃありませんし、きつとここに来た理由

もありません。ですから……」

「何故泣いているんだ？」

「分かりません。…分かりませんが……」

「……」

「私、一刀さんのこと良く分かりませんが……一刀さんは私が初めてお話してみた男の人ですが、それでも思ったような怖い人じゃないって分かりましたし、それに……」

私って、何言ってるんだろう。

「昨日、私を助けてくれたとき、カッコいいというか、頼もしく思ってたから、だから、一刀さんが泣いてるとか悲しんでる姿は……あまり見たくないです」

「……」

……あわっ！

「あわ、あわわ、いえ、これは、その……あの……」

何か口が勝手に走っちゃったけど、気が付いたら本当になんてこと言っちゃったの、私？

昨日会ったばかりの人なのに、こうしたらまるで……

「ありがとう」

「……へっ」

ふと前を見ると、一刀さんは小さく微笑みながら私を見ていました。

「少し、鬱になっていたようだ。心配をかけてしまって済まない」

「い、いえ……」

その姿がまた少し……綺麗で、私はつい帽子を被って顔を隠してしまいました。

「あの…！」

「あ」

その時、一緒に来ていることをすっかり忘れていた朱里ちゃんが刀さんに声をかけました。

つて、今の話朱里ちゃんも聞いちゃったの!?

> p f <

一刀 s i d e

鳳土元が顔を俯いてしまったので、俺は何か彼女に気に障ることをいってしまったのかと訊こうとしたが、ふと彼女と来ていたもう一人の女の子、昨夜水鏡先生と一緒に、鳳土元を探しに来ていた女の子がそこにいた。

「お前は……」

「昨日は騒がしくて紹介できませんでした。私は姓は諸葛、名は亮、字は孔明と申します。今後お見知りおきを」

彼女が諸葛亮か。

鳳土元と同じところで…水鏡先生の下で習っているのか。

俺が知っている三国志とは益々違うな……。

だけど、おおよそそういう流れというのは分かった。

「俺の名は……」

「知っています。北郷さんですよ」

「……ああ」

孔明の言い方は、何故か俺を凄く警戒しているように覺えた。だけど、それも当然だろう。寧ろそういう見方が正しいのかもしれない。

俺は女性しか居ないこの学院に入ってきて、しかも出身地や何故あんなところに夜一人で居たのかも分からない、いわば不審者だ。そんなものが自分の友だちと一緒に長い時間を暗い森の中に居た上に、こうして食事まで配達されている。

そんなことが彼女としては気に食わないのだろう。

「ご存じないだろうと思いますが、今日雛里ちゃんと私は、朝っぱらから他の学院の方々から散々北郷さんについて聞かれています」

「……ご迷惑をかけたことは謝ろう」

「本当に、迷惑きわまりないです」

「しゅ、朱里ちゃん……」

鳳土元は友だちを止めようとするが、彼女も言いたいことがまだまだあるようだ。

「そ、それに、雛里ちゃんは昨日北郷さんと一緒に居たって噂が変な方向に反転して、妙な話が流されているのですよ」

「……というと？」

「……雛里ちゃんが、夜に男の人に会いに外に出たという話です」

「っ……」

「しゅ、朱里ちゃん！」

俺は驚いて鳳土元の方を見た。

叫んだ鳳土元も、私の方を見てはその大きな帽子に顔を隠してしま
う。

私塾にこんな女の子たちしかいなんだ。俺の存在がゴシップになり
かねないとは予想していたが、まさか鳳土元に害になるそのような
話までされているとは…

「……そんなことではないのは、お前も分かっているはずだ」

「もちろんです！ですが、十分そんな噂をされてもおかしくない状
況だということは、北郷さんにも分かってもらいたいです」

諸葛孔明は随分と息を荒くしながら答えた。相当怒っているみたい
だ。

べつに俺に対して、というわけではなく、自分の友にあのような噂
が流されているという事実怒っている、とみた方が正しいだろう。

「…そもそもだ。何故鳳土元とお前はあんな夜遅く森の中に居たん
だ？」

「それは……」

「流れ星…です」

諸葛孔明が答えようとするのを、隣の鳳土元が答える。

「昨日流星雨が落ちたのですけど、そのうち一つが塾から近いとこ
ろに落ちてきましたので……それを見に行こうと思って……」

「……そうか」

概ね、水鏡先生から聞いた話と違いはないか。

「それで、途中で一刀さんの口笛の音が聞こえて、誰か助けを求めたのかと思いついて近づいてみたんですけど……私が足を滑ってあそこから落ちてしまったせいで……」

「……いや、鳳土元は悪くないだろう。……まだ幼い女の子が誰にも言わないで夜遅く外に出たことはたしかに危なかったが、途中からは俺のせいで巻き込まれた分が大きい」

噂はすぐになくなるだろう。

そのあたりの女たちのうわさ話って大体そんなものだ。

ただ時間を潰す話題がほしいだけ。何も彼女の名を傷つけようと食いつく人たちがいなければの話ではあるが……

「となると、諸葛孔明が言いたい言葉は大体わかる」

「分かってくださって、ありがとうございます」

「……え？」

俺と諸葛孔明の話についていけないのか、鳳土元は少し頭を傾げた。まだ、子供なせいかな。といっても、あの鳳土元が人の考えを探るという能力が足りないというのは、あまり関心できる部分ではなかったが……

なに、事実と歴史が書いたこととは違いがあるというわけだ。

大体、蜀を支えるべき二大軍師が、女の子で、しかもこんな子供だなんて、俺にその気があるのかとまで覚えるぐらいだ。

と、まだ分かっていない鳳土元に説明をしてあげると、

「鳳土元、つまり、諸葛孔明は、俺とお前の間の噂がこれ以上長く続かないために、俺とお前が顔を合わせることを控えるべきだと言いたいわけだ」

「……はあ……なるほど……」

鳳土元は少し頭を頷いたと思つたら。

「あ、わわわ!？」

何か変な声を出しながら驚いた。

「あ、あの……」

「？」

「じ、ごめんなさい」

またも突然、鳳土元は俺に謝ってくる。

いや、今のどこで俺が謝られるべきところがあった。寧ろ謝るとしたらこっちの方だ。

「私が余計なことをしたせいで、一刀さんに変な噂をされるはめになつて」

「え？」

いや、違う。

それは違うだろ、鳳土元。

「別に、俺はそんなことは気にしない。そもそも、お前がそこで助けてくれなければ、俺はそこで怪我をしたまま夜更かしていたんだ」

「でも……」

「雞里ちゃん」

さすがにと思つたのか諸葛孔明が話を割ってくる。

「もういいから帰ろう」

「え、でも……」

「諸葛孔明の言う通りにした方がいいさ。朝食は確かに受け取ったから。後で俺が返し……」

「いいえ、北郷さんもここに居てください。後で私が取りに来ますから」

と、諸葛孔明が話の腰を折って言った。

中々、頑固というか、友だちのことを心から心配している気持ちが伝わってきて、あまり悪い気にはならない。

「わかった。それでは、そういうことにしておこう」

「あの、朱里ちゃん……」

「後で、雛里ちゃん。それじゃあ、私たちはこれで……」

「ああ」

「あ、あの……」

鳳土元はまたあわわと言いながら、諸葛孔明に引つ張られるように外に出た。

最後に頭をペコツと下げるのがみえたが、挨拶を返す暇もなく、門は閉ざされる。

「……………鳳土元……か」

面白い娘だ。

歴史で思っていた姿とは全く違う。

かよわい女の子って感じ。

……………なかなか面白い世界に来てしまったようだ。

第一章 五話 初心な二人（前書き）

外国人だどこまでかはっちゃんけがいいのか良く分からない時が多いです。
難しいです。

第一章 五話 初心な二人

雛里SIDE

「朱里ちゃん、ちょっと待ってってば」

歩きを激しくしながら私を引っ張っている朱里ちゃんの手にかかれながら私は訴えますが、

「……………」

朱里ちゃんは無言のまま私を引っ張るばかりです。

「朱里ちゃん！」

「！！」

もう一度叫んだ後やっと、朱里ちゃんは止まってくれました。

「……………ごめん、雛里ちゃん」

「朱里ちゃん……………どうしたの？」

「……………」

朱里ちゃんは怒っていました。

どうして？

それに、一刀さんにあんなことまで言っちゃって……………

「雛里ちゃん、もうあの人に構わない方がいいよ」

「……………どうしてそんな風に言うの？」

「だって…！一刀さんのせいで雛里ちゃんが皆に変な噂されるじゃない」

「…一刀さんのせいじゃないよ」

「あの人のせいだよ」

「一刀さんは森の中で迷った私を助けてくれたただだよ。どうしてそれが一刀さんのせいになるの？」

「それもそもそあの人が夜あんなところに居たからじゃない」

「夜落ちた流れ星を見ようと先に外に出たのは私たちだよ…：それとも朱里ちゃんは、私が一刀さんを助けられない方がよかったって思ってるの？」

「……」

朱里ちゃんはそこで口を閉じました。

……朱里ちゃん？

「正直に言うと、私は雛里ちゃんがあの人を見つからなかった方がよかったと思ってる」

「！」

「あの人ならきつと一人で狼たちに出会っても大丈夫だったろうし、それなら朝になっても探しに行けたよ。それなら雛里ちゃんがそんなことに巻き込まれずに済んだし、私の友だちが他の人たちに変な噂されるのを聞かなかつたよ」

「あの時もしあそこで一刀さんに出会ってないでそのままいたらあの狼たちに私たちが出会ってそのまま食われたかも知れない。それに噂と言っても大したことでもないじゃない」

そう噂だとしても、単に私たちが水鏡先生と一？に男の人をここに連れてきたせいで出来た中途半端なもの。

私が男の人をここに連れてきたことから、変な方向に噂が飛んできたりもするけど、ここの娘たちは皆暇でちょっとした遊び心地でそ

んな噂をしているだけ。本当にそんな風に思っている娘なんていない。それは、朱里ちゃんが誰よりも知っているはず。

「それでも、私は雛里ちゃんがそんな噂されるのは嫌。雛里ちゃんは優しい娘で、普段知らない人に会ったら直ぐに私の後に隠れるほど人見知りなのに、そんな事を言うなんて酷いじゃない」

「私は大丈夫だよ」

「私が大丈夫じゃないの！あのような誰かも知れない人と変な噂に絡まれるなんて……それに、大体あんな夜にあんなところに居たつて話からおかしいじゃない。きつと夜ここにもぐつて来ようとした泥棒とかが間違つて怪我をしたに違い……」

「朱里ちゃん！……！」

思わずありつたけに叫んでしまう。

一番の友だちに……世界で誰よりも親しい友だちに……怒りをぶつけてしまう。

「私の命の恩人だよ！それとも朱里ちゃんはあの人を私を助けなかった方が良いつて言うの？」

「そういう話じゃ……」

「もう良い……！」

朱里ちゃんが掴んでいた手を振り切つて後を向いて歩いた。

朱里ちゃんに引かれて来た道を一人で遡っていく。

「ひ、雛里ちゃん……！」

後から朱里ちゃんの声が聞こえるけど、振り向かえないまま走つた。これが、私たちの始めての喧嘩。

一番の親友との、始めての分かれ道。

最初にその手を振り切ったのは、私の方だった。
いつも朱里ちゃんの後には隠れて、大変な時に大事なことはいつも押し付けてしまっていた私の大事な友だち。
だけど、今回だけは…その懐の中を離れて逃げてしまった。

> p f <

ガラッ！

ボタン！！

「はぁ……はぁ……」

一刀さんが居た部屋まで走ってきた私は入ってきてすぐさま門の鍵を締めた。

息が荒い。

走ってきたせいもあるけど、ほんとにそうじゃない。

怒りが収まらなかった。

一番の友だちへの始めての怒鳴り。

その理由が……

「鳳土元、どうしたのだ」

あの人だった。

なんで？

どうして私はここまでしてしまっただら？

昨夜事故であった知らない男の人なのに、

朱里ちゃんはまだ私の心配をしているうちにそんな言葉をいっただ

けだった。

なのに、私は何故かそれを聞き捨てられなかった。この人を…一刀さんを悪く言うのが許せなかった。

「ううう……ひうう…」

一番の友だち……

違う。

私に友だちなんて、朱里ちゃんしかいない。

私のたった一人の友だち。

私の心の全てを委ねられる唯一の友だちに…あんなことを言って逃げてきてしまった。

これからどうしよう。

どうやって朱里ちゃんの顔を見よう。

もう朱里ちゃんは私のこと見ようとしないかもしれない。

朱里ちゃんは私とは違って社交性もあって、他の娘たちとも中がはいから…私みたいな娘は直ぐに忘れて他の娘たちと仲良くしてしまっただろう。

「鳳土元……？」

そう思ってきたら…何故か私の前に立っている人の顔がとても憎らしく思ってきた。

なんで？

どうして私はこんな人のために唯一の友だちに怒鳴らなければいけなかったのか。

愚かな自分を呪いながらも前にたっているこの人が憎い。

「一刀さんのせいです!」

「……………」

「全部一刀さんのせいなんです!」

だから、またやってしまう。

まだ落ち着いていないこの感情をまたこの人にぶつける。

私って、こんなに悪いコだったっけ。

「どうして私の前に現れたんですか! どうしてあの時口笛なんて吹いていたのですか!」

ついさっきこの人に言った言葉が無駄になって行く。

先までこの人が泣いている所を慰めていた私はどこに行つて、今度は私が一人になったからって人のせいにしてしまう。

「一刀さんが来たせいで……………朱里ちゃんが……………朱里ちゃんと……………」

> p f <

一刀SIDE

先帰ったばかりの鳳土元が急に入つて来て門をカチャツと締めた。

まだ行つて五分も経っていないかった。

患者食で大した食事ではなかったものを早めに済ませようとした俺はお粥を口を運ぶのをやめて彼女の方を見る。

「鳳土元、どうしたのだ?」

「……………」

返事がない。

よくみると、どこか様子がおかしかった。

顔が高潮して、どこか興奮しているようだった。

一体その短い間何があつたんだ？

「ううう……」

「鳳土元……？」

「……刀さんのせいです！」

「！」

突然、彼女はそう叫んだ。

昨夜や、先お食事を持ってきてくれた時は全く違うその態度に私は少し頬を引き摺った。

「全部一刀さんのせいなんです！！」

彼女は怒っていた。

怒りを……私にぶつけていた。

先まで落ち込んでいた私を精一杯慰めようとした娘は消えて、そこには傷ついた少女の姿があつた。

「どうして私の前に現れたんですか！どうしてあの時口笛なんて吹いていたのですか！」

そう、孔明の言う通りだったのかも知れない。

俺は彼女にとって迷惑きわまりない存在だったのかも知れない。

実際に、俺のせいで鳳土元に変な噂が回っていることに、お友の孔明は私に怒りを持っていた。

友だちを思うなら当然のことだ。

しかも、相手はまったく知らない男だった。

無実の友だちが訳の分からない男のせいで悪いことを言われるのが我慢できたはずがない。

孔明彼女もまだ幼なかつた。

鳳土元は自分の被害をあまり俺に言わなかつたのに対して、彼女は自分の友だちが俺のせいで受けている迷惑を全て俺のせいにした。それは本当に自分の友だちを思つてあげなければできないこと。

その意味で鳳土元は本当にいい友だちを持つていた。

だけど、彼女はどうしたのだろう。

どうして急に鳳土元はこんなことを俺に言つてくるのだろう。

「一刀さんが来たせいで……朱里ちゃんが……朱里ちゃん……」
「……ああ……」

これは喧嘩をした、つてところだろうか。他にこんな一瞬に行動を変える理由が見つからない。

「……孔明と喧嘩をしたのか？」
「…………っっ！」

ぴくつとする彼女の様子を見ると間違いはないようだ。

もうちょっと近づいて彼女の様子を見た。

赤くなつた顔に、目には涙が潤つていた。先の俺も彼女にこんな顔を見せていだのだろうか……

「そうか……先に怒つたのはどっちだ？」

「……私……です」

「どつして？」

「……一刀さんのせいです」

「……………」
「一刀さんのこと……悪く言うから……」

… 鳳土元、お前はいい娘だな。

「だから孔明に怒ったのか？俺のことを悪く言って？」

「……………」 >> コクツ << 「

「そうか。…お前が俺をかばってくれようとするその気持ちは嬉しいが……俺はお前がそこまでするほど価値がある人間ではない」

少なくとも俺は招待されてない客だった。

しかも俺のせいで彼女本人、変な噂を言われている。そして孔明はそんな鳳土元の代わりに彼女自身を守ろうとしたのだ。

「孔明のところに行け。お前が行くのを待っているはずだ。行って謝って……仲直りした方がいい」

「……………」

「そして、孔明の言った通りにここには来ないようにした方がいい。それが今はお前のためだ」

「……………嫌です」

「……………」

「…朱里ちゃんの間違ってます。…一刀さんは悪い人じゃないです。私を助けてくれたいい人です。そんな人を……ただ変な噂をされるっただけの理由で遠ざかったりできません」

「… 鳳土元、俺は……」

「一刀さんはいい人です！噂なんてただの噂です！おしゃべり好きな女の子たちが話題にすれたための話に過ぎません！そんなどうでもいい事のせいで、一刀さんを傷つけるわけにはいきません」

「 鳳土元……………」

お前は優しい娘だね。

会った時間は短いけどそれだけは何度も感づいたよ。
だからこそ分かる。

もしお前がここでこのまま居座ってしまつと、本当に孔明と仲間割れしてしまいかねない。

この私塾という群れから遠ざかられるハメになる。

俺は鳳士元お前にとってそこまでするほど価値のある人物ではない。
となれば……

ここで俺はもうちょっと悪い状況になることで……お前のその優しい
心に答えることが出来ると思う。

「本当に俺が優しい人だと思ひ込んでいるようだな」

> p f <

雛里SIDE

「……へ？」

顔を上げて上を見ると、一刀さんが顔を怖くして私を見下ろして
いました。

「本当に俺がいい人だと思ひ込んでるのか？」

「か、一刀さんはいい人です。それが私が良く知ってます」

「それが間違いだとしたら」

「え？」

突然何を言うのですか、一刀さん？

「もし、俺が孔明が言った通りに変人で、もしくはこの私塾に何か金になるものを狙って泥棒しようとしてるうちに、事故にあっただけならどうする？」

そんな...

「そ、そんなこと...あるはずがないです」

「どうして俺を信じるんだ？何故お前の親友の言葉より会って一日も経ってない俺へのお前の理想を信じる」

一刀さんの顔がどんどん近づいてきます。

ちよ、ちよっと怖い.....です。

「あの時は事故で傷を負っていた。それに、途中で邪魔も入っていた。けど、ここにはお前と俺二人しか居ない」

タッ！

「ひっ！」

一刀さんは、門の横の方の壁に手をつけて、私を門の方に追い込みました。

「怒ったお前の友だちはここに当分来ようとしないだろっし。しかもここは人が通る道とは遠い。お前が叫んだ所、助け人が来ると思っつか？」

「.....！」

ま、まさか……

「か、ずと……さん？」

「本当に……俺がソナナコトを、しないだろうと、信じてるのか？」
「……！」

ッ……！！

どンドン一刀さんの顔が近づいてきます。

に、逃げようとすれば、逃げれます。

後には門があります。

思ってるならいつでも外に出られます。

男の人なら股間が急所ですからそこを思いっきり殴れば逃げる隙を作れます。

「例えば……ここでこのままお前の服を千切ってお前の襲うとか……」

「う、嘘です！そんなこと……一刀さんがするはずありません！」

「本当に、俺がそんなことしないとと思うのか？」

壁にあった一刀さんの片手が私の顔を掴みました。

「本当に、このまま俺がこのままお前みたいな可愛い女の子に何も
しないまま……逃がしてあげると思っているのか？」

「……！」

顔がどンドン、近づいてきます。

一刀さんの顔がどンドン、私の顔の方が……

く、口！唇が……！

「会った時から、お前なら……良いと思っていた」

「か、一刀さん、や、やめて……」

「悪い人が目の前の獲物を見逃してやるはずがないだろ……」

目、目が直ぐまえに来てます！このままだと本当に……される！
も、もう見られません。

「……………」

「……………?????」

沈黙。

「?..?」

何も………されてない。

ちよつと目を開けてみたら…

「／／／／／／」

「……………一刀さん？」

> p f p <

一刀SIDE

何で!?

なんで逃げない!?

俺が彼女を脅迫して、怖くなった彼女は逃げる。

その間俺は荷物を持ってこの塾を出る。

これで彼女も変な噂をされないで、また孔明と仲良く出来るだろう。そう思っただけだ……

何だこれは!?

これぐらいしたら普通逃げるだろ!

それとも何だ! 逆にやりすぎて逃げられないって言うのか? だからってこれ以上することはさすがに出来ないぞ?

「……一刀さん?」

「……な、何だ?」

「……無理、してません?」

「……何の……ことだ?」

「……演技……ですよ……ね? あの、本当に……私を襲ったりとか……しませんよね?」

「……」

「……ここで引いたら今までやったことが水の泡になってしまう。」

「……ここは、鳳土元のために……」

「ッ!」

「うっ!ん!」

強引に唇を奪う。

われながらここまでしていいものかと自分に問いつめたい。

命の恩人だ。

なのに、彼女のためと云えどもこんなことまでして大丈夫なのか……? 嫌われ役ならなれている。

だけど……ただの縁ではなかった鳳土元とこんなふうになるのは少

し残酷だと思った。

「こ、これで分かったな。お、俺は…本気だ」
「……………／／／／／」

唇を奪われた鳳土元は顔を先よりも更に赤くしていた。

「は、早く逃げないと、…これよりもっと酷いこともするぞ。だから……………」

「……………や、やっぱり嘘です」

「！」

鳳土元は赤い顔でそう言った。

「ま、まだ言うか！」

「一刀さんは悪い人じゃないです。これで確信が付きました。一刀さんは、私が朱里ちゃんを喧嘩をしたことが心配でわざと悪い人を演じようとしているのです」

「ち、違う。お、俺は本当に鳳土元に下心を持って……………」

「じゃ、じゃあ、もっとしてみてください」

「…え？」

この娘何言って……………

「ほ、ほら…本当に悪い人なら…口付けだけで終わらせるはずがないです！ですから……………こ、こここの次のことも……………やってみなさい」
「！」
「……………」

は、謀ったな！

待て！これは孔明の…いや、土元の罠だ！

こんな、こんなはずでは……！

「や、やっぱり、で、出来ないじゃないですか」

「ほ、ほんとに…悪い人だぞ…ほんとだぞ」

もう、自分で見ても完全に演技になってない。

「や、やっぱり、一刀さんはいい人です」

「……っ」

だからって、ここ以上にして本当に彼女を傷つけるわけにもいかない。

嫌、というかこの次って何？

この次って一体どういうことをすればいいんだ？

「も、もう、逃げ道なんてありません。一刀さんはもういい人って私の中では決まっています。これ以上何されても、私はなんともないです！」

「え？」

それってどづいっ……

「………！………！」

ブシュッ……！

「っわっっ」

突然何かがかかって来て私は目をとじてしまった。

「な、何だ？」

目を拭いて前を見直すと、

「あ！ちよつ、鳳土元！？」

鳳土元が鼻血を吹き出して気を失っていた。

> p f <

雛里SIDE

「……………うう……………」

「……………目が覚めたか？」

こじ……………

私……………

「頭がくらくらするだろうからまだ横になっていた方がいい」

一刀さん……………

私、どうして……………

「……………へ？」

・
・
・

！！

「あわわー！！！！」

「……落ち着け……」

「お、お、落ち着けていられ……ま！？」

く、口付け！

一刀さんに口付けされました。

初めてだったのに……こんな……こんな……！！

「せ、せ、責任取ってください」

「え？」

「そうです！もうそれしかありません！責任取ってください！でない
と、この事皆にいい付けちゃいます！」

「ちょ、ちよっと待った！だからあれは事故と言っか勢いでとい
か……だな！」

「は、初めてでしたのに……そんな……！」

「俺だって初めてだよ」

「……へっ？」

初めてって……

「そ、それこそ嘘です。一刀さんほどの人が口付けもしてないはず

がありません」

「……………モテない男で悪かったな」

「……………え？…じゃあ、本当に……………」

「初めてだ……………／／／／／」

なんでそこで女の子みたいに顔を赤くするんですか？それは私の役割ですよ。

「し、仕方ないだろ。お前が孔明と喧嘩をしたって言うから」

「あ……………」

そうでした。

だから、一刀さんは私のために…わざと悪役を演じて私が朱里ちゃんと仲直りするようにするため、私が一刀さんを怖がって逃げるように演技をしたのに…私は最初はあまりにも驚いて何もできなかったんですが…後はここで引いたら自分が思ったことが間違いだったと認めることだから強く行ったのですが……………

「だ、大体お前が早く逃げていればあんなことにならずに済んだ」

「あわわっ！？わ、私のせいにするのですか？余計なお世話したのはどっちの方ですか」

「よけっ！…命の恩人の心配をして何が悪い。むしろ当然のことだろ！」

「私だって命の恩人の一刀さんが悪く言われるのが嫌でこうしていったんです！」

「だから俺は……………」

「一刀さんにとっても私は今日会ったばかりの人です！私のことに構う必要なんてないはずですよ！」

「お前はまだ子供だろ。しかもここにずっと残ってるし、これから孔明とは友だちでいなければならぬ」

「私は大人です！私は今年で十六歳で天下御免の大人です！」

「……え、嘘！」

「何ですか、その反応は！」

失礼しちやいます！

いつも幼児形体型で気にしてるというのに……だから同じ悩みな朱里ちゃんとも仲良くしていたわけで……

「……いや、異議あり！俺の世界では大人は十八歳からだ！」

「『郷に行ったら郷に従え』です！一刀さんの世界とかそういうの関係ありません！この世界だと十六歳の女の子だと普通の家だともう嫁に行くところももう決まってるか、それとももう結婚して子供が三人も居たりする年頃なんです！」

「ま、マジか」

「……いえ、ちよつと……嘘もあるかも知れません」

「……子供三人はないだろ」

「……ちよつとやりすぎな感もします」

つて、そうじゃなくです！

「と、とにかく、私は大人なんです！だからそんな言い方はやめてください！」

なんかその話じゃなかった気がしますけど、また最初から始めると恥ずかしすぎるのでこの辺で締めておくのが両方にとっていいです。

「……そ……か……」

一刀さんも、何か釈然としない顔をしています、途中でちよつと

顔が赤くなつたのを見ると、私と同じ結論に辿り着いたのだろうと思います。結構大きな声で騒いでいたので、ここに人が通ってなくて本当によかったです。

> p f <

「……………あ、あの、それで、だ」

落ち着いたところで、一刀さんが口を開けました。

「はい……」

「……………早く、謝りに行った方がいい」

「……………それは……嫌です」

「何故だ」

だつて……

「一刀さんは……そんなこと言われるようなことはしていません。一刀さんは……いい人ですから……だから今この学院で起きているちょっとした騒ぎは、一刀さんのせいじゃありませんし、私は大丈夫です。なのにそれを一刀さんのせいだとして一刀さんに会ってはいけなるとか言うなんて……悪いのは朱里ちゃんの方です」

「……………孔明はお前のことを思ってこそそのような行動を取つたのだ。鳳土元が親友の気持ちを分からないような娘だとは思われないがな」
「……………」

確かに、一刀さんの言う通りかもしれません。

朱里ちゃんは、私のために怒ってくれたのです。私の代わりに怒ってくれたのです。でも、本当に私は怒ってなんて、迷惑なんて思っていないません。

どうしてでしょう？

何故か、長い親友よりも、初めてであったこの人に惹かれてしまっています。

一体私はどうなってしまったのでしょうか？

「まあ、もつとも、その原因になってしまった俺の口から出る言葉でもないが、二人はこれからもいい友にあるべきで、俺はただ通り過ぎる人間になりかねない。どっちの方を先に思うべきなのかは明らかだ」

「一刀さんは私を助けてくれた人です」

「そして、初めてを奪った人？」

「っ！」

この人、また態と自分を悪く言って、私を朱里ちゃんに謝らせようとしています。

そうは行きません。

「一刀さんも初めてだったんじゃないですか」

「ふっ、まさか俺ほどの男が本当に女と口づけするのが初めてなんだと思っただろうな」

「……初めてじゃなかったんですか？」

「……………」

あ、視線を逸らしました。

さっきも思いましたけど、この人演技というか、嘘を言うのは凄く苦手な人です。

「初めてじゃないんですか？」

「……………初めてだった」

そして諦めも早いです。

「じゃあ、その件は問題ありませんね」

「問題ないのか？」

「……………」

あれ、問題ないんですけどっけ？

何かそうじゃなかった気がします。

「まあ、何と言ってもお前とお前の友だちの話だ。第三者の俺がな
んと言おうが、本人にその意思がなければどうしようもないな」

「……………」

「ここにいるつもりか？」

「……………ごめんなさい」

「お前が謝る必要はない。ここは俺の方が客だ。好きなだけここで
悩んで、気が変わったら帰ればいい」

「はい……………」

何か、一刀さんは諦めたみたいです。

そのまま私がいる寝台から目を離して円卓に肘をついて黙り込みま
した。

「……………」

怒らせちゃった。

一刀さんにまで怒られる筋合いはありませんが。

でも、ああして背中を見せて黙っていると、ちょっと怒ってるように見えます。

「一刀さんは、友だちと喧嘩したことはないんですか？」

「ないな」

「そうはつきり言い切れるんですか？」

「俺の友だちは真面目ということを知らない奴だな。怒ってもいつもへなへなした顔で笑ってるから怒る気にもならなかった」

「……怒る側だったんですね」

「……俺が怒られる側だろうと思ってたのか？」

「いいえ、そうじゃなくて……友だちに初めて怒る時、どんな気持ちでした？」

「初めて……？」

私なんて、今日初めて朱里ちゃんと戦ってました。

あの時は凄く怒っていました。一刀さんのことを悪く言おうとしているのが、どうしても嫌に覚えてしょうがなかったです。

「俺があいつに怒る時は、大体そいつが嘘をついている時だった」

「嘘……ですか？」

「そう。一番の友だちが自分に嘘をついている。どうしてなのかはわからない。もしかしたら態と自分の負を隠そうとしているか、それともその嘘が本当のことだと考えてそう言ってるのか……だけど、重要なのは、一番の友が、自分と相対する考えをしていること。俺はそれが許せなかったのだろう」

「……………」

自分と相対な考えを持つ。

「……それに何の間違いがあるのですか？」

「……？」

「自分とちがった考えを持つてる友だちを持っていることは素晴らしいことだと思います。私なら、そんな友だちがいたら、きっとその娘と自分が考えている考えを分けあって、自分の成長の種にします。自分と違う考えをしてる人がいるならそれを説得することが軍師としてのたしな……あ」

…あれ？

でも私って、朱里ちゃんに怒ったじゃない。

私と違う考えを持っているからって……

「……そうなんだ」

「どうした？」

「ありがとうございます。一刀さん」

「？……よくわからないが、謝る気になったのか？」

「はい」

人は全部自分と違う考えを持つてる。

それは必然的です。だって、その人は自分じゃないんですから。

それを怒りだして逃げてくるなんて、私は軍師を目指す人として失格です。

「おかげで自分の未熟さが分かりました。ありがとうございます」

「……うまく仲直り出来ればいいな」

「はい」

一刀さんを通り過ぎて、私は門を開けて出ようとする前に、ふと思いました。

何か、お礼がしたかったです。

私を成長させてくれた人に……

「あの、一刀さん」

「？」

「今後会ったら、私のことは雛里って呼んでください」

「……孔明がお前をそう呼んでいたな。なんなんだ？」

「……もしかして、真名を知らないんですか？」

「まな……お前たちは本当に呼ぶ名が多いな。名前、字、号、それにまなもか……」

「真名というのはもっと大事な名前です。肉親や志を共にする人の間にだけ呼ぶことをゆるされる大事な名前。人の名前を勝手に呼ぶ罪は死に値します」

「重みがあるな……俺に許してもいいのか？」

「構いません。一刀さんは命の恩人ですし、それに……私に大事なことを教えてくださいました。その御礼です」

「……わかった。有り難く受けよう。今後からは真名とやらで呼ばせてもらう」

「はい」

「……ふふっ」

「……へへ……」

何だか、二人同時にちょっと笑みが出てきたのですが、暫く一刀さんを見ていて、私はそのまま自分の部屋に足を運びました。

> p f <

がらり

「……あ」

塾の私たちの部屋に入ると、朱里ちゃんが寝台に座り込んで居て、

私が入るのを見てすぐさま降りてきました。

「……朱里ちゃん」

「雛里ちゃん……あの」

「ごめんね、朱里ちゃん」

「あ」

先を越される前に、こっちから朱里ちゃんを抱きしめんがら謝りました。

「酷いこと言っつて、そのまま行っつちゃっつてごめんね。朱里ちゃんが私のこと心配してくれてるってこと分かったのに…あんな酷いこと言っつちゃっつて…」

「……ううん、私だつて、雛里ちゃんの気持ちなんて考えてなかったよ。私が二人のこと良く知らなかったのに、北郷さんのこと悪く言っつちゃっつて…私こそごめんなさい」

「……え？」

「……あの、雛里ちゃん」

今、なんかちよつとおかしかったような……

「先、私、ちよつと雛里ちゃんのこと心配で……北郷さんの部屋に戻つてただけど…」

「……」

ま、まさか…

「喧嘩したのに、中に堂々と入ることもできなくて、裏のほうの窓から見ていたら、雛里ちゃんが北郷さんと……く、口づけ…」

「あわわー!!!」

見られてたのー！？

「朱里ちゃん、今直ぐ忘れて！」

「ごめんなさい！態と見ようと思ってたんじゃなくて…私はただ他の子たちが言ってることがただ噂話だったからそれが我慢できなくてそのこと北郷さんのせいだとばかり思ってたんだけど、実は、もう雛里ちゃんだけそんなに大人の階段に登ってたんだなって思ったら頭の中が真っ白に…」

「今直ぐ完全に真っ白にして！全部忘れて！お願いだから…！！！」

あわわー！！あわわー！！！！！！！！

第一章 六話 お出掛け(前編)(前書き)

下山して街を回って見たらいろんなフラグが立っていました。

第一章 六話 お出掛け（前編）

一刀SIDE

ここに来て一週間が過ぎた。

「回復が早いですから、そのうち全快するでしょう」

「……ありがとうございます」

その間、山で遭難されて出来た負傷はほぼ回復されて、激しい運動とまでは至らずも、少しのストレッチングぐらいはできるぐらいにはなった。

毎日のように鍛錬をしていたのに、ここ最近はまったく体を動けずこの部屋の中ばかりいたから体を動かしたくて疼く。

それと、やらなければいけないことがあった。

「あの、良ければ、街に出てみたいのですが……」

「街に……？構いませんけど、どうして急に……」

「初めてここに来た時は次の朝になると、夢だったら良いなとかも思ってたのですが……そうでないと知った以上はなんとかしてここで生きていく方法を見つけないけません。そのために、少しここがどんな場所か自分の目で見まわって、それから具体的な計画を立てるつもりです」

「……そうですか。あなたはあまり慌てたりしないのですね」

「……昔から落ち着いた性格でしたので……ですが、驚くということとは状況を飲み込めないということ。いつまでも現実に立ち向かわずに居るわけにはいきません」

「わかりました。そう言えば、明日朝はやく朱里と雛里が街に出て

塾に必要なものを買ってくることになっています」

「鳳土元もですか？」

「ええ」

「……………そうですか」

ふと鳳土元に真名というものを許されたことを思い出した。

あれ以来、土元、雛里には一度も会っていない。

ここに来たのは好奇心混じりで顔を出してきた生徒たちじゃなければ水鏡先生のみだった。

特にあの薄緑の髪の娘は毎日来ている。すごく気になるんだが、向こうがそのまま行ってしまふのでそれ以上の接続はなし。

鳳土元はポジティブな方向に考えると、多分あれから孔明と仲直りしてこっちに近づかないように話がまとまったのではないかと思っている。

どっちにしる元の目標は達成できたようでホツとするが……………あの日の事故を思い出すと俺って一体なに考えていたんだろうと壁に頭ぶつけたくなる。

「大丈夫ですか？」

「はい？」

「なにやら、固まっていますので……………」

「い、いいえ、何でもありません。それなら……………彼女たちが街に出る時に、道案内など頼めるでしょうか。無論、彼女たちに迷惑でなければの話ですが……………」

「わかりました。彼女たちももう随分落ち着きましたし、それほど嫌がらないだろうと思います」

「なら、いいのですが……………」

が、彼女たちは未来のための勉強をする目的でここに居るのだ。

塾のつらで遭難された訳の分からない別の世界から来た人間と絡まれるためにここに居るわけではない。

そう考えると、一週間会ってないことが、別に俺への否定的な感情を表しているわけではないのかもしれない。

いきなり人の唇に口づけをした変態だとしても……

ガンー！！

「大丈夫ですか！どうして急に壁に頭を……」

「だ、大丈夫です。少し、忘れたいことがあったので……」

気にするな。気にしちゃ駄目だ、俺……普通にやっていけばいい。

普通ってどうすればいいのかわからないけど。

> p f <

「一刀さんもー？に行くのですか」

「ええ、よろしければ、彼に街の紹介などもしてもらえるかしら。

彼もこれからどうすればいいのかわからない不安な状況で不安になっているみたいですし」

「はあ……」

「一刀さんと……出かけるか……」

どうしよう

「……あまり気に食わないみたいですね」

「え？い、いいえ、あの、その……」

言えません。あの日朱里ちゃんに誤解された後、変に意識しちゃって会いにも行けずぎくしゃくしていたのに……今更あったら私のことどう思うことやら……

……か、考えたらまた顔が赤くなっちゃいそうです！

「しゅ、朱里ちゃんは多分駄目だと言うと思いますよ。ほら、朱里ちゃんはあまり一刀さんのこと好きじゃないですし」

「朱里になら既に構わないと言われてます。彼女も北郷さんが自分の立場を理解して、これから自分がどうすればいいのかを考えるべきだと分かってくれて……」

「そ、そうなんですか……」

朱里ちゃんはもう許したんだ……

何か朱里ちゃん、あれ以来私と一刀さんのこと本当にそうなんだって勘違いしちゃったみたいで、あれから朱里ちゃんともあの話には触れていない。

でも、どうしよう。

せつかく真名だって許しておいて、ここで嫌とか言ったら、あまりにも露骨に避けてるようで失礼だし……

「分かりました。明日、一刀さんも連れていきます」

「はい、それじゃあ、北郷さんにもそう伝えておきますから、よろしくおねがいしますね」

「はい」

あわわ…会ってぎくしゃくする姿が目には浮かびます……

…

…

次の朝、街に出るための準備で朝はやく起きました。

「朱里ちゃん、おはよう」

「おはよう、雛里ちゃん。今日街に出るの、楽しみだね」

「う、うん……」

ここの私塾に居ると、街に出ることはそうありません。

他の娘たちは休日とかに街に出かけたりすることもありますが、私はこんなことでもなければ、あまり街に出かけることは好きじゃありません。

好きじゃないというのは、外に出るのが嫌いとかそういうわけではなく、あの、ちょっと怖いです。

知らない人たちがたくさん行ったり来たりする中で……そんなところだと、悪い人たちも現れますし……

「雛里ちゃん、どうしたの？」

「うん？あ、ううん、何でもないよ」

「……大丈夫だよ、雛里ちゃん。私もー？に行くから。二人でー？に行くときつと怖くないよ」

「……うん」

私の気持ちを良く分かってくれる朱里ちゃんは、そう私を慰めてくれました。

朱里ちゃんとー？に行くなら、本当に怖いのもなくなります。

本当に、朱里ちゃんは頼りになる友たちで……

「後、北郷さんもー？に行くしね」

ガーン！！

「はわわ、雛里ちゃん、大丈夫！急に寢床に頭ぶつけちゃって……」
「う、だ、大丈夫……」

そうでした……一刀さんも一？に行くのでした。
あまりにも立ち向かいたくなかった記憶だったせいで完全に頭の隅
つこに封じていたのですが、朱里ちゃんのせいでまた意識してきま
した。

> p f <

自分たちの身の支度をして、一刀さんを連れに一刀さんの部屋に行
きました。

コンコン

返事がありません。

まだ寝ているのでしょうか、それとも……

がらっ

「……一刀さん？」

「……」

一刀さんは部屋に居ました。
寢床の上に座っていました。

「一刀さん？」

「……………」

でも、何だか返事がありません。
座ってるまま寝てる？

「北郷さん、起きてください」

朱里ちゃんが少し大きい声で一刀さんを呼びましたけど、一刀さんは目を開けません。

部屋の中に入って、一刀さんを揺さぶってみました。

「一刀さん、一刀さん」

「……………うん？」

そしたら、やっと一刀さんが目を覚ましてくれました。

「あ、鳳土元。それに孔明も随分早かったな」

「座ったまま寝ていたのですか？」

朱里ちゃんがそう聞いたら、一刀さんは頭を左右に振りました。

「朝の習慣みたいなものだ。こうして居座って、心の中を空にする
ことで、精神を統一する鍛錬の一環だ」

「鍛錬って……………体を動かさずにですか？」

「北郷さんって、武に心得があるのですか？」

「ある程度は身につけているつもりだ。後、鍛錬と言って肉体的な
鍛錬だけというわけではない。清い精神を磨くこともまた修練の一
つ。お前たちも文を磨くと言って、いつも本ばかり読むことが勉強
というわけではあるまい。見聞を広げたり、現に存在する問題を自

分たちの知識を持って方法を考えることもまた自分が知っている知識をまとめるいい勉強になる、そうだろう？こつという座禅もまたそんなものだ」

「はあ……」

一刀さんの説明を聞いていたら、なんとか納得はできましたが…人が呼んでもわからないものでしょうか

「土元は本を読んでいる時に誰かが呼んでもわからなかった時とかないのか？」

「あわわ?!なんで私が思ったことがわかったんですか？」

「本当にそうなのか。すごい集中力だな」

「あわわ……」

一瞬、本当に心を読まれたのかと思ってびっくりしました。あれ?というか、

一刀さん、さっきから私のことずっと土元って呼んでますよね。

私、真名は許したはずなのに……

もしかして、一刀さん、忘れてる？

「あの、一刀さん」

「うん?ああ、そうだったな。そう言えば、今日は街に出かけると言ってたな。ちょっと待っててくれないか、直ぐに準備するから……」

「いいえ、そうじゃなくですね……」

「……?」

いや、待って。

もしかして、単に忘れたわけじゃなく、私あまり長く会いにも来ないで無視していて、怒ってる?

「いいえ、何でもありません。準備出来たら呼んでくださいね。私たちは外で待つてますから」

「ああ、分かった」

「朱里ちゃん」

「あ、うん」

がらっ

外に出て一刀さんが支度するのを待ちます。

「雛里ちゃん、先どうしたの？」

「あ、うん……えっと、この前朱里ちゃんと喧嘩してここに来た時、一刀さんに真名を許したんだけど、呼んでくれないなあって」

「はわわ？雛里ちゃん、北郷さんに真名を許してたの？私今初めて聞いたよ」

「だって……」

そこで真名を許したってまで言っていたら朱里ちゃんの頭の中で私と一刀さんがそういう関係だって完全に納得してしまいそうだったからとにかく不利になる話は言いたくなかったの。

「でも、真名を許されたと言っても、やっぱりちよっと言い難いのかな」

「……良くわからないけど、ほら、男の人に真名を許すのって、あまりないじゃない？こう……夫になる人とか、仕えになる人が男な時でも真名を許したりする時ってそうは……」

……え？

「そ、そうだったの？」

「雛里ちゃん、もしかして知らないで教えてたの？」
「……うん」

あの時は単にお礼として許しただけで……
そうだよ。同性の友たちならまだしも、女の人が男の人に真名を許すことって未来を約束した間か、そうじゃなければ……
待って、
でも、それじゃあ、まるで私が一刀さんに……

「あ、あわわー！」

何でも今になって自分がどれだけ大変なことをしたのか気づいちゃうの、私！？

がらっ

「わるい、待たせた」

「あわわー！」「はわわー！」

「わっ！」

慌ててるところで、突然一刀さんが部屋の門を開けてきたので、私は更に驚いて思わず声をあげてしまいました。

「雛里ちゃん、落ち着いて。そんなに真剣に思う必要ないよ。きつとそういう関係だってあるんだよ。うん」

今朱里ちゃんが言ってるそういう関係ってなんなのか私にk w s k 教えて！凄く怖いので、今朱里ちゃんが私と一刀さんをどういう関係に思ってるのか

「よ、良くわからないが、大丈夫か、土元」

「だ、大丈夫ですなんともありません。むしろ元気一杯です」

「ならいいのだが……まあ、いい」

と、落ち着いたところで一刀さんが着た不思議な服が目に入りました。

「一刀さんの服、何か輝いてますね」

「うん？……ああ、ちよつとそうかもな……この世界の服とは素材が違うから、そう見えるかも知れないな」

遭難で負った傷を癒してる間、ずっと上半身に包帯だけでいた一刀さんは、今は下の白い袴こに合わせた白い上衣じょういを着ていました。

それが今昇り初めて日を反射して、凄くキラキラして見えます。

こうして見ると、何かちよつと神々しく見えます。

なんとというか……凄く綺麗です。

「着替えた方がいいだろうが、あまり街で目立つのも良くないし」
「いいえ、そのままで大丈夫です！」

一刀さんの言葉に思わずそう答えてました。

「……雛里ちゃん？」

「……あ、あの、だから、急がないといけませんので、これ以上時間を無駄にしたらいけないかなあと……」

「……そうか、そうだな。……まあ、見てあまり目立ちそうだったら上衣は脱いでしまえばいいだろう」

なんとか誤魔化しました。

日が昇る頃に出発しましたが、街に着いた時には屋台が商売を初めて、街に人たちが集まる頃になってます。

山の麓にある塾からここまで来るにも、結構な時間がかかります。帰る時も、急いで帰らなければ、後で夜になって塾に帰る道に迷ってしまうハメになるかもしれませんので、気を付けないといけません。ん。だけど、

「すっごいー、雛里ちゃん、アレ見て」

朱里ちゃんが指したところは、飾りを扱っている店でした。

朝の日の光に反射して、瑠璃の輝きや宝石の反射光が輝いてすごく目立ってます。

「…………あれほどの家もなると、結構金持ちだろうな…………にしても、十時半でこれぐらいか…………随分と活気のある街のようだな」

「じゅうじはん？」

「うん？」

一刀さんが左手に付けてあった何かを見てそうつぶやいてました。

「北郷さん、それって何ですか？」

「時計だが…？」

「時計？その手首に付けてるのがですか？」

よくみると、一刀さんが「時計」というものは、日時計みたいに日の影を見て時間を分かるものではなく、円盤の中に長さが違う針三

つが少しずつ回っています。

「…この時代だと、あるのは日時計かそれとも水を利用した時計とかな」

「はい」

大体、時計がなくても、日の上り具合を見ると大体の時間は分かりますし、設置された時計でももつと大きな街でなければありません。それが、時計と手首に付けておくなんて……

「まあ、時計なんてなければどうっていうことはないが、あつたら時間とかに拘って余裕を無くす。あまり身近において良い品物ではないが……俺が生きていた時代では結構重要だったりしたんだ。時間というのは。時間は金なりという諺もあつた」

「そうなんですか」

「でも、その言い方なら、北郷さんはどうしてその時計を持ってきたのですか？ここで時間なんて別に気にすることもないのに」「色々理由はある。まずは、塾から街までどれぐらいかかるか時間を計ってみたかった。後は……」

ぐう〜

ぐう〜

ぐう〜

「……」

誰のお腹の虫だったか聞くこともなく、

三人のお腹が同時に成っていました。

朝食を取って街に來ると、もう昼過ぎになって時間が曖昧なので、

朝食抜きで山を降りてきたのですが、流石にこの時間にもなるとお

腹が減ります。

「もし、こういう状況になった場合誰でも自分はお腹が減ってないと意地を張った場合黙殺するためでもある」

「あ……」

「街から遠いところから定期的な買い物となると忙しいということ は分かるし、朝御飯を食べる金を貯めて自分たちが欲しい物を買いたい気持ちも十分理解できるが、まだ成長中の娘たちが空腹を我慢 してる姿を水鏡先生が見られたらなんと云うことやら……」

「な、何かたべに行きましようか」

「そ、そうだね」

朱里ちゃんが一刀さんの言葉を絶ってそう提案したら、私も急いで 同意しました。

何か、一刀さんと一？に話していると自分の心をまんまと見られてる 気がしてなりません。

> p f <

「北郷さん」

「？」

「どうして私たちが朝食を抜いて買い物のために金をつくらうとし たって分かったんですか？」

「……………」

朱里ちゃんが注文したものが出るのを待ってる時に一刀さんに聞きました。

「二人がここまで来る時にとつた行動からの推測だ」

「どういうことですか？」

「まず、二人は山を降りてくる時に水を多めに飲んでいて。塾から出発する前にも二人の口に水を飲んだ跡があった。そして山を降りてくる場所でも必要以上に水の瓶を持っていた。それはつまり、二人が朝食を取らずに山を降りるためにお腹に水でも入れておこうと思っていたのだ」

「あ」

たしかに、私たちは一刀さんの部屋に行く前に水をたくさん飲んで、また山を降りる時にもいつもより水を沢山汲んで、先に空腹感を抑えようとしていました。

「でも、それだけなら俺も単に時間を急いでいたと考えて終わりだっただろう。でも、二人は街に着いた一番最初に目が行った場所が女の人たちのために飾りを売っている店だった。それを見て確信した」

「それだけで、私たちがそんなことをするだろうと分かったっていうのですか？」

「六割ぐらいだな。それだけなら、黙っていることもできないわけではなかったが……」

「……？」

一刀さんは突然そこで口を閉じて視線を逸らしました。

「……俺は私塾のところから水一滴も口にしてないんだがな」

「……あ」

「……残りの四割はそれだ」

……

「ごめんなさい」

「私たちの考えだけで、一刀さんのことは全然…」

「いや、俺は昨日急に申し出た身だ。二人の計画を狂わせてしまつて悪いとは思っているし、代わりのものは用意してある」

「へ？」

「一刀さんが突然何を言っているのかって良く分かりませんでした。」

「はわわ！」

「え、どうしたの、朱里ちゃん？」

「…やはり、孔明の方が察しが早いね」

「あわわ？」

何ですか？

どうして二人とも私だけ置いて行っちゃうんですか？

「大丈夫なんですか、北郷さんは」

「結構。元からそのつもりで来ている」

「ですが……そんなものを売ってしまったら大変なことになるんじゃないか」

「ただの時計一つだ。それに、この時代で真似できる技術でもない」
「……あわわ？」

「一刀さん、もしかして…」

「一刀さん、まさか、その時計、売っちゃうんですか？」

「ああ、先どうして時計を持ってきたのかって言ってたな。三つ目の理由は、これを売るためだ。金が必要になりそうだから」

• • •
• • •
• • •

第一章 六話 お出掛け（中編）

一刀SIDE

塾にて、土元と孔明が部屋を出た後、俺はバッグの前に立っていた。この一週間、使う必要がなくて後にしていたが、今回こそはあけなければならぬ。

このバッグの中央の一番大きい空間を……

「……………」

及川が言っていた言葉が頭を通り過ぎる。

一番大きいのは開けない方がええで！。ドガンとするかも知れないから。

「あいつがそう言ったら本気でそうなりそうで怖い」

あいつの空間使う能力には正直に関心する。

あり得ないほどの大量の荷物を小さい空間に詰め込む能力はW n zip並だ。

ただし、問題なのはそれを後に開ける時のことで、以前奴が俺の家を掃除したって言って（無断侵入だった）部屋に入って押入れを開けたら部屋にあった全てのものが俺を襲ってきた。

あの時でもあいつは「開けない方がいい」とかは言っていなかった。じゃあ、何だ？どんだけこの小さなバッグに詰めてあれば開けるなというんだ？

っていうか開けられなければ俺はどうしてこのバッグを持ってくる

必要があった。

「開けるしかないか」

バッグは海外旅行に使うバッグで、他のはジッパー付きだったが、何故かメイン空間だけはに暗号を入れて両手を使って引き金を押す仕組みだった。

もし、ここで両手が空になった状況でこれが爆発したら、俺は即座で気絶する可能性もある。

「……………>>コクツ<<」

とは言え、服は必要だった。

上衣は穴ができて使えなくなつて、包帯のまま一週間なんとかしたが外に出るとなると流石に服を着ないわけにはいかない。というかい加減焦らすと外の二人に迷惑だ。

「よし、行くぞ」

番号は……………まあ、買ったばかりだろうし000000だろう。

ガチャッ

「……………!……………うん?」

あれ、爆発しない。

どういふことだ?

中身を見てみる。

……中には制服一張が入っているだけだった。
嫌、それだけではない。

制服の上衣の上に、時計が一つおいてあった。
高価とかじゃなくて、普通の手首につける時計。

「……どうということだ？」

いや、たしかに今必要なものは入ってあった。だが、何故これしか入っていない。

「……いや、後で考えよう。今はまず街にでかける準備だ」

それにしても時計か……。

この時代だと確かに時計はない。

ランタンとか、ポラロイドカメラとかはあまりにもカルチャーショックが強くて駄目だが、時計ならなんとか許容範囲に入る……と思う。どうということかと言うと、これ売るつもりだ。

この時代だと、街に出ると収集欲がある街の金持ちとかがあるはずだ。

少なくとも飾り屋とかに売ってもある程度に協商できるはず。
いろいろとこの世界の金が必要なところがあった。

今回街に出る目的は見聞を広げるためでもあったが、何よりもお金の確保して……

> p f <

「でも、どこに金を使つつもりですか？」

孔明がそう聞いてくるのを見て、俺はふと鳳土元の方を見た。
さっきから、鳳土元は少し話から浮いているような気がする。

いや、まるでこつちの話に交じることを拒否ってるような気分だ。
……やはり、以前の事件のことでまだ怒ってるのだろうか。
謝りたいけど、今は孔明も居る。その話を表に出すのは後のことだ。

「金はどのみち必要となる。まずは無くした剣の代わりになるものも欲しい」

気を失う前に、鳳雛はたしかに俺の身近にあった。

バッグはー？に来てるのに、剣がないということは少し理屈に欠ける（この状況で理屈を求めることもいけないと思うが）

たしかにどこかにあるはずだ。

探さなければならぬ。アレは祖父さんの遺品であり、俺に肉親の温もりを感じさせる最後のモノだ。なくなったからとして諦めるつもりはない。

「それと……お礼もしなければならぬしな」

「……わかりました」

「……」

孔明が頷いたところで注文した料理が出てきたので、俺と土元たちはまず遅い朝食を済ませることにした。

……やはり、土元の顔が優れてない。そのうち隙を見て改めて謝った方がいいだろう。

・

・

・

割と、士元たちの用事は大したものではなかった。
塾で常備させる薬草や事前に注文しておいた貴重品などなど、後は、
塾の生徒たちからの必要なものを集めて買うようなものだった。

「あの、北郷さんはここで待ってもらえますか？」

「?.....それは構わないが.....何故だ？」

どうして、ここで俺は控えなければならないのか少しわからなかった。

女性品とか、男に見られたら不味い品物を扱う店ならもちろん外で
待つぐらいできないことはないが.....

どうして本屋にて俺を追い出す必要がある。

「えっと.....ですね.....雛里ちゃん」

「え、わ、私？あ、あわわ.....あわわ.....」

今気づいたが、鳳士元は予想してなかった状況が起きるとあわわと
唸るくせがある。

ぶつぶつぶやいているよりは可愛らしいと思う。

「.....// // // // !」

な、何を考えてるんだ、俺は！

「あ！そ、そうです。一刀さんはどうせこの文字は読めませんか
ら、入ってきてても他の人たちの邪魔になるだけですから、外に居た
方がいいかなあって」

「雛里ちゃん!?」

「……そ、そうだな…うむ、外で待っていてよう」

「あ、あの、北郷さん」

「そ、それじゃあ、私たちはちよつと……!」

「え、雛里ちゃん、待って、今の何?!」

二人が本屋に入って、俺一人だけが残った。

土元はなんと言い訳をしたのだろうか。覚えてない。

突然浮き上がってきた感情を抑えようと兎に角外に居ると言ったのだが……

「……うん?」

いや、待て、あれは……

> p f <

雛里SIDE

塾の娘たちから頼まれた本を選びます。

そのほぼが今回新作の、有名恋愛小説家の恋愛小説です。

今月は凄く沢山の人たちが新しい恋愛小説を発表した模様で、皆早く読みたくて血眼になってこつちに頼んできました。

私はあまりそういうのは好きじゃないですので良く分かりませんが、やっぱり男の人にこういう本選んでるのを見られるのはちよつと恥ずかしいです。

「雛里ちゃん、いくら何でも先のあれは言い過ぎじゃないかな」

「……え?」

私、なんて言ってたっけ。
咄嗟に振られて、慌てて何を言ったか覚えてない。

「私が言う口じゃないかも知れないけど、北郷さんは別の世界から来た人だし、文字が読めないのは当然だと思うの。あまり気に障るような言い方をしたら……」

「わ、私、そんなこと言ってたの？」

たしかに、先の店でも、一刀さんが菜谱が読めないと言って代わりに注文したこともあったけど、たしかに言い過ぎだった。

いくら荊州だと言っても、読み書きが出来る人たちは並以上の財力を持っている人たちのみで、平民の中では文字が読めないというのがそれほど大変なことでもない。

増しては他の世界から来た一刀さんはここで使う文字が似てるけど、使い方がまったく違うと言っていた。

私に五胡が使う文字を見なさいって言ってもわからないのと同じなはず。

「……一刀さん、怒ってるかな」

「……わからないよ。あの時、ちょっと顔赤くなってたかも」

やっぱり……

あんな無礼なこと言われて怒らない方がおかしいよね。

……

「朱里ちゃん、私ちょっと一刀さんに謝ってくる」

「あ、うん、分かったよ。本は大体選んだから、後は私がまとめて買っておくね」

「うん」

私は朱里ちゃんに自分のために選んだ新作の軍略書などを渡して、本屋の外に出ました。

「一刀さん」

でも、本屋の前で私たちを待ってたはずの一刀さんは姿が見えませ
ん。

「……………」

どこに行っちゃったんだろう。

ざわざわ・・・

「あ」

何か、街の真ん中に人が多く集まって騒いでます。

「なんとかかいたるんだべ？」

「わかんねー、俺は文字よめねーんだわ」

「誰か文字読める奴呼んでこいよ」

「見ても分からん奴が真ん前にでなにしてくだよ、とつとどけよ」

何か、街の掲示板みたいところに皆が集まっています。

……

「…ああ、駄目だ。俺にもわからん。誰か文に詳しいやつちや居な
いかー！」

「誰か村長呼んできてくれよ」

「村長は病気だろ。他にねーのかよ」

集まってみる皆、掲示板の文が読めなくて困ってるようです。ある程度文が分かる人でも読めないなんて…なんで掲示板にそんな難しい文を書いておいたのでしょうか。
… ちょっと、気になって来ました。

「ううう…でも、人が沢山にいて通れそうにないです」

誰か読める人が前に出るまで待つしかないでしょうか。

「……………うん？おい、君」

「…へ？」

「その制服って、水鏡女学院の生徒だよな」

「は、はい」

掲示板の後にいた人群中の中で、男の一人が私を見つけてそう言いました。

「悪いが、前に出て何のことが見てもらえないか？ここに集まっている奴皆アホ臭いし、誰か文字読める奴が出て読んでもらわんとよ」
「え、ええっと……………」

そんなことより、早く一刀さんを探しに行きたかったのですが……
確かにこのままだとこの騒ぎ、街を渋滞させかねません。

「わ、わかりました」

ちょっと人前に行くのは恥ずかしいですけど、やってみます。

「おい！その文字よめねー阿呆ども退け！ここに水鏡先生の弟子

がお出ましたぜ！」

「おじさん！だからってそんな言い方は……！」

「何！あの水鏡先生の弟子とな？」

「おい、そこ、早う退けや！つつ立つてても何も変わらんたる」

でも、おかげで掲示板を深く囲んでいた人の群れが私の前の道を空
いてくれました。

…な、なんだか人たちの目が注目されていて恥ずかしいです！

「おい、何とかいたるんだべ？早く教えてよ」

後から促す声が聞こえてきます。

早く掲示文だけ読んで、さっさと一刀さんを探しに行きましょう。

何せ、読むだけなら噛む必要もないですし。

……噛みませんよ？

「えつと……」

文にはすごい達筆で、こう書かれてありました。

『『黒天を切り裂いて、

天より飛来する一筋の流星、

その流星は輝かし天の御使いを乗せ、

乱世を鎮静す』』

「……………」

……こねって

「つまり、どういうことだ？」

「…予言です」

この乱れた世を静する天からの使いが来るとの予言。
一体誰がこんなものを……

「天の御使いってよ」

「乱世を鎮静するって、どういうことだ？」

「平和にさせるってんちゃうか？最近はなにやら世の中物騒だしよ」

「ああ、周りの賊も増えたるし、ここの太守も逃げようと財宝を集めてるって噂だぜ」

「でも、天の御使いが世を平和にするってんだろ」

「阿呆、そんなもん信じられるかっての」

「でもよ、確かこの前流星がたくさん落ちてたたる。何かの兆候じやねーのか」

「国が滅びる兆候じやなきやいいがな」

「でも、もし本当に天の御使いが来るとしたら……」

……もしかして、

「……もし、天の御使いが本当に流れ星から天の御使いが来るとしたら……」

……！

「す、すみません。私は用事があるので、こ、これで失礼しましゆ
！」

文を読んでからでも内容について嘘だ真だと騒いでる人たちをくぐり抜けて、私は一刀さんを探すために街を走りはじめました。

流れ星、輝かし天の御使い、一刀さん、そして間もなく出てきた予言でない予言。

もしこの話たちが全て繋がっているものだとしたら……

「……………一刀さん!!」

早く一刀さんを見つけないと……

> p f <

「へへー、こんなところでこんなマグロ女に会うなんてやはり俺さまが運がいいぜ」

「流石はアニキだぜ」

「尊敬するんだな」

……………
街でふと見たときは見間違いかも思ったが、自分の勘を信じて正解だったな。

俺が見た場面とはつまり、男三人が気絶したような女一人を連れて人があまり通らなさそうな狭い通路を通るところだった。

奴らを追ってその通路を抜けてみると、そこには人がない敷地があつて、女一人をめぐって男三人はどうもいいことを考えてるようには見えない。

「最初は俺さまだ。お前らはその後でな」

「二番目は俺だ。デブは最後でいいだろ」

「お、俺も早くしたんだな」
「……………」

どうも女の人は動きがない。
これ以上隠れていたところで状況は明らかのようにだ。
このままだとあいつらに女が輪姦される寸前だ。

「おい、そのデブ」
「うん？」
「歯を食い縛れ」

まずは正面で当たると一番厄介そうな奴から先攻を取る。
体躯がデカいし刃物でもなければ体の急所を手足で叩くのは難しそ
うだったので、仕方なく加速をかけて頭を狙う。

「うううっ……………」

走っていくスピードに加えて蹴りを与えると、頭に衝撃をくらった
デブはよろよろとしながらその場に後に倒れた。
軽い脳震盪を起こしたのだろう。

「てめえ、何者だ！」
「よくもデブを…！」
「はあ…………どの時代でも、お前らみたいなチンピラどものレパトリ
ーは変わる気がしないね」

女を地面に落として残った二人の中で小さい奴が懐から剣を出した。

「なめてんじゃねー」
「…！」

一直線に剣をもつてかけてくるチビを避けながらも、一瞬迷いもなく刃物を使ってくる奴に驚いた。

そうか、ここは三国時代、それも乱世にて世が険悪になっている。現代の平和な時期のチンピラとは考え方が違うというわけだ。人殺しも平然と出来るかも知れない。

「益々危険だな」

だけど、一週間動かしてない体への準備運動としては丁度いい。

「まだこんなもんじゃねー！」

「が、別に習った剣でなければな…」

剣を振るうだけなら当たるわけがない。

短剣でリーチは短く、剣がどう動くかも見えてる。

問題は体がどれだけそれを早く読み取り、避ける動きが出来るか。

スッ

スッ

スッ

軽くチビの短剣を躲して行く。

「てめえ、ちょこちょこ避けるんじゃねー！」

「避けなければ俺は傷つく。せつかく治ったのだ。貴様は人を殺してみたことがあるのか？」

「はあ？んなもん、当たり前だろ！俺たちが誰だと思ってんだ？」

「……動けなくなった女を犯そうとする下衆の群れ。それ以上お前からについて知る必要はない」

ガーン！

「なっ！」

剣を振るう間にチビの手首が空になっているところを見て蹴りでそこを叩くと、チビが持っていた短剣が宙を舞う。
そして、運悪くも

「ぐあああああ……！」

「あ、アニキ！」

「……すまん」

つつ立つて部下が俺と戦っている場面を見ていた親玉の足にブスツと入ってしまった。

「おい、大丈夫か？」

血を見るつもりはなかったのだが……

「あ、アニキ！」

「ち、チビ……てめえ……」

「ご、誤解だよ、アニキ、これはあいつが……」

「ふざけんな……！」

スッ！

「！おい、そこのチビ伏せろ！」

親玉は迷いもなく自分が持っていた短剣をチビに向かって投げた。そう、その軌道は間違わずチビに向かっていった。

「んなつ！」

「ちっ！」

が、一瞬反応が遅かったチビの頸筋を狙って飛んでくる短剣を見て俺は今度はチビの無防備になった腰を蹴った。

「ぐへっ！」

となると、自然的に短剣の軌道に俺が立っていることになるわけで…

「おっと！」

ある映画に出た場面のように背筋を後に曲げて剣の軌道から身を離れた。

虚空を切った剣はそのまま反対側にあった壁に突き刺さる。

「ふう…」

「ううう…ガクッ」

俺に蹴り飛ばされたチビは離れたところで気絶した。

後は親玉一人。

「ちっ！」

「おい、お前さつき部下に向けて剣を投げたな。どういっつもりだ」「うるせー、親分に剣を刺す部下なんて知るかよ」

痛みを耐えながら自分の足に刺さっていた剣を抜いた親玉は、その血がついた剣を持って俺に仕掛けてくる。

「死ねー!!」

「死を簡単に口にするな」

地面から砂を一握り持った。

「あまり卑怯な真似はしたくないが……」

そしてそれをそのまま走ってくる親玉に投げる。

「うっ！」

「痛みは一瞬だ」

ブスッ！

「うぐう……」

鳩尾に綺麗にレフトが入って、親玉の奴は剣を落として前に倒れた。

「ひ、卑怯……だ……ガクッ」

「……否定はしない」

たしかに卑怯だった。

……こっちも3……1だったから……という言い訳はないか。

「ソレよりも……」

全部片付いたところで倒れている女のところに行く。

近くで見ると結構若い人だった。

「お嬢さん、動けるか？」

「……………」

「しっかりしてみろ、おい」

「……………ほうおお……………」

駄目だ。

気はあるけど、言うことがおかしい。
何か薬でも使われたのか。

「おい、お前ら！この人に薬を使ったな。解毒剤持ってるだろ！」
「……………しらねー、俺たちが見た時は……………もうああだった」

…倒れているうちのチビがそう答えた。
一番手加減してたから気が戻ったらしい。

「お前の親玉の足でも診てる」

「……………」

「人間血を見ると一気に頭に来ることもある。見逃してやるからさ
つさと散れ」

「……………おい、デブ起きろ！」

「うつ！な、何だな？」

デブがチビの蹴りを食らって正気に戻る。
あっちはもうなんとかするだろう。

「おい、お嬢さん」

「……………鳳凰が……………」

「鳳凰？」

「……!!」

突然、よろよると焦点が合わない目をしていた女が俺の顔に近づいた。

「!!」

「凍った卵の中の凍った心を持つもの。火の心を持った鳳の口づけにその心を溶かし、鳳になって共に喜びに満ちて天を舞い踊らば、汝らを仰ぐものが万々なるも、その熱に敵うモノあらず」

「……………?」

何の話を……………

「!……………お嬢さん?」

ふと気がついた時、俺が抱いていた女は姿がなかった。

……………一体どうなってるんだ?

「アニキ、行こうぜ」

「しっかりするんだな」

「……………ってめえ……………後悔させたる……………俺さまを敵に回した罪は重いぞ」

最後にデブに背負われて消えるチンピラの親玉がそんなことを言っていた気がするが、あまりの驚きにあの時はそんな下らない話は耳に入らなかった。

……………実際は、あんなに大変なことになってしまっていたが……………

……………

•
•

第一章 六話 お出掛け（中編）（後書き）

ここでは同時にあげてる外史らですが、実は順番に見ないと不具合があつたりします。

この外史の場合、黙々シリーズを読んでないとエキストラ組がやっていることがさっぱり分からなかったりします。後でこういう不具合を減らせるために、大抵な話を上げておこうとは思いますが、それでも色々問題はあるかと……

あ、最近TINAMI側に来てくださる方々がややあります。今ここにあげてる外史は全てTINAMIでは投稿済みです。結構進んでますので、待ってられないという方はそっちに行ってみてもいいかと思われます。名前は同じなのを使っています。

第一章 六話 お出掛け(後編)(前書き)

ばーくーはーっ

第一章 六話 お出掛け（後編）

雜里SIDE

「…一刀さん！」

一体どこにいるんですか、一刀さん……

「一刀さん！！！」

あ。

あの細道から出てくる人って……

「一刀さん！」

「……！土元か」

こっちに気づいた一刀さんはゆっくりとこっちに来ました。

「買い物は終わったのか？」

「それどころじゃありません！」

「……？」

「一体どこに居たのですか」

「いや、ちよつとな……うっん……ちよつと見物のため見回ってたの
だが…探してたのか」

「当たり前です。どうしてちゃんと待っていないんですか」

「……何もそこまで怒ることはないだろ。何かあったのか」

キラキラっ

「……あ」
「？」

時は日が頂点に昇る頃。

一刀さんの服は、朝よりも更に強くなった日差しに輝いていました。

「…一刀さん、今直ぐ脱いでください」

「え？」

「いいからその上着脱いでください！」

「わわわー、わかった。わかったから……！」

私が無理矢理上着を引っ張って脱がそうとすると、慌てた一刀さんは急いで上着を脱いで自分の腰に巻きましたが、まだ輝いて目立ちます。

「あわわ……」

「…なんだ？どうしたのだ？」

一刀さんは私がやってることがわからなくてそのまま私を見つめます。

「あの、実は…一刀さん」

「あ、そうだ。土元」

「はい？」

「買い物は済んだのだな」

「はい？…はい、そうですけど」

「丁度いい。孔明と会う前に少し付き合ってくれ」

「え？」

「一刀さんが私を連れてきた場所は街のある高価な飾りを扱って居る店でした。」
「宝石や女の人の指輪、首飾り、壁に飾るための装式用剣など、いろんなものが揃ってます。」

「店主」

「一刀さん？」

「どうしてこんなところに……」

「はい、どちらさまでしょうか」

「少しいいか」

「結構ですが、どのような用件で……」

「商談だが、こいつをどのぐらいの値段なら買つかね」

「あ」

「分かりました。」

「朝言っていた一刀さんの時計。」

「一刀さんはここにそれを売るつもりです。」

「……あれ、でもそれってこんなところに売ってしまったら……」

「……これは……？」

「時計だ。手首に付ける仕組みになっていて、東方の匠が作ったものだ」

「……少し見せていただいても……」

「お好きに」

一刀さんが時計を店の人に渡すと、店の人はそれを宝石の傷を見るときに使う小さな拡大鏡で見ました。

「ものはほぼ新しいものと同じですね。うまく保管されていたようです」

「それも重要だな」

「もちろんです。恐れながら、わたくしの店に来ている方々は皆この辺りの方の中でも裕福な商人や貴族やその若様など。質はわたくしの店で一番大事なものです」

「が、その物件は他の宝石や金銀のものとは違う。大事なのはそれがこの大陸でたった一つだけのものだと言うことだ」

「……たしかに、手につける時計など聞いたことがありますね。失礼ながらこれはどのような方法で手に入れたのでしょうか」

「それを知らせたら商売にならん。東方の海を渡ったところから持ってきたとだけ言おう」

「こんなものがまたあるのですか？」

「そういうのは、それ一つしかない。それをつくった匠も今は居ない。もう自分そのようなものを作る人は現れないだろう」

「なるほど……」

店の人は商人の顔になってもう一度その時計を見てみたり、自分の手首に付けてみたりします。

「どうする、買うか？」

「……良いでしょう。お値段はどれぐらいで？」

「……」

お値段のことを聞くと、一刀さんはそこに座って私を目線を合わせました。

「土元」

「な、何ですか？」

「……鶏一匹ならいくらだ？」

「……………え？」

なんですか、その基準！？

「えっと……………ぐらい……」

「じゃあ、それを十倍すれば」

「……………ぐらいです」

「じゃあ、千倍」

「……………一刀さん、もしかして」

そんな価格であれを売るつもりですか？

「そんなのボツタクリですよ」

「大丈夫。金の単位が知りたいだけだから」

「えっと……………」

私は値段を言うと、一刀さんは笑って立ち上がりました。

「店主」

「そして豪快に言いました」

「××××で、どうだ？」

それは……………鶏で言うと1万匹分の値段でした。

「……そのような値段、聞いたことがありません」

「そして、店主もそのようなものは売ったことがない」

「そのとおりです。だからこそ、このようなものをそんな値段で買うわけにはなりませんね」

「……」

「この店で一番高い宝石でも、それよりは安いです」

「店主、さっきこう言ったな。自分の店には多くの金持ちたちが通つてると」

「そ、そうですが……」

「その中で、いきなり金持ちになった部類の人たちがいるだろ？ 例えば…… 朝廷の宦官たちに賄賂を入れて一気にあがったものや……」

「……」

「そいつらの息子や娘にこれを売ってみろ。今俺が言った何十倍の価格でも、世界でたった一つの宝石だとポツタクつたら家ごとお前に与えてくれるだろう」

「……いくらなんでも、その価格はこちらには払えそうにないですね。××××ならどうですか？」

「仕方がないね。それじゃあ、××××で。じゃなければ、それをこのままあそこの豪族の家に俺が仕上げた価格の二倍に売ってしまうぞ。それならお前には何の利益もあるまい」

「うううむ……」

店の人は少し唸ってました。

こんな金、まるで聞いたこともありません。

一刀さんは一体そんな金で何をしようとしてるんでしょうか……

「いいでしょう。××××です。これ以上はこちらとしても払えません」

店の人が言った価格は一刀さんが言った値段の五分の一。つまり鶏

でだと二千匹です

「……まあ、初商談だ。それぐらいで負けてやるっ」

「宜しいですか」

「結構で。先払いで一割をここでもらおう。物はここで預かっておけ」

「いいでしょう。ご安心を、わたくしは客からの信頼を食べて生きる商人ですから」

「……信用しよう」

一刀さんは、時計をその人に渡しました。

> p f <

そうやって、一刀さんには今、鶏二百匹分の……

「もう鶏はいいです」

「何の話だ？」

「なんでもありません」

それより、

「そのお金、どうするのですか。もしかして、本当に鶏を……」

「じゃなければ鶏単位で聞いてないだろ」

「やっぱり……」

「まあ、鶏だけだとつまらないか……他に豚とか……この中国だから羊の肉とかも売ってるんじゃないか」

「もしかして、そのお金で、全部肉を買うつもりですか」

今日のお肉屋さんのおじさんたちは売上げが絶好調になりそうです。

「……あ、そういえば……」

「何ですか？」

そういえば、一刀さんを探してたのって、何か言いたいことがあった気がするんですけど……
何かもう、頭の中に鶏の話しか残っていません。

「俺のせいで二人の飾りが買えなくなってたな」

「……あ」

そういえば、朝ご飯抜いて二人で飾りを買おうと思ってたのに、一刀さんにバレてしまって……

「金はあるし……借りもある。返さない理由はない」

「え？じゃあ……」

「取り敢えず孔明のところに行こう。話はそれからだ」

「……はい！」

この時はすごく嬉しかったです。

・

・

・

「二人とも私を置いてどこに行ってたんですか！」

「すみません」

今はすごく辛いです。

街の真ん中で正座されて、一刀さんと一？に朱里ちゃんの説教をうけています。

こういう時の朱里ちゃんは、百合お姉ちゃんを思い出させます。

「心配したんだよ！」

「いや、孔明、実は俺が……」

「北郷さんのことは心配していません！」

「だろうな」

即座にそっぽを向いて口を閉じます。

あれ、一刀さん、拗ねてます？

「雛里ちゃん！」

「は、はい！」

「今まで北郷さんと何処行ってたの？」

「え、えっと……時計を店に売って……その前は街で一刀さんを探して……その前には……」

あ。

「あわわー！！」

思い出しました！

「はわっ！な、何急に叫びながら立ち上がったちゃって」

「あのね、朱里ちゃん。さっき掲示板でこんな話が書かれていて……」

……

「俺はいつまで正座してればいいんだ？」

「北郷さんはそのままでもいいです。立って話すと頸が痛みますから」「そうか。それはたしかに良くないな」

というわけで一刀さんは正座のまま、私は掲示板で見た予言のことを二人に話しました。

> p f <

「それって……じゃあ、北郷さんが……」

話を聞いたら、朱里ちゃんもどういことが気がついて一刀さんの方を見ました。

「道理で先俺に上着を脱げって言ったのか」

「え！？ 雛里ちゃん…こんな真昼間になんてことを……」

え！？ 何か視線がこっちに傾いてる！？

「あ、あわわ、あれは、ほ、他に邪があつたわけではなきゅ…！単に輝いてる服を着ていて人たちに目立つたら危ないかなとおもっただけででしゅね」

「……とはいえ、さっきまでも俺は普通に街を歩いていた。別に人の服が輝いてるとか、人は気づかないし、気づいたところでその人の服が輝いてるからって自分たちを救う天の御使いなんて思わない」

「一刀さん？」

「俺の世界でも良くあつた話だ。時代にて終末感を感じる時、いろいろな予言がある。救世論、滅亡論、だが、結局どっちもその結果を出すのはその時を生きる人間たちの仕業だ。天から落ちてきた胡

散臭い天の御使いじゃなくて……な」

「でも、実際そんな予言をした人が居ますし、一刀さんはここに来ました」

「ただの偶然だ。度が過ぎたインチキ占い。ただ……」

その時、きのせいでしょうか。

一刀さんの顔が少し笑ったように見えました。

「乱世を鎮めるか……それが俺がこの世界に来た理由というもの……俺が目指すべき目標ということか……人間一人に背負わせるには荷が重すぎる」

「こんな時代です。もしこんな話が本当に大陸中に広まっているとしたら、それを信じる人たちも多いはずです」

朱里ちゃんも真剣なかおで言いました。

「人は自分に出来ることをしなければならぬ。自分で全力を出さない者には、天も手を伸ばしてくれない。それがこんな紙で人が誑かされるのなら、人たちは自分たちで自分たちを守る意志を失うかもしれない」

「だ、だけど、天の御使いは実際にこうしているじゃないですか」

「俺に何の力があって天下を鎮める……俺は知らない世界に落ちた人間。力も知識も足りない。人たちが求めるようなことが出来る神のような存在ではない」

「……………」

「結局、あの文が本当か否かが問題ではなく、それを信じるか否かが状況を変えることになるでしょう」

「もし信じる人が多くて、人たちが本当に天の御使いを求めるなら、それを名乗る者も現れる。朝廷に力が残ってる今のうちはまだ静かだろうけど、そのうち現れては人たちを誑かすだろう。そして、天

を取ろうとする英雄たちもまたその天の御使いを名乗るか、もしくはそういう連中を手を組む。そうすると乱世は更に加速するだろう」「そんな……」

二人の話を合わせると、

結局あの予言は世を乱れを更に深くすることではないというわけじゃないですか。

「と、それはそうとしてだ」

咄嗟に、一刀さんが正座から立ち上がりました。

少し足がビリビリしてるようでしたが、顔にはあまり出ていません。

「孔明、買い物などはもう全部済んだな」

「あ、はい、二人が居ない間、待ってるだけでもなんでして、残った用事も済ませました」

「丁度いい。朝のご飯のお礼だ。行こう」

「え？どこに……」

「あ、一刀さんが時計売った金で私たちのお飾り買ってくれるって……」

「はわ！いい、いいんですか？」

「まあ…金が許す範囲内だね」

いっておきますけど、私たちが買おうとした飾りなんて、にわ……

あわわ……

>ロチ<

「雛里ちゃん、これなんてどう？」

「えっと……ちょっと派手じゃないかな。あまり高いものにする、他の娘たちにどうやって買ったのかって聞かれちゃうし」

「はわわ…それもそうだね」

というわけで、私たちは朝見ていた飾り屋さんのところに来ています。

飾り屋っていつても、一刀さんが時計を売っていたような豪華なものを扱うところではなく、普通の庶民の人たちが使う飾りなどを扱っているところです。

「決まったか」

「あ、もうちょっと待っていてください」

「……………」

一刀さんはあまりこういうのには興味がなさらしく、外で私たちが選ぶのを待っていてくれます。

今度はどこかにいってしまったわけなのですが……
後、あまり日に当たるところにも……

「……………！店主」

と思ったら、突然一刀さんが店の人を呼びました。

「はい、なんでしょう」

「あれは……………」

「ああ、お客さん目がいいですね。今日新しく入ったものでして……
…狼の皮を使った手袋です」

一刀さんが見たのは手袋。指のところはなく、手のひらの部分だけはめるものです。

でも、何故か一刀さんの顔が暗いです。

「狼というのは……あの水鏡塾の山の裏のものか」

「……どうしてそれを……」

「……あいつ」

眉間に皺を作りながら一刀さんはその手袋を取りました。

「……もらおう」

「はい、ありがとうございます」

「……」

「一刀さん？」

その日、一刀さんは帰るまでずっと顔を暗くしていました。

……ちなみに飾りを買ったお金以外には本当に全部鶏を買いました。

> p f <

その日の夜のことです。

朱里ちゃんから、その日買った自分たちのものを整理していました。

「あれ？」

そしたら、私が買った本の中に、自分が選んでいないものが入っていました。

「朱里ちゃん、これ、私のじゃないけど…」

「え？でも、雛里ちゃん、私に本くれる時それもー？にあったよ？」

「あわわ、そうだったの」

間違っ取っちゃったかな。

どんな本だろう。

ぴらっ……

……

「あ、あわわー！！」

「はわっ！何！何！！」

すごく驚いて本を閉じました。

「どうしたの、雛里ちゃん、夜なのにあまり大きな声するとびっく
りするじゃない」

「な、なななな、」

何あれー！

男の人たちが……！

男の人たち同士で裸で絡みあつて……！！

「えっと……何々……」

「朱里ちゃん、だめ！それは……！」

私が落とした本を、朱里ちゃんが開いて読み始めました。

「ふむふむ……」

「……朱里ちゃん？」

「……考えただくと新しいけど、文章はいまいちだね。こづいこのは読者の想像力に任せるってものじゃないよ」

「朱里ちゃん？」

何か冷静に評価してる。

「朱里ちゃん、なんともないの？」

「へ？」

「だって、男の人二人で……おかしいじゃない」

「……雛里ちゃん、今の時代はね。恋愛は男と女のものだけではないと思っの」

「……へ？」

何を……

「そう、あの最近北で有名になっている曹嵩さんの娘、曹孟徳だつて、女の子が好きで男の人はまったく側に置かず、每晚その閨の中では女の人の嬌声が上がると言うよ。それなら……！男同士の、友情を越えた「愛」があつてもおかしくない！」

「朱里ちゃん、落ち着いて！」

こんなの私が知ってる朱里ちゃんと違う！

「そう！いや、むしろ男の人の間の友情なんて実は全部嘘だよ！男同士の友情なんてあるはずないもん！実は好きなのに、それを隠すために友情という安易な言葉が生まれたんだよ」

いやああ、朱里ちゃんが壊れてるー！

「そつだ。雛里ちゃん」

「ひっ！」

「な、何か怖い」

「ほら、雛里ちゃんもー？に読もうね。こんなじゃなくても、私
が他にいい作品たくさん買ってきてあるから」

「わ、私、ちよつと一刀さんのところに行つてきくるね。あの鶏ど
うするのか気になるし…先に寝てて…行つてきましゆ！」

逃げよう！

朱里ちゃんが寝るまで！

> p f <

一刀さんの部屋に付いて直ぐに門を開きました。

がらっ！

「一刀さん！」

「なっ！」

……

「……あわわー！！」

……

……

少し時間が過ぎて、

がちや

「……鳳土元？」

「あ、あの、ごめんなさい」

「……いや、鍵締めてなかった俺のせいだ」

なんといいいますか……

さっき本の中に出てきた男の人たちより体がすごかったで、あわわ！なんでもないです！

「って、あれ？それを持ってどこに行くんですか？」

「うん？ああ」

一刀さんの背中と両手には、今日街で買った調理してない鶏がたくさん入っていました。

かなりの数なのに、持っていて重くないのでしょうか。

「ちよつと出かける。他の人たちには言わないでくれ」

「こんな夜にですか？……私も一？に行きます」

「いや、鳳土元は……」

「じゃないと、水鏡先生に言いに行きます」

「……わかった」

仕方ないと言いながら、一刀さんは私に以前見たランタンを渡しました。

「ちゃんと持っていてくれ。今度は間違つて足元を見間違つちやいけないからな」

「あ、はい……」

> p f <

塾の後門に出た先に、随分と奥まで入ってきています。

「か、一刀さん、ちょっと深く入り過ぎじゃないですか？」

「これぐらいじゃないと、今あいつらなさそうだからな」

「どういう……あ」

まさか、一刀さんがここに来た理由って

「まあ、ここぐらいでいいか。すー」

息を吸った一刀さんは、

ひゅーうー……

長く強く口笛を吹き始めました。

「一刀さん、もしかしてあの狼たちを……」

ひゅー……

「そうだよ」

口笛を止めて一刀さんは答えました。

「どうしてですか？せつかく無事に戻ってきたのに」

「だからじゃないか。俺は約束は必ず守るんだ。俺を信じてくれるものは誰でも裏切りはしない。それが人じゃないとしてもだ」

ひゅー……！！

「……」

そう言っつて一刀さんはまた口笛を吹き始めました。

そして、

アウー……！！

アウー……！！

アウウウー……！！

周りから狼の鳴き声が上がってきます。

「うううっ！」

私は怖くなって一刀さんの近くに迫りました。

「大丈夫だよ。今度は食われたいしないさ。ちゃんとお供えも用意してあるし」

やがて、一匹、二匹と狼たちが姿を見せてきました。

そして、

「……また会ったな」

グルル―

あの時の大きな狼、この群れの主です。

「約束を守りに来た」

そう言った一刀さんは、自分が持ってきた鶏が入った箱たちをおろしました。

グルル―……

「なんと言ってるんですか？」

「……俺たちは人間に餌をもらう犬とは違つとな。おい、おい、頼むよ。俺は約束した通りに……」

グルル―！！

「……」

主狼の唸りに一刀さんは少し下がりました。

「……事情は分かっている。あの時の奴、人間に狩られたな」
「へ？」

じゃあ、あの飾り屋で買った手袋って、ここの狼さんたちの仲間の

……

グルル……

「……ああ……悪い……息子だったか」

「あ」

しかも、主狼の息子。

「食べ物がないところで丁度人間が通るのを見たのだろう。普段なら団体で襲うべきだが、奴は恐らくお腹が減っていて他の奴らと肉を分けたくなかった。だから一人で襲ったのが……運悪くも返り討ちにあっただってわけか」

グルル……『愚かな息子だった』理解しやすくするため翻訳します。雛里ちゃんはこれがどういう意味か知りません。

「そう言うな。ただ飢えていたせいで頭が回らなかったただけだ。あ、それと……」

……

「あいつの皮の一部だ。これもお前にあげよう」

一刀さんは手袋を持ち出して鶏の箱の上に置きながら言いました。

グルル……『肉はもらおう。それは持って行け』

「そうか……」

目を閉じて軽くため息をついた一刀さんは、その手袋を自分の懐に

戻しました。

……アオオー『お前ら、食っていいぞ』
アオオー『食いもん！食いもんだ！』
アオオー『俺が一番のりだ！』

狼たちが鳴き始めると、一匹、二匹、どんどん前に出て箱を倒して中の鶏をかじりはじめました。

グルルー『礼を言わねばならん。貴様がきてなければ、俺たちは今夜にでも街を襲っていたかもしれぬ』

「……塾は襲わないのか」

グルルー『その若い女には恩がある』

「そうか……また来るとしよう」

グルルー『一度はもらう。だが俺たちは飼い犬ではない。俺たちを餌付けようとするれば貴様も食ってやる』

「約束では数倍で返すと言っていた。それではまだ二倍ぐらいにしかなくてない」

まさか、また買ってくる気ですか、鶏？

「帰るよ、鳳土元」

「あ、あの！」

あの場でどうしても聞きたかったです。

「一刀さん、約束って大事にしてるんですか？」

「……………？約束を守ることは大事だ。約束は自分がそれが出来ると言い切ったものと同時に相手に自分を信じてもいいと安心させたものでもある。約束を守らないことは自分と相手の信頼を裏切ることだ。人間としてすることではない」

「じゃあ、どうして私のこと、真名で呼んでくれないんですか？」

「……………え？」

グルルー！！『許された真名を呼ばないなど、許されてない真名を呼ぶことに等しい罪だな！』

「……………あ……………マジで？」

一刀さんの顔が白くなっています。

「いや、あの、態とじゃなくてなあ……………覚えてはいたんだけど……………何か呼ぼうとしたら、余計にあの時のこと思い出しちゃって……………」

「……………」

「…済まん！」

「あの時のことって…何ですか？」

「え？そりゃ……………うん……………アレだ……………分かるだろ？」

一刀さん、ランタンで顔を見ると、ちょっと赤くなっています。

……………何か面白いです。

「わかりません。何なんですか？私の大事な大事な真名を呼んでくれないなんて、一体どんなことがあったのですか？」

「っ！」

「なんですか？」

態と近づいて、一刀さんを困らせてみます。

「っ、ほ、鳳土元と……………」

「真名で呼んでください」

「ひ、雛里と……………」

「あ、ちゃん付けした方がいいです」

「！」

「私と、何ですか？」

「わ、態とやってるだろ」

「何怒っているのですか？怒る側は真名を穢された私の方なんです。一刀さんが怒る場面なんかじゃありません」

今日散々一刀さんのせいで変なことに合いましたから、今回はそのお返しです。

「……………／／／／／／／／」

「……………>>につこり<<」

「ひ、雛里……………ちゃんと……………キスしたこと思い出すから」

「……………」

「……………」

「……………あ、あわわ……………」

「……………／／／／／／／／」

「……………／／／／／／／／」

え、自爆？

自爆ですか、これ？

良く考えてみると自爆ですね。

「き、キスって言うんですか。接吻のこと」
「……………ああ」

グルルー>>お前ら帰って家でやれ<<

狼さんが何か唸ってますが聞こえませんが。

「わ、私も実は、それちょっと気にしてましたけど…でも、ほ、ほら、あれです。よくよく考えてみるとですね……………」

「……………」

逃れませんか。

いえ、逃れる道が見当たりません。

そんなことはなかった？いいえ、当たってましたから。あの時気絶したけど完全に感触残ってましたから。

互い承知の上でなかったことにしますか？いや、朱里ちゃんもう知ってますから。私の初めて奪われたのもう確定ですから。

「と、とにかく！そんなどうでもいいことよりもですね」

「どうでもいいのか！」

なんでそこで私が考えた最後の逃げ道を防ぐのですか、この人は！

「どうでもいいです！（駄目押し）それより、真名のことです！」

「は、はい」

「じ、今回のことは許してあげます。だから、今度はちゃんと真名で呼んでください」

「……………」

「いいですか？」

「……分かった……でもちゃんはやめる」

「付けてください」

「何故そこで引かない」

「引きませんよ。一刀さんに断る資格なんてありません」

「そんな……」

「どうしてそこまで嫌がるんですか」

「じゃあ、お前が俺をさん抜いて呼んでみる」

「！……いい、いいですよ」

「！」

「すー……一刀」

「……」

「……／／／／／……さん」

「お、お前も、駄目じゃないか／／／／／」

「ごめんしやい。あうう……」

グルルー 『お前らもう帰れ、マジで』

何か、すごく恥ずかしいことやっちゃった気がします。

それから数日間、一刀さんは街で鶏や豚やいろんな肉を買ってきて、狼さんたちに披露しました。

一刀さんはあの時狼さんたちに言った言葉を本当に守るためにあの時計を売ったのです。

あの日以来私は付いて言ったことはないです。だけど、一刀さんはやっぱりずつといい人だなって思いました。

そして、この人が天の御使いになるのなら、きっと乱世に苦しんで

いる人たちを助けてくれるって、私たちを助けてくれるって思いました。

そして、そんな風になったら私がこの人の軍師になればいいなとも…思いました。

・

・

・

第一章 六話 お出掛け（後編）（後書き）

狼の声：俺たちの声

第一章 七話 元直が現れて、一刀は自分から逃げようとする（前書き）

自分のオリキャラの一人である徐元直こと、奏里（かなり、通称奏）が登場します。今更ですが、この外史、これからも結構な数のオリキャラが出てくる予定。

自作の外史に出したキャラや、TINAMIやPIXIVで恋姫のオリキャラの絵や設定を作ってらっしゃる金髪のクウレイトー！さんの設定からも出てきます。その時はその時おいおい説明します。

第一章 七話 元直が現れて、一刀は自分から逃げようとする

雛里SIDE

「先生」

「どうしたのですか、雛里？」

買い物に出たあの日から何日かが経って、私は授業の後先生のところに一人で訪ねました。

「実は、相談したいことが……」

「……いいでしょう。ほら、入って座って」

「はい」

椅子に座ると、先生がお茶を入れてくれます。

先生の部屋は良く将来についての悩み事やいろんな塾での出来事で苦しんでいる娘たちが良く相談に来ます。

それで先生の部屋はいつもそんな娘たちを落ち着かせるためのお茶や、香とかが備えてあります。

それで、ここに来ると心が落ち着いて、嫌なこととか、直ぐに吐き出せるようになります。

「……はあ……ふう」

深呼吸をして、お茶を一杯飲んでから私は先生を見ました。

「どうしたのですか、雛里。朱里も居ないであなた一人で来るなん

て珍しいですわね。……もしかして」

「ち、違います。別に喧嘩とかしたわけではないです。今回はそれでなく……この前街であるものを見て、それを相談しようと思って」

「あるもの？」

「はい」

私はこの前街で見た、天の御使いについての預言書について、先生に話しました。

「そう、そんな話があったのですか」

「朱里ちゃんはあまり信じていない様子でしたし、一刀さんもあまり良しとは思ってない様子でしたけど、私はきつと、その話は一刀さんのことを差しているのだって……」

「あの二人が考えたことは間違いありませんわ」

「……へ？」

どういうことですか？

「実際に、そのような予言は、大陸の各地で噂されているそうです。どこから始まったのかはわかりませんが、流れ星を乗って乱世を鎮める天の御使いが落ちてくるという予言はここ最近広まってきている予言の一つですわ」

「……先生も、そういうのはないと思っっているのですか」

「……そうですね……朱里と北郷さんが言っていた通り、天の御使いというものは本当にあるとしても、本当に乱世を鎮めるほどの力を持つためには、人たちの信望がなければなりません。だけど人の心が弱っているこの時期。そのような話が本当だとしても、それを悪用するか、あるいは自分たちの良いように解釈し、民たちが無理な要求をすることもあるでしょう」

「……………」

「もし、雜里が思ってるように北郷さんが本当に天の御使いだとしても、それはそんなに簡単な道ではありません。すごく辛く、そして寂しい道になります。今このせかいに一人で落ちてきたばかりの北郷さんが、そのような道を選ぶのでしょうか」

「それは……」

そんなふうには、考えたことがなかったです。

たしかに天の御使いという人が居て、その人が乱世を鎮めるとしたらそれはとても素晴らしいことです。だけど、一刀さんはこの世界に來たばかりです。知らないことも多く、まだまだ不安定で、その様子がどこか危ういです。

そんな一刀さんに、天の御使いという大銘を勝手に背負わせようとするのは、一刀さんにも酷な話です。

「もつとも重要なのは北郷さんがどうおもってるのか、本人の意志を覗かなければならないでしょう。ですが、もし北郷さんがその道を拒むとしても、それもまた仕方ないこと。逆にその道を選ぶとすれば、誰かはその道を――に歩いてくれなければなりません。辛い道、一人だけでは終わりまでたどり着くことができないでしょう」

「……………」

――に歩いてくれる人……

> p f f <

一刀SIDE

「ちゃんと人の話を聞いてください」

「……………聞いている。ここのご飯が美味しくなって話だった」

「違います！というかそんなこと思ってたんですか？」

部屋の中で腕立てをしていたら、孔明が入ってきた。

「特に昨日の夕飯は塩味が足りなさすぎた」

「それ私を作ったんですけど…！」

「塩もつと使え」

「十分使ってます！それ以上使うと病気になります」

「……………その話じゃなかっただろ」

「それはこっちのセリフですー！！」

あまり冗談が通じないな、孔明は。

「それで、俺の噂がなんだって」

「変な方向に飛んでるんですよ。雛里ちゃんと私が北郷さんと一？に出かけた以来から、二股だの三角関係だの、北郷さんが買ってくれたその飾りのこともあって、もう他の娘たちの頭は桃色妄想の香煙です」

「……………所詮は噂だろ。孔明がこうして俺に言い付けに来ないで、平然としていれば問題なんてない」

「……………北郷さんが思っているぐらいに簡単な話じゃないんです」
「……………」

孔明は本気で悩んでいるようだった。

以前にも言っていたように、こういう状況が続くと半閉鎖されているこの私塾で、土元：雛里と孔明は更に孤立されるはめになる。

「話はわかった。これ以上疑われるような場面を作ることを防がなければならぬ。今度からこっちに来るな。雛里にもそう言っておけ」

「……………ありがとうございます」

「用事が済んだのなら帰ってもらおう」
「……………それじゃあ」

孔明はそのまま部屋を出て行った。

「……………ちっ！」

何だ、この気持ち悪いモヤモヤさは。
以前一度思った時にはなんともなかったはずが……………何故また雛里と親しくしてはならないと思うところもイライラしてくる。

「……………鍛錬なんてしてられるか」

寝よう。

何もかもござりたい。

「……………」

> p f <

雛里SIDE

「！朱里ちゃん？」

「雛里ちゃん、ここにはどうしたの？」

一刀さんの部屋に行く途中で、何故かそっち方向から戻ってきている朱里ちゃんとはったり会いました。

「あの、ちょっと一刀さんと話したいことが……」

「…あの、雛里ちゃん」

「……何、どうしたの、朱里ちゃん」

「…北郷さんに言ってきたの。自分、顔合さない方がいいって」

「……え？」

どうしてまたそんな…

その話はもう終わってたんじゃないの？

「朱里ちゃん、どうしてまたそんな…」

「雛里ちゃんは最近なにも感じてないの？」

「え？何を……」

「最近、私たちが見ないところで、皆騒いでるの。私たちと北郷さんのこと……」

…確かに最近、というのはあの時街から戻ってきた以来、他の娘たちが後で話していることが増えたかも。何か私が近くに行くと皆消えちゃうし。

「……ただの噂話の話題が必要なだけでしょ？別に迷惑かけられてるわけでも……」

「……」

「…朱里ちゃん？」

「……うう……」

「…朱里ちゃん？」

「雛里ちゃん……」

「あわっ！」

急に朱里ちゃんに抱きしめられて、私は驚きました。

やっぱり今日の朱里ちゃん、ちょっとおかしいです。

「朱里ちゃん…どうしたの？」

「…お願い、雛里ちゃん。今は何も聞かないで……北郷さんにも暫く会わないで……雛里ちゃんの友たちとしても一生のお願い……」

朱里ちゃん、本当にどうしちゃったの……

> p f <

一刀SIDE

「……………」

俺は得ることを怖がっていた。

手に入れたのは、いつか失わなくてはならない時が来る。

特に、人はそうだった。

人はいつも側にいてくれなかった。

子供を養うべき父さん、母さんも幼い時俺を一人にし世を去り、いつまでも続きそうだった祖父さんとの道場でも日々も味わえなくなつて二年。

失うことが怖かった。いや、むかついた。

だから人なんて得ようとしなかった。友たちなんて必要ないと思っていた。

なのに、俺はどうして彼女にだけは興味を持った。

「何故……………」

こんなのは俺のやり方ではなかったはずだ。
何故雛里には心を委ねようとしておいて、今になってはまた失うこ
とを知っているながらもこうも腹が立つ。

「……氷龍、お前には分かるか」

「ひょうりゅうって誰ですか？」

「！」

「きやはー」

声ができる方を振り向くと、部屋の窓側に薄緑色の髪型に、女の子一
人が立っていた。

薄い緑色の髪に、孔明や雛里みたいな帽子ではなく、何だかちよっ
と似合わない大きくて黒いリボンで髪を結んでいた。

「……お前は…？」

「キャハ、はじめまして。カナは徐庶、字は元直で言いますよ。真
名は奏里ですけど、奏って呼んでくれたらいいですよ」

「徐元直？」

孔明が居る前に劉備を支え、母を攫った曹操に行く前に劉備に伏龍
の存在を教えた男。

まさか元直も女の子で、しかもこの塾の生徒だったのか。

「よいつしよっと」

「門から入ってこい」

とつか何故入ってくる。

「キャハ、あなたが北郷一刀さんですね。カナ、実物を見るのって初めてですよ。男の人」

「……………」

おかしい奴だな。

なんというか…すごく独特な感じが漂っていた。

独特というか……………」

「でも、分かるのですよ。カナは人を見間違ったことなんてないのですよ」

「……………」

「俺カナと同じ匂いがするな(のですよ)」

> p f <

人を拒むわけじゃないのに、人を遠ざける。

一定の距離を置かないと不安になる。

一度警戒を崩してしまうと内外の区切りがなくなる。

そして、失ってしまうことを怖がる。

その故にまた人が自分が決めた距離以内に近づくことを拒む。

「カナはわかるのですよ」

「あの元直が……………」

「カナはカナって呼んで欲しいのですよ」

「初見で許すほど軽いものではないと聞いているが」

「キャハ」

元直は寝台の私に近づいて上半身だけあげている私の目の前まで顔

を近づけた。

「カナは好きな人じゃないと真名なんて許す気ないのですよ……」
刀さんは初めて見た時からカナの気に入ったんですよ」

「……変な奴だな」

「よく言われるのですよ」

「……ああ、俺もだ」

「やっぱりカナと同じ部類の人なのですよ」

「しかも、こうして見ていると、すごく気持ち悪い」

同族嫌悪というのか、これ。

「キャハハー、言うことが直線すぎるのですよ。そんな男はモテないのですよ」

「何故モテる必要がある。逆にお前はそんな性格をして男に嫌われることを恐れるか」

「そんなものなんて気にしないのですよ」

「理由は？」

「カナは普通の人には興味ないのですよ」

「……そうだな」

普通の人間、という意味は良くわからないが、兎に角人を拒む俺たちみたいな人に絡む人達というと、あまり普通の範囲に居る人とは思えない。

例えば及川がそうだった。

友たち一人あらず、そう続くはずだった学校の生活が、あいつがあつたおかげで寂しくなかった。

俺が他の連中に当たるように冷たく当たっても、明日になるとまた及川は俺と何もなかったかのように友たちとして接した。

たしかにあれは普通の人間とは言わない。

「で、ここには何のようだ」

「あ、そうだったのですよ」

奏と言った彼女はパチツと両手を合わせながら言った。

「一刀さんは、最近孔明ちゃんと土元ちゃんが生徒たちにどう言われているのか分かってますか？」

「……………」

俺は答えなかった。

それは、もし彼女が本当に俺と同類の人間だとすれば、それは俺の答えを求めるような問いではないからだった。

「…あの二人が塾で一位、二位を争う娘たちなのは知ってますか？」

「そうだな…」

「そんな着実だった二人が、あなたを連れてきた以来、度々に殿方のあなたと絡まっている姿を見ていて、良しとしない娘たちがいるのですよ」

「…………ただの言葉としての戯れを越えているというのか？」

「それはもう…まだ抑えている方ですけど、昨日孔明ちゃん、裏で話していた娘たちと口喧嘩をしていたのに、そこで相手の娘たちに打たれたのですよ」

「…!!」

何故そこまで…………

「理由は？」

「優等生を装って実は男の人にしっぽを振っている狐女、だそうですよ」

「理屈がおかしいだろ」

「イジメってそういうものですよ。もしくは、あまり長い間こんな山奥に閉じ込められていたせいでちょっと狂ったのかもしいのですよ」

お前にそんなことを言われるあの娘たちも少し可哀想だな。

「あ、失礼なこと思っちゃうですよ」

「失礼ではあるが、嘘ではない。俺は嘘は言わない主義だ」

「……じゃあ、聞きますけど、さっき孔明ちゃんが一刀さんに来た時、気づいてなかったのですか？」

「……………」

いつもと様子が違った。

少なくとも初めての時、単に俺から雛里を守るうとしていた頃とは違っていた。

それは、明らかに自分が巻き込まれていたから？

だからもつと必死にみえたのか？

いや、まだ何かある。

「孔明は恐れていた」

「……………」

「が、あの時雛里を俺から守るために俺と雛里を遠ざけようとしていた頃の孔明を考えると、単に昨日の出来事だけで急に態度を変えたというのは何か？ 足りない」

「キャハ、…やっぱり、一刀さんはカナと同類なのですよ」

奏のその笑い方は、その声がか心搔き回すような気分がして、不意に聞かれると、まるでお化け屋敷に入って誰かが顔や首筋にこんややくを当てた時に背筋がびびっとする時のような気分になりそうなの、

そんな少し不気味で怖いものだった。

「実は、孔明ちゃんが恐れているのはカナなのですよ」

> p f <

「…何？」

どういうことだ？

まさか、孔明を虐めたというのが奏お前か？

「そうじゃないのですよ。カナは孔明ちゃんのこと大好きなのですよ。孔明ちゃんにそんなことをする雌猫どもと一？にしないで欲しいのですよ」

「……なら、何だ？そんなに彼女のことを大事に思っているのなら、何故孔明がお前を怖がると言っ？」

「…一刀さんは思ったことがありますか？」

「？」

「自分の手にあつたと思つたのに離れていく人を見る時、ああ行かないで欲しいと、ずっと側に置きたいと、そう思つたことつてないですか？」

「……あつたな」

散々思つていた。

「つまり、お前にとって孔明がそうだと言つのか？」

「はいなのですよ。でも、孔明ちゃん、土元ちゃんと仲良しになつてからは中々カナに会つてくれないのですよ。だから、孔明ちゃんを虐める雌豚たちを懲らしめてあげたらまたカナの元に戻つて来てくれるかなあと思つて……」

.....

「カナの孔明ちゃんを虐める雌狐どもは『死ねば』いいですよ」

「きゃー！ー！！血！血い！」

「ちょ、ちよつと、あなた頭おかしいんじゃないの？」

「キャハー」

「元直ちゃん、やめて！！私は大丈夫だからそんなことしないでー
！」

「駄目なのですよ。カナは孔明ちゃんを虐める悪い雌犬たちを懲らしめなければならぬのですよ」

「元直ちゃん！」

.....

「……そんなことをして、何の騒ぎも起きなかったのか？」

「場所は人なんて良く通らない所だったのですよ。それに、怪我した娘とか、自分たちがしたことがあるから先生に言いつけることなんてできないのですよ。塾でイジメをした人は直ぐに退学されるのですよ」

「……それを逆に利用したか」

「カナは、孔明ちゃんを守ってあげただけなのですよ。でも、いつまでもあんな雌鳥どもに孔明ちゃんを虐めるいいわけを与えるわけにはいかないのですよ」

「その雌なんとかするのは事々変えないといけないのか？」

「つてか雌鳥つてなんだよ。どんな害があるんだよ。」

「だから、孔明ちゃんを守るためには、一刀さんが早くこの塾を出て行ってもらわなければならぬのですよ」

「……お前が辿り着いた答えはそこなのか」

「はいなのですよ」

「……」

たしかに、もう傷も治った。

ここに残る理由はない。

ただ……

「……………断る」

「キヤハ？」

「俺もまだここでやらなければならぬことがある。それに、俺のせいで起きたことなら、俺にもその始末をする義務があるはずだ」

「だから、一刀さんが居なくなれば、全部丸くおさまるのですよ」

「それはどうだろうか」

状況は単に俺を言い訳にした起こっていることに過ぎない。

ここの生徒たちはずっと前から、二人にとって悪感情を持っていたのだろう。

幼い年でこの私塾で揺るぎのない首位の位置を保っている孔明と雛里。

彼女たちへの嫉妬が俺という事件によって解放される言い訳を得ただのだ。

「一度解放された恨みを抑えることはできない。イジメなんてそういうものだ。一度起きたら終わらないし、止まらない」

「なら、カナが全部殺して終わらせるだけなのですよ」

「お前がそんなことをしたところで孔明が喜ぶとも思っているのか」

「関係ないのですよ。カナはただ、孔明ちゃんがいつもの孔明ちゃんのまま、カナの近くに居てくれればいいのですよ」
「……歪んでやがる」

やはりおかしい、こいつ。

何故平然なおおをしてそんなことが言えて、しかも実行できる。

「そう、そう。いい忘れたのですよ」

「？」

「カナは孔明ちゃんしか守ってあげないのですよ」

「……何？」

「でも、カナが孔明ちゃんを守ってあげていることを知ったら……
妬みめ的是土元ちゃんに全部向かったやつかもしれないのですよ」
「……！！」

雛里……

> p f <

雛里SIDE

「朱里ちゃん…大丈夫なのかな」

すごく不安そうな顔だった。

あんな朱里ちゃん、会った時から今まで一度も見たことない。

私がこの塾に来たのは五年前のことでした。

村が盗賊たちに襲われて、お父さんやお母さんもそこで私を守って亡くなってしまうました。

その後、あつちこつちを官軍に保護された後、水鏡先生にあってここに連れてこられました。

その時、初めて朱里ちゃんに出会ったのです。

朱里ちゃんはとても優しい娘で、まだ両親を失った悲しみの中にいた私を良く慰めてくれました。

今の私が居るのは、全部朱里ちゃんのおかげです。

だから、朱里ちゃんが苦しんでいる時、私も朱里ちゃんの力になりたいです。

「えつと……確かこれと……これと……」

今は倉に入って、朱里ちゃんが落ち着けるような香を作るための材料を探しています。

ギイイー

タン！

「……あわ？」

今のつて、もしかして…

倉の扉がある方に行ってみると、

「！」

扉が閉まっています。

ガタッ

ガタッ！

外から閉ざされています。

タン

タン！

「誰かー！中にまだ人入ってますよ！開けてくださいー！」

クスクス

クスクス

「！」

外で、誰かが笑っているような声がします。

まさか……私が中に居るのを知って態と扉を……

「……………！！」

なんで……どうしてこんなことを……

「開けてー！！お願い、開けてくださいー！！」

クスクス

ククク

楽しんでる……私が困っている姿……怖がっているのを、楽しんでい

る。
酷い……私は何も……

「何をしている！」
「！」

この声は……

「な、何ですか。どうしてあなたがこんなところに……」

「それはどうでもいい話。今重要なのは中から人が扉をたたきながら開けてくれと叫んでいるにも関わらず、君たちが外で笑いながらそれを楽しんでいる状況だ。そう思わないか」

「っ！」

「中に誰を閉じ込めたのか知らないが、大人しく扉を開けて散れ。」

確かこの私塾で他の生徒を虐めることは退学に値していたな」

「ッ……！！あ、あなたとは関係ないでしょ！」

「俺はそうは思わないが……お前はそう思うか？」

「キャハー、とっても関係あっちゃいますよ」

「ひっ！」

この笑い声は……元直ちゃん？

「げ、元直！お前どうしてここに……」

「一刀さんの言う通りなのですよ。カナがここに居る理由なんてどうでもいいのです。今重要なのは、一刀さんはあなたたちが誰か知らない反面、カナは貴様らが誰か全部知っているというのですよ」

「……！あんた……まさか、そんなことをしてただで済むと思ってるわけ？私のお父様が」

「こんなことを知ったら退学されて実家に戻る前にあなたと縁を切るでしょうね。水鏡女学院で破門された者に、残された道なんてな

いのですよ」

「……くっ!!」

「キャハー、でも、今回は孔明ちゃんとは関係ないですし、このまま散れば許してあげるのですよ。ただし、もう一度したら……覚悟した方がいいのですよ」

「そ、その時はあんたもただじゃ済まないわよ!」

「キャハ、馬鹿な雌犬ですね。同じ塾に居ることが恥です……カナがそんなことを気にすると本当に思ってるのですか?」

「……ちっ! 覚えておきなさいよ」

「わすれてください、の間違いだろ」

「なあっっ!」

「……失せる。虫けらども」

> p f <

元直ちゃんの声が聞こえたと思えば、最後には一刀さんがすごく冷たい声でそう言って、その後何人かが早足で走っていく音がしました。

そして、

ガタン

ギイイイイイ

「あ」

「…大丈夫か、雛里」

扉が開いて、一刀さんが立っていました。

「一刀…さん……」

「……済まない。俺のせいでこんな目に……」

「一刀さん……!」

「!」

もう何も考えずに一刀さんを抱きつきました。

「怖かったです! ううう……!」

「……もう大丈夫だ…もう連中もこれに懲りたらこんなことは二度としないだろう」

「うぐう……えぐう……」

たった数分閉じ込められていただけなのに、すごく怖かったです。暗い部屋に閉じ込められて、外では私が苦しむ姿を見て楽しむような笑い声が上がっていて……こんなの…こんなのおかしいです。

「えぐう……ふえええ……」

「……」

一刀さんは、何も言わずに泣いている私を見てくれました。

> a f <

一刀SIDE

何か…しなければいけないとは思った。
でも、手が出せなかった。
自分が抑えられそうになかった。

「…落ち着いたか」

「…くっ…くっ…ううっ…」

「…雛里」

ゆっくりと…少しずつ手を伸ばして彼女の頭の後に手を乗せてみた。
泣いていて、少し興奮状態だった雛里の体温はとても暖かくて、落
ち着く気分になった。

つて、何を馬鹿なことを…

彼女を慰めるはずではなかったのか？

「……いや」

奏の言う通りかもしれない。

俺にできた一番のことは、彼女たちとできるだけ触れ合わないこと。
だけど、状況はもうそれで済むような段階を超えていた。

「…済まない。本当に…何もかも」

お前をこんな目に合わせたのも。お前に出会ったことも。お前に会
えないことに奇妙な苛立ちを覚えていたことも……。

お前は……！

「……！！」

「…一刀さん？」

「こんなの……俺らしくもない」
「え？」

雛里から離れる。

「……一刀さん？」

雛里がまだ潤いが残っている目でこっちを見ていた。

「……お前を見ていると調子が狂う」

「……」

だけど……

「もう失いたくない」

「一刀さん、どうしたんですか？」

「得るものがなければ失うものもない。だから俺は……人との触れ合いを避けていた……当然だろ。人間としての当然な自己防御本能だ」

「……」

「……お前と一？にいると自分がおかしい」

調子が狂う。

自分が自分じゃなくなる。

「……これでもうイジメとかはされないだろう……これで終わりだ」

こっちが出る。

この塾から離れる。

雛里、お前から逃げる。

> P P <

奏里SIDE

がらっ

「！雛里ちゃん？」

「……………」

「！」

カナが入ってくるのを見て、土元ちゃんが来るのだと思っていた朱里ちゃんは寢床から起きて迎えようとしたけど、カナだということに気づいて、また寢床に腰を下ろしたよ。

「元直……………ちゃん」

「キヤハー、土元ちゃんなら今一刀さんと一？にいるよ」

「……………！どうして……………」

「倉に閉じ込められていたところを、一刀さんが助けてくれたの。

カツコイイよね。孔明ちゃんと土元ちゃんが惚れるのも無理ないよ」

「！私はそんなんじゃない……………」

「うん、知ってる。孔明ちゃんがその人のこと好きじゃないって」

知ってるよ。解ってるよ。

孔明ちゃんがそんな人が好きはずがない。

だって、

孔明ちゃんはカナのことが好きなんだもの。

士元ちゃんとずっと一？にいるのも士元ちゃんが自分がなければ一人になってしまるのが可哀想だからよ。

「でも、もう大丈夫だよ」

「…どういこと？」

「もう士元ちゃんには一刀さんがいるよ。だから、孔明ちゃんはもう士元ちゃんを守ってあげる必要なんてないよ」

「っ！！」

寝床に座っている孔明ちゃんを押し倒して上から孔明ちゃんを見る。

「だからね、士元ちゃんがもう孔明ちゃんが守ってあげなくても良いようになるよ…」

またカナと遊んでくれるよね。

友たちになってくれるよね。

「孔明ちゃんはまたカナのものだよ」

「……………元直ちゃん」

「孔明ちゃん、好き」

好き、

カナは孔明ちゃんのことを大好きなの。

だから、カナのこと見て……

第一章 七話 元直が現れて、一刀は自分から逃げようとする（後書き）

あとがき

二つ説明することがありますね。一つはこの外史の一刀のことと、そしてオリキャラ元直こと奏里（通称）のカナのことです。

一刀が雛里を今更避ける理由ですが、

一刀は既に両親と祖父を失っています。

自分が心を委ねていた数少ない人たちの死の重なりは、一刀に新しい縁を作ることの恐ろしさをその魂にまで刻みつけました。

学校時代にも及川以外に友たちがいなかったのもそのせいですし、二年前の祖父の死はより決定的に一刀が雛里を避けようとする理由になります。大事だからこそ離れようとする。という人が自分にとって大事になる状況をつくらないようとしているのですね。自分が傷つかないために。

カナというキャラを考えたのは無真（旧）（現在削除されています）の頃からでしたね。

ちよつと狂ってるキャラを作るために頑張った結果がこれです。

元、元直は黙々シリーズで言うところの紗江さん並の頭の切れ方をしているキャラに書きたかったのですが、無真では単なるお母さんの死を見た衝撃で狂ってしまった子になっています。

……まあ、その設定はここでもあるわけですが……

カナというキャラの設定に付いて言いますと、

カナはこの塾に来る前にお母さんと一？に住んでいました。

お母さんはある貴族の男との間でカナを産みましたが、カナが生まれた直後その貴族の男から捨てられある小さな村にてカナと一？に素朴な余生をおくっていました。

この頃のカナはまだ狂ってもいないで、とても母思いのいい娘でした。

カナは知りませんが、偶然その街を通っていた水鏡先生はカナの才能を見て、母に彼女を自分の元で勉強させるように勧めます。が、過去の傷を持ちながらも今までカナのお母さんが生きていたのは誰

でもなくカナの存在があつたため。お母さんはその提案を断ります。だがその後、元のカナの父がカナを奪うために自分たち母女を探しているということを知った母は、自分の存在がカナの未来を邪魔していると感じ、カナが市場に出ている間家の中で頸を絞めて自殺します。

ですが、母の思いの他、母の自殺した姿を見たカナはその状況を飲み込めず、結局狂ってしまいます。

後ほどまたその村を通ることになった水鏡先生は家の中一人で餓死寸前まで行つて母の後を追おうとするカナを連れ、塾の朱里ちゃんと一？に居させることで彼女を癒しました。（この時期まだ雛里ちゃんは居ませんが、結果的には母に対しての盲目的なきもちが朱里ちゃんに向かい、朱里ちゃんには少し苦しみな状態となつています。

というのは大体の裏話です。

カナの母が死んだ理由は無真では話していませんが、大体上のような設定として自分の頭に残してあります。カナというオリキヤは紗江ほど結構曹家に恨みがあります。あ、あの貴族の男というのは宦官であつた華琳さまのお祖父さんの養子の一人です。もちろん華琳さまと直接問題があるわけではありませんが、……おっとこれ以

上はいけませんね。

カナの話であとがきが大体うまってしまいましたね……余談ですが、カナという真名はおとぼくの周防院奏から来てます。口調もそつちからとつてます。キャハハーというのはとつたわけじゃありません。狂人っぽい笑い方を真似したつもりです。どう受け入れられるかはわかりませんが……

あ、次の話は本編とは関係なく、昔無真に書いていたカナが見たお母さんの自殺光景を見せようと思います。

光景と言ってもまあ一人ことですけどね。

自分はなんでこんな暗い話は良く思いつくのか自分で自分が憎らしいです、こつこつ時は。

裏設定1：奏里こと徐元直の過去のお話（スキップ可能）

蛇の足ー1（無真 29話にて）

元直の過去

カナ「お母様！ただいま戻りました」

カナ「お母様？どこにいるんだろう。今日はせっかく市場でいい桃を安く買ったから、お母様と一緒に食べようと露天商も早く閉まって帰ってきたのに・・・」

タッ

タッ

がらり

カナ「お母様・・・？おかあ・・・さ、ま？」

カナ「・・・？」

カナ「お、お母様、何でそんなに高いところにいるんですか？あ、あんなところに椅子なんかおとしちゃって。その首に付けた縄は何です？そんなところにいたら危ないですよ。早く降りてきてください」

ギィ

ギィ

カナ「おかあ・・・さま？」

ギイ

ギイ

元直の過去 その2（無真 30話にて）

やめて

「かわいそつに」
「・・・」

やめて

「母親が自殺したそうよ？」

言わないで

「あの母も無責任だわ。こんな幼い子を残して自殺なんかして……」

246

聞きたくない

「あのね、もしあなただけ良ければ内の娘にならないかしら？」

そんな同情は要らない。

「そんなところに女の子一人で住むと危ないよ?」

ほっという。

「死体と一緒に住むとか気持ち悪い」

あなたと関係ないじゃないの。

「その人を渡さない」

私の邪魔しないで。

「こら、何をしているんだ! 退け!」

お母様をどこに連れて行くの?

元直の過去―3 (31話にて)

「. . .」

ギイイイ

お腹すいた。

もう食べるもん、残ってないね。

「・・・」

お母様、私、もうダメみたい。

ゴメンね、私、もうソコに行っていないよね？

・・・

・・・

・

?? 「先生、こっちです!」

?? 「あら、もう大部弱っているわね。このままだと本当に危ないわ。朱里。これを上げるから何か患者が食べる物を買ってきて。私は湯薬を作るから」

朱 「わかりました!」

「・・・ダレ?」

水境先生 「もう大丈夫だよ?あなたお名前は?」

「名前・・・」

・・・カナ」

裏設定1：奏里こと徐元直の過去のお話（スキップ可能）（後書き）

自分に任せればこの世界で一番不幸で悲しみに滲みつつも世界を守ろうとする呪われた人間作れます。正気じゃなくなりますが（自分が

第一章 八話 街、襲われる

一刀SIDE

「今夜も来た」

グルルー『…貴様には礼を言わなければならん』

「……………」

『貴様のおかげで、飢えていた俺の群れがここ10日しのげてきた。これからは得た体力を持って他の森へ動くつもりだ』

「…お前らもここを出るつもりか？」

『この森はもう俺たちを養う余力がない……』「も」だと？』

「…明日俺はあの塾を出る」

『行く宛もないはずだが？』

「そんなものはない。だが……」

？

「これ以上あそこに残ってはいけない」

『……………何があつたか』

「……それを教える義務はない。こつちの問題だ」

『そうか……だが、一人で行く道は辛いぞ。旅には連れがいなくて
は、いつか行く途中で倒れてしまふ。そしたら、そのまま一人で寂
しく逝くまでよ』

「……余計なお世話だ」

> p f <

「この塾を出ようと思います」

「……どうしてそんなに急に……」

水鏡先生のところに、ここから出る決心を伝えた。

「まだ自分がどうするべきかも決めてないはずですよ。一体どうした
のですか？」

「……自分がここに来て雛里や孔明たちに迷惑になっています。そ
して何よりも自分のことです」

「……と言いますと……」

「……おかしいんです」

雛里を見ていると、どうしても自分が変になる。

いつも人と距離を取っていたはずなのに、雛里にだけは距離がどん
どん縮むばかりだ。それを追い払うこともない。むしろ自分から彼女
に歩いて行っている。自分からまた絶望

の種に向かって進もうとしている。

もう嫌だった。

誰かを失うことも、誰かに近づくことも……
なのに雛里は……

「昨日雛里が私のところに来ていました。街にあった予言が書かれた文について相談をしに……」

「……それは」

「私はあなたは朱里の思いが間違っているとは思いません。ですが、雛里にこうは言ってあげました。もしあなたがその道を選ぶとすれば、それはとても険しい道のりになる」

と。誰かが彼を支えてあげなければ彼は途中で倒れてしまう……」

「……」

「乱世が始まって、私がまだ心の準備出来てないうちに多くの教え娘たちがあつちこつちに自分の夢を広げにここを去ってしまいました。だから私はつも私の教え娘たちがこ

こから出て来ても良いように、準備をしていたのです。もし雛里があなたに付いて行くとしても、私はあの娘を止めないつもりです」

「……会ったたった半月の人に、自分の一番の弟子を託すというのですか」

「……あなたと雛里が会ったこと、きつとただの偶然ではないはずです。きつとそこで出会う運命だったのですわ」

「運命……」

もしそれが運命だとすれば……

それもまた私にとって未来の絶望になるしかない。

「……自分が一人がいいです。雛里を巻き込むつもりはありません」

「……」

「世話になりました」

俺は水鏡先生に最後の挨拶をして、部屋を出て行った。

> p f <

「鞆に私物はいれといて……」

がちや！

「…うん？」

鞆の中にランタンとキラキラして目立ちそうな制服上着は締めておこうと鞆を開けたら、

「何故木刀が……？」

鍛錬に使う木刀が入っていた。

鍛錬に使うというのは普通の木刀とは少し違って、前の方が重くなっている、素振りの姿勢を正す時や、腕の持久力をあげるために使う奴だ。

前服と時計を取ったから、何も入ってないはずだったのに、何故こんなものがまた……

「一刀さん…入りますね」

がらっ

「…一刀さん？」

「…！雛里、なんの用だ」

そんな風にしていたら雛里が部屋に入ってきた。

「あの、……ごめんなしゃい！」

「……？」

突然彼女が謝って（しかも嘔んで）俺はちょっと驚いた。

「…何故謝る」

「あの、私、いろいろと二刀さんにご迷惑かけていますって…だから、一刀さんここから出ようとしてるんですね」

「…お前には関係ない」

「じゃあ、どうして急に…」

「もうここに居る理由がないからだ」

鞆から木剣を取り出して、上着を入れてから鞆を締め持ち上げながら俺は言った。

「これ以上ここに居たところで、雛里たちに迷惑でしかない」

「わ、私たちは別に………」

雛里は言葉を終わらせないで目を逸らした。

俺のことが迷惑でないとは言いきれないのだ。

それでいい。それなら俺も調子を崩さずにここを出ることができる。

「あの時お前に助かれたのは幸運だった」

「あ………」

「ありがとう、雛里。孔明と一？に、後で立派な策士になれ」

今まで人を仲良くしようと努力したことなんてない。ただ、一人になったときもまだ短い。

いつも誰かが側にいた。

両親が亡くなってからは祖父さんが、祖父さんが亡くなってからは及川が居た。

そして、及川も失った短い間、雛里がその代わりであったのかも知れない。

…だけど、きつと一人でも行けるはずだ。

俺は……

俺はあこれ以上失いたくない。

だからこれ以上俺に関わるな。

「それじゃ……」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

待つな。振り向くな。

今振り向いてもしあいつがお前に付いてくると言ったらお前に断ることができるのか？

「……せめて街のところまでは一？に行かせてください」

「……」

それぐらいなら……

「好きにしる」

俺はそう冷たく答えて、片手には木刀を持ち、もう片手には鞆を転

がしながら振り向かず先に進んだ。

> p f <

雛里SIDE

一刀さんが塾から出ると突然言い出した時、私は自分が何かをしたせいだと思って謝りました。

一刀さんはそういうのではないと言いました。だけど、どうして急にこんなことをするのかは教えてくれませんでした。

きつと、私や朱里ちゃんが自分のせいではひどい目に会ったことを見て、早くここから出るべきだと思ったのです。

もうちょっとじっくり話とかがしたかったです。

天の御使いとしてのことももう少しじっくり話し合いたかったです。一刀さんがもしその気になってくれたら、私は一刀さんと一？に行くのも悪くないと思っていました。

仕える人を探すなら、乱世を鎮めるといふ、そういう優しい考えを持っている人がいいなと思っていました。自分の野望のためではなく、人たちを幸せにするために戦う人な

ら、きつと優しい人で、こんな私でも頑張ったら人たちの力になれると、

そんな思いで、私はあの夜星に願ってたのです。

だけど、こんなことになってしまいました。

今の一刀さんは、もし私が付いて行くと行っても許してくれそうにありません。

何故か、あの時以来の一刀さんは、以前とは違います。

初めて会ったときでもちよっとおかしくて、言うことが整然としてるように見えてすごい変なことも平然とする人でした。

でも、今は違います。むしろこっちの話に合わせてくれようとしてくれないのです。

ポイっと一言出しては会話が終わります。まるで態と私を遠ざけようとしているみたいです。

とにかく、今は少しでも一刀さんの気を変えるべく、なるべく近くに居たいです。

幸い、街まで一？に来ることは駄目とは言いませんでした。

なんとか街まで行くところで、一刀さんの気を探ってみたいと思います。

「一刀さん」

「……………」

返事がないです。

「…一刀さんは、これからどうするつもりですか」

「……………さあ」

「どこか決まったこととかも…ないんですか」

「…お前とは関係ない」

「っ」

な、なんですか、それ！

いつもの一刀さんと全然違います。

「酷いです！そんなふうに言うことはないじゃないですか」

「……………」

無視してます。

完全にこっちのことを無視しようとしています。

何なのですか、一体。わけわかりません。どうして急に私にこんなふうにするのかも分かりませんし。

「一刀さん！」

ちょっと大きく声を出して一刀さん呼びましたが、

タッ！

「あわっ！」

前の一刀さんの背中にぶつかってそのまま倒れてしまいました。

一刀さんが足を止めていました。

「…一刀さん？」

「……街が…燃えてる」

「…へ？」

立って街がある方を見ると、本当にすごい煙が街の方から上がって
いました。

「あわわー！」

「どういうことだ。何故……」

「まさか、街が賊に襲われたんじゃ……」

「何！」

でも、そんなはずは…

荊州でもこのあたりは比較的賊が良く迫ってこない街でした。

ここは水鏡先生もあるわけで、賊たちも先生の人望を知っている人ならここには攻めてこないはずなのに…

まさかこんな……

「くっ！」

「あ、一刀さん！」

「お前は帰ってろ！絶対付いてくるな！」

一刀さんはそう叫んで鞆をその場にそのまま置いておいてすごい速度で山を降りていきました。

「一刀さん！」

一刀さんの後を追うつもりで下を見たのですが、一刀さんの姿はもういません。

一人に行かせて大丈夫なのでしょうか。

大丈夫なわけ 아닙니다。でも、私が行ったところで何の役にも立ちませんし、むしろ邪魔です。

というか、もしかして本当に賊だとしたら……怖いです。

「……………うっ」

ボタン

「あ」

後すぎりしていたら、一刀さんが置いていった鞆が倒れて蓋が開いてしまいました。

「……………あれ？」

何か中から何か出てます。

「これって……………なんででしょうか」

四角い形の硬みのあるものが落ちてました。
端のところには何か鉄が挟まれています。

「……………あ、これって」

そしてその横に、以前のランタンのように押すような装置たしかずいっちがあります。

がちゃっ

ジジジーー！！！！

「あわわ！」

何か、ジジーってしました！

驚いて落としたら、また静かになりました。

「な、何なの？」

またそれを拾ってみると、

「あ、何か書いている」

なんだか読めない文字が混ざってました。多分、一刀さんの国の文字だと思えますけど……
それでも、読める文字もいくつかありました。

「人…向…作動…感電…痴漢退治…子供」

良くわかりませんが……これを使えば……

ジジー

「……………」

なんだか、自分がすごく危険な考えをしているような気がしてなりません。

だけど、今の一刀さんを一人で行かせては行けない気がします。良くわかりませんが、これがあればなんとかなる……と思います。

> p f <

一刀SIDE

「コレは……！」

酷い様だった。

街のあっちこっちで火があがっていて、またあっちこっちから人の悲鳴が上がっている。

「助けてー！」

「おかあさーん！」

「や、やめてくれー！」

「へへーっ。死にやがれー！」

「っー！」

ガチツ！

「うおっ！なんだ、貴様！」

「くたばつてろー！」

ぐすっ！

「うぐうっー！」

木刀で家族一同らしき人たちを殺そうとする賊のみぞおちを突いたら、相手はそのまま気絶。

「大丈夫か！」

「あ、ありがとう……」

「どうなってんだ。ここは荊州でも安全なところではなかったのか！」

「分からん！いきなりこいつらが迫ってきて……」

「…何故こうもなるまで対抗できなかったんだ」

「……」

男の人は何も言わなかった。

平和ボケしていたってわけだ。

賊たちが来るのがわからず、そのまま奇襲された。

そう思わなければこんな朝はやくにこんな状況までなるなんて、考えられない。

まるで賊相手に戦ったとかそういう跡がない。

「キヤーー!!!」

「ちっ」

他のところからも……

「街の男たちを集めて対抗しろ。座って死ぬのと賊から家族を守るのでどれが良い!」

「……わ、わかった!」

……ちっ、腰抜けた連中が……

もうこのままじゃキリがない。

早くこいつらを統率している頭を探さなければ街が完全崩壊する。

「……き、……貴様……よくも……」

「なにっ!」

気絶させたと思った賊の奴が立ち上がった。

どういうことだ。急所を狙ったはずだ。こんな簡単に立てるはずが

……

「先の剣の鈍い感覚……木刀なせいだと思っていたらまさか鎧を付けていたのか?」

「はあ、俺たちをただの賊と思ったら困るぜ。しねー!」

「ちっ!」

来るぞ!」

シジジーー!!!

「うわわわわわわわわあ・あ・あ・あ・あ・あ・あ
「!?!」

仕掛けてくると思った賊は、その場で呻き声を出しながらそのまま倒れてしまった。

「一刀さん!」
「…雛里?」

そして、その後には雛里の姿があった。
彼女は手にスタンガンを持っていた。一体どこからそれか
というか

「何故ここに居る! 帰ろつて言っただけだ!」
「一刀さん一人で行かせるわけにはいかなかったのです」
「馬鹿を言え! こんな状況でお前まで守っていられる暇はないんだ
! 早く戻って……」
「おい! あそこにうちの仲間が倒れてるぜ!」

!
周りをみると、他の賊たちが迫ってきていた。

> p f f <

前に見えるのだけ五人。後からもまた現れている。

「小娘……いい度胸してるな!」
「ひっ!」

賊の一人に睨まれた雛里は俺の後に隠れた。

「貴様：俺らの仲間に手をだしといて、覚悟はできてるのだからな」

「雑魚に用はない。頭がある場所を教えろ」

「はあ？知るかよ、んなもん」

「俺たちやここで好き勝手やってんだ。賊になってまで上の言つ」と聞いていてたまるかよ」

「何！」

まさか、上の命なしで自分たちで街を襲いかかったというのか？
どんだけ腐れ外道だ！

「それより、気に入らねーな。俺たちに逆らうなんて」

「そんなおもちゃみたいなもので俺たちに勝てると思つなよ」

「ふん、そういう貴様らはどうだ。そのような剣の持ち方、基本がなつてない。子供に厨房の包丁を握らせてもそれよりはうまく使い切るだろ」

「んだとー！もう許さん！ええい、行くぞお前ら！」

「「「おおお！」」」

挑発されやすい連中だ。

頭の命を無視して来ただけはある。

「雛里、下がってる」

「で、でも」

「いいから下がってる！」

「は、ひゃいつ！」

思わず大声を出したら雛里はその後にいた家族らのところに行った。

「すーっ」

集中しろ……

道場にて人たちと対練する時と同じだ。

一つの道場の師範たるもの無様な姿は許されない。いつも剣を持っているならその場において誰よりも強くなければならない。

「来い、手合わせの時間だ」

「しゃー！ー！」

「腰かガラ空きだ！」

「へぶしっ！！」

「くらええー！ー！！」

「剣を振るう時間が長すぎる。体がから空きだ！」

「うぐうっ！！」

一人、一人。

集中して、常に全力で相手する。

「足が動いてない！」

「頭まっ二つにされたくなけりゃ敵の動きを読め！」

「貴様は素振りからやり直してこい！」

「貴様ー俺たちをなめんじゃねー！」

「舐めてるんじゃない」

空中に上がるな、死亡フラグだ。

「貴様らが基本がなっていないんだ…ふん！」

「へぐうっ！」

「……貴様らが俺の弟子だったら全員道場の掃除からやり直した。身の程をしれ」

これで大体片付いたか。

手加減はしてない。ちゃんと気絶するほどの急所を狙っている。

木刀が少し重くて厄介だったが、こうなると逆にその重みがあったから良く使えた気もする。

「う、うごくんじゃねー！」

「！」

後を向くとどこから湧いてきたのか賊の一人が雛里ちゃんの首筋に剣を立てていた。

「一刀さん！」

「雛里！」

「くへへ、この娘を死なせたくなければ大人しくしてもらおうか」

「くふっっ！！やってくれたな、下衆が……」

「知るか！勝てばいいんだよ、勝てば」

「……………殺せ」

「んなっ！」

「一刀さん！？」

> 0 f f <

一刀さんを囲んだ数十人の武装した賊たちを、一刀さんは木刀だけで一人一人確実に仕留めていきました。まったく緊張した色もなく、焦ることもなく、ただ着実に、1：1の状態で戦い続けてます。

「すごい」

強いです。一刀さん、思っていたよりもずっとすごい人です。まるでこんな戦いを常にやっていたかのように、慌てることなく戦っています。

私なんか、最初にあのジジジーとする機械で一人を気絶させただけで、もう足が震えて立つても居られないのに……

「ねえ、あなた」

「はい？」

横にいた、同じく賊から身を隠していたおばさんと娘さんがこっちに声をかけました。

「あの人、あなたの知り合いなの？」

「は、はい」

「一体誰なの？あんな木の剣で賊何十人と戦うなんて……」

「あ……」

どうでしょう。

私も良くわかりません。

一刀さんのこと、見た時間はあまり長くなって、

ちよっと変な人だとは思ってましたけど、一刀さんがどんな人だと

か、あまり知りません。
あ、でも。

「天の御使い……」

「……え？」

「ほら、以前にあつたじゃないですか。流れ星を乗って来る、乱世を鎮める天の御使いって」

「まさか……あの人が……」

「はい、北郷一刀さんです。半月ぐらい前に落ちてきた流れ星と一
?に来た方です」

「あの方が……天の御使い……」

そうです。

一刀さんは天の御使いさんなんです。
乱世を鎮めてくれる、天の御使い。

「や、やってくれたな……」

「え、ひゃっ！」

あわわー！

「う、うごくんじゃねー！」

な、何！？

いきなり後から……！

シャキッ

っ！後から賊の人が現れて、私の頸に剣を当てています。

「雛里！」

「か、一刀さん！」

ひ、ひいいー！

「くへへ、この娘を死なせたくなければ大人しくしてもらおうか」

「くふつつー！やってくれたな、下衆が……」

「知るか！勝てばいいんだよ、勝てば」

ああ、私、やっぱり付いてくるんじゃないです。

あんなモノもったところで一刀さんの役に立つわけがないのに、むしろこんな風に人質にされて、一刀さんに迷惑かけられちゃいました。一刀さん……

「……………殺せ」

……………へ？

「一刀さん！？」

一刀さん、今なんて……！

「き、貴様正気か！ほんとに殺すぞ！」

「だから殺せとっている。そして次は貴様の番だ」

「何！？」

「人質とは生きていてこと意味がある。人質を殺すという脅迫に一体何の意味があるというのだ？」

「ぐぬぬ……」

た、たしかに一刀さんの言う通りかもしれませんが、どうしてそ

んな平然とした顔でそんなこと言えるんですか？
下手して殺されるの私なんですけど！

「あ、あわわ！あわわー！」

「き、貴様……」

「さあ、どうする。大人しく放してくれたら気絶するだけで済む。
ただし……俺の条件を飲まず雛里に傷を付けた場合は……」

「っ」

「……俺を相当楽しませてあげたいのだと思って、誠心誠意を持って捌いてやるっ」

「お、鬼か、貴様……！」

「人間だ。そして貴様らもな」

違います！この人天の御使い違います！むしろ鬼です！悪魔です！
今のニヤけた顔なんてもう悪魔そのものです！

「あわわー！」

「て、てめえ、あばれるんじゃないね！」

「敵から目を離すないつも教えてるだろうが！」

ガーン！

「ぐおおっ！」

暴れる私に目を奪われている間、一刀さんの木刀が頭をまっ二つにする勢いで降りてきて、賊の人はそのまま前へ倒れてしまいました。
本当に死ぬかと……

「雛里！？」

「一刀さん！」

先のはいくらなんでもひどすぎ……

「大丈夫か！？怪我とかないのか？」

「…へっ？だ、大丈夫で」

「って、これって血が流れて……！ではないな。ちよつと掴まれていて充血しただけか。はあ……大丈夫みたいだな…よかった……」

一刀さんは私に迫ってきては、私に何の傷もないことを見て、そのまま腰が抜けたようにその場に膝をつきました。

「はあ……はあ……お前に傷一つでもできたら本当にどうしようか
と思つて……」

「あ、あの、私は大丈夫ですからそんなに驚かなくても……」

「なんでここまで来たんだ！」

と、安心した側からまた咄嗟に私を責め始めました。

「わ、私は一刀さんのことが心配で……」

「だからって賊が荒らしているとしていながら街に突っ込むか。

しかもなんだこのスタンガンはどこで持ってきたんだ！子供の遊び道具じゃないんだぞ！」

たしかに、勝手にここまで来て一刀さんに迷惑かけてしまったのは私が悪かったのですが、そんな風に言われると流石にむっときます。

「そ、それを言うと、一刀さんだつて勝手に街に突っ込んできたんじゃないですか。なんですか、賊相手に木刀振り回すなんてふざけるにも程があります」

「俺はそれほどの実力はある。お前はどっちかというど頭脳派だろ

うか。もう少し頭使った行動はできなかったのか」

「なんなのですか。朝から一刀さんちよっとおかしいですよ」

「お、俺が何が……！」

「心配してくれる人に無視したり、酷いこと言ったり、拳句には途中で勝手に帰らせようとして……人をどれだけ子供扱いすればいいのですか」

「この状況を見てもお前はそれが言えるか。っーが無視してねー」

「無視しました！街が襲われてたって分かる前に……！」

「アレは……っっ！」

一刀さんは言葉が詰まったのか視線を逸らしました。

「……お前は関係ない」

「絶対私と関係ある話じゃないですか。その前からも私のこと避けてたじゃないですか」

「………」

また無視してます。

私みたいな子供っぽい女の子にはちゃんと話もしてくれないっていうのですか？

「一刀さん！」

「シーツ！」

「………何ですか、話の途中……！」

「シーツ！……聞こえる？」

「聞こえるって、何が……」

「ダガダガダガ………」と

「……へ？」

……私には何も聞こえません。

でも…

「それって馬が走る音…では？」

「しかも数が半端じゃない。……まさか…」

一刀さんは突然走っていきました。

「！一刀さん！」

「今度こそ付いてくるな！」

また一刀さんは付いてくるなどだけ残していつてしまいました。

「……………」

「あの、大丈夫ですか？」

あの時までまだ残っていたおばさんが聞いてくれました。

「…大丈夫です。おばさんは早く娘さんを連れて安全なところに行つてください」

「わ、わかりました。あなたは…」

「私は……………」

あの人を追います。

> p f <

一刀SIDE

「おお、あなたは先の…！」
「！先のおっさん！」

街の外に向かつてる途中で先のおじさんに出会った。

「避難していたところから男たちが武器を持って賊たちに対応している。数もそれほどじゃなくてももうほぼ片付けた」

「良くやりました……殺したんですか？」

「は？……いや、殺した奴もあるし……気絶させてそのまま捕縛した連中も……」

「…そうですか」

死んだ連中もあるか。

「先のところに何十人倒れてるはずですよ。行って武装解除させて捕縛しといてください。殺しちゃいけません」

「わかった。あなたは……」

「ちよつと行くところがあります。後は任せました！」

後片付けをおじさんに任せて俺は走った。

嫌な予感がする。

村の連中は賊が来るのを予測も出来ずにやられていた。

官軍が今更来たかと思うのは夢が大きすぎる。

となると……

「！」

砂塵が見える。

良く見えないけど……でも、この時代の官軍であれば何かしらの自分たちを見せる旗でもあるはずだ。
それが……

「あれは……」

みえた旗の文字は……

『黄』

「……ああ、まずい……」

敵の増援だ。

第一章 九話 弱き人〓悪人（前書き）

人生は時折人たちにとって耐えられないほど厳しい。

だけど現実に向かって背を向けた時、人は希望にも背を向くことになる。

第一章 九話 弱き人Ⅱ悪人

一刀SIDE

『黄』

「黄巾党……」

何故気付かなかった…

この時代、そして賊たちの肩の布や頭巾の色。黄色だった。こいつらは黄巾党だ。

荊州は比較的早めに乱が収まったはずだが…その前が後か…詳しい時間帯は覚えてないからどうとも言えないが……

「とにかく街に戻って体制を建てなおさなければ……」

砂塵のせいで数が判断できない。

いや、しかし騎馬隊だと？単なる賊の略奪行為を越えてるじゃないか？

間に合わない……

あの街に潜り込んだ賊なんざ百ぐらいでしかないのに、あれは少なくともその何倍もしている。

「とにかく急がなければ……」

「一刀さん!!」

「!!」

後を向くと、雛里ちゃんが俺が黄巾党を眺めている丘に上がってきていた。

「来るなど言っただろ！」

俺は急いで丘を走り降りてきて雛里をお姫様だっこで出来上げた。

「あわわー！」

「賊の騎馬隊が来ている。街に着くのも時間の問題だ」

「あわわー！ど、どうすれば……！」

「わからない。とりあえず、街人たちに知らさなければならぬ」

「は、はい、あのそれは分かったから下ろしてください」

「急いでるって聞いてなかったのか？そのまま走りぬく」

「あ、あわわー！」

雛里が慌ててるが、付き合ってる暇がなかった。

あの時は頭が真っ白になっていて、街に早く戻ることしか考えてなかったのだけど、後で考えると自分がどれだけ恥ずかしいことをしたのか気づいて何度かそこにあつた壁に頭をぶつけていた。

> p f <

「ぞ、賊がもつと来ているだ！？」

「……今から対応する準備をしなければこいつらぐらいでは済まないだろ」

「くううっ、一体どうすればいいんだ！」

賊が更に来ているという話を聞いた街の人の顔には絶望の色がみえていた。
やっとなんとかあったかと思えば、これより更に強い連中が来るという。

「もうお終いだ……」

「全部ここで死ぬんだよ」

「いやだ、俺は、俺はまだ死にたくない！」

「こ、こんなところに居られるか、俺は逃げるぞ」

「どこに逃げるってんだよ！ここが俺たちの生きる場所だ。ここを離れてどこに行くてんだ」

「だからって座って殺されてたまるかよ」

「ざけんなよ、おい！俺たちは街の平民で、相手は何の戸惑いもなく一を殺すことが日常茶番事な賊だ！そんな連中が、しかもこんなさつきよりも何倍の数で来てるんだぞ！俺たちで勝てるわけねーだろ」

「ううっ……」

負のサイクルはそうやって進んで、戦う前に街の人たちは絶望の中でもう死んでいる。

恐怖は人を愚かにする。一度恐怖に陥った人より馬鹿ないきものはない。

「一刀さん」

「うん？」

彼らの言う言葉を聞きながら黙っていると、雑里が俺にくっついてきた。

「この人たちに一刀さんのことを言ってもいいですか？」

「……………」

雛里の言ってることはわかる。

たしかに、彼らに俺が天の御使いだと言えば、…たしかにこの絶望からは上がってこれるだろう。

だけど、そう簡単じゃない。

「駄目だ」

「だけど…」

「この人たちは単に絶望したわけではない。死ぬことが怖いんだ。にもかかわらずここに立っている。強ければ逃げればいい。それとも命賭けて戦えばいい。そのどっちの出来ないのは単に賊たちが来たら頸洗って彼らの剣に頸を捧げることではない。そんな連中に俺が天の御使いだから俺に付いて来いとかが言ってみる。得るのは希望ではない。単に自分の恐怖を隠すための隠し場を得るだけだ」

自分たちの恐怖に立ち向かうわけではない。俺に押し付けるだけだ。

「だからって他に方法があるわけでもないじゃないですか」

「……………」

「…み、みなさん、心配することないです!」

俺が何も言わないから、雛里は皆に向かって叫んだ。

「なんだ?」

「こ、この人が、一刀さんは実は天の御使いなんです。みなさん、この前街に出ていた予言はご存知ですよね」

雛里を止めるつもりはなかった。

雛里としてはこれが唯一の方法だった。

だけど、

「天の御使いつて…あの乱世を鎮めるっていう?」

「俺みたぜ? さっきあの人、木刀だけで何十人も賊を倒したんだよ」

「マジか!」

「よかった。やっぱり天は我々を見捨ててなかったんだ」

「お願いします。御使いさま、私たちをあの賊どもから救ってください」

人たちは絶望から戻ってきた。だけど、まだ怯えている。

それがどれだけふざけた話なのかわかるか、雛里?

恐怖は消えない。なのに俺という未知の存在に向けて希望を持って
いるんだ。

そんな連中がすることは一つだけだ。

その未知の存在へ自分の恐怖を全て押し付けること。

そのことで自分たちはまた幸せになれるだろうと勝手に思いながら。

「御使いさまの力なら、あんな下衆な盗賊など、一気に片付けるだ
ろ」

「これで俺たちの街は助かった」

「避難所から女と子供たちを連れてこい。もう大丈夫だってよ」

直ぐにこうだ。

人間ってなんて自分勝手ないきものだ。

「あまえるんじゃねえ!!」

「「「「!!!」」」」

> p f <

「か、一刀さん」

あまりにも大きく叫んでしまつて、雞里は帽子をぐつとかぶつた姿で、後を向いて上目遣いで俺を見た。

「お前たちの街だ。お前たちの家族だ。お前らには自分たちを自分で守るといふ意志はないのか！」

「だ、だけど、俺たちは賊と戦うなんて……」

「じゃあ、あれは何だ！」

俺は街のあつちこつちに気絶させて、木柱に縛られてある、先にここに来ていた賊たちの群れを指した。

その人たちをそうやって縛つておいたのは誰でもない街の人たちだ。

「でも、今来ている奴らはこんな雑魚と違つたのは御使いさまでしょ」

「俺たちのような平凡な人間が勝てるはずがない！」

「……なら死ね」

「……！！！！」

「一刀さん！」

「自分たちが弱いと思えば、より強い奴らに死ぬしかない。それは天の意志とか関係ない、この世の理屈だ。自分から弱さを認めて、強い奴らに頸を斬つてくださいと待っている奴らに、天は手を差し出さない」

「……」

「俺がああ賊たちの前に出て、また何十人殺すことは出来るだろ。

でも、他の何百は俺は構わんとしてこの街に突っ込んでくる。その時この街を守らなければならぬのは誰だ？お前たちだ」

「……」

「この街も、お前たちも妻も子たちも、結局救うのはお前たち自身だ。俺はそこに力を添えることしかできない。もしお前たちが自分たちを助けないなら、俺もお前たちを助けることができない。天だつてお前たちを助けることはできない」

俺が言えることは言った。

俺は人たちを盛り上げるとか、そんなことはできない。

ただ、現実を知らせて、それでもこの人たちが現実から逃げて天の御使いという雲の上の何かを望むのなら、この人たちにもう助かる方法なんてない。

「雛里」

「は、はい」

「お願いしよう。水鏡先生のところへ戻れ」

「嫌です。一刀さんが居るなら、私もここに居ます。私にもできることがあるはずです」

「本当に戦いになると、俺はお前を助けることが出来ないかもしれない。お前に傷一つでもできれば……」

できれば……」

「……水鏡先生と孔明に合わせる顔がない」

「だけど……」

「お前はまだ勉強中の生徒だ。ここに残って策を考えるとか。お前にそこまで望む人なんてここには居ない」

「……私は、一刀さんと一？に居ます」

「！」

「私はいつか軍師になりたいです。だけど、それがそんなに遠い未来なんて、わたしは思ってません。生徒だからとか、そういう安易な理由、私たちには通用しません」

「雛里…」

あまりにも迷いが無い雛里の顔に、俺は言葉を失った。

「一刀さんに出会う前だったら、私はここで誰か私は逃げていなさいと言われたら、きっと逃げていました。だけど、一刀さんを見てからそうじゃないってわかりました」

「……………」

「私は子供じゃないです。いつまでも守られてる側に立っているわけじゃないです。一刀さんがこの人たちを助けたいと思うのでしたら、私のことも使ってください。きっと、役に立ちますから」

「……………雛里、お前がこの人たちよりも上だ」

「ひゃうっ…！」

俺は思わず雛里の頭を帽子越しで撫でた。

びっくりして更に帽子をかぶってしまう雛里の姿があったが、そんなことよりも今は大事なことがあった。

「時間は少ない！こんな娘までお前たちを助けるためにここに残ると言っているんだ！お前たちの街だ！お前たちの家族だ！迷い要素がどこにあるというのだ！立て！勇気を搾り出せ！そこまですれば後は俺たちが押してあげる！全て守れるようにしてくれる！」

「ふざけるんじゃないー！」

「……………」

> p f <

「だ、誰ですか！今は……」

「わ、私たちでは……」

「こつちだよ！」

その声は街人たちの群れ、そのもつと後から聞こえていた。

「……お前は！」

「くく、やっと見つけたぜ。貴様ほどの武ならきつと目立つだろうとはおもってたけどよ。まさか天の御使いだったのはな」

以前街であつたチンピラ三人のうち親分の奴だった。

「何故貴様がここに居る」

「俺がこの群れの隊長だったんだよ。そして今来ているのは、俺たちの総大将さまだ！」

「何！」

こいつがこの群れの……まさか。

「おい、お前ら！どうして俺がこの街を選んだかわかるか？お前らがそんな頼りにしてるあの天の御使いのせいだよ！」

「……………」

あいつの言うことを聞いて周りがざわめく。

「どづいづことだ」

「御使いさまのせいで、街が襲われただと？」

「何故そんな……」

「あの時のことのせいでこの街を襲ったおというつもりか」

「そうだ！貴様があまりにも鬱陶しくやってくれたからな。おかげで俺は足に傷を負ったんだ」

「そんな理由で人たちを襲ったというのか！」

「知るかよ！俺たちの方が強いんだ！俺たちより弱いし頭のわりい連中は大人しく頸と金を差し出せばいいんだよ！」

「…とても縛られて言うようなセリフではないな」

俺はそうは言ったが、正直今あいつと俺の優劣は今の状態とは真逆だった。

もう直援護、いや、敵の本隊が来る。

そしたら、あのざわめいている奴らを纏め上げて戦うことができるのか？

「天の御使いか何知らんが、貴様はこの世を生きる方法がわかつちやねー」

「何だと？」

「自分より強い連中を利用して、自分より弱い連中を踏みにじる。

それが乱世の生き方なんだよ。正直に動いたところで結局頭を使わなきゃ意味がねえ」

「それで、貴様がそこに縛られてるのもそのずる賢い策のうちと言うのか」

「ふん、易い挑発だな。まあ、見ときなつて」

余裕満々の顔で賊の小隊長と言ったあいつは街の人たちに叫んだ。

「おい、貴様ら！貴様らが誰一人死なずにこの危機をしのげる方法

を教えてやるっ」

「！」

「な、何だと」

「本当か？」

「ああ、俺は総大将のお気に入りに入らなんだ。総大将が全力でここ来ているのも俺がここに捕まってるって分かってるからだよ。だから俺が行って話せば、総大将は軍を退く」

「！」

やられたか。

まだ迷っていた街の人たちが、自分たちが傷つかない方法があるという甘い誘いに乗ってしまったている。

彼がさっきまで自分たちをいじめ、そして自分たちが力を合わせ捕縛したやつだということを忘れて…

「お、俺たちがどうすればいい」

「そうだな…まずは…そこにいる天の御使いという奴を殺せ。そうすればこの街を攻めるのは止めてやる」

「！」

あいつ……

「御使いさまを……？」

「馬鹿な、そんなことができるわけが…」

「でも、でないと俺たちは……」

「みなさん、信じちゃいけません！一刀さんまで居なくなってしまうたら、本当に賊たちが来た時私たちはお終いです」

「うるせーよ、お前に何がわかる！」

「ひっ！」

雛里が戸惑っている街人たちに訴えるが、既に恐怖満ちた人たちの耳には聞こえない。

「どうせ水鏡塾は街から遠い山奥にある。賊たちが攻める可能性は少ないんだ！お前なんてそこに逃げれば構わなしたが、こっちは街がやられるとお終いなんだよ！」

「だからって、一刀さんを殺したところで賊が攻めてこないなんてそんなの嘘に決まっています！」

「じゃあ、他に何の方法があるってんのか」

「方法ならあります。皆で一？に戦えばきつと……」

「言つとくがよ、総大将の部隊は俺たちとは違う。本気で来るぞ。」

街で畑耕しながら生きてた連中に敵う敵じゃねえ

「うっ……！」

更に縛られている賊の小隊長の言葉に、人たちの目はどんどんこっちに向かってくる。

「一刀さん！」

「……………雛里、こっちに来い」

もうこいつら目が本気になってる。

「さあ、殺せ！あの天の御使いとか言う奴さえ殺せば、お前たちは助かる」

あいつは、最初から俺を殺すためにここまでしていたかのように言っていた。

俺のせいで街が焼かれたと言っても、間違いはない。

だが、

「俺を殺したところで街が助からないということが分からない阿呆から俺に槍を向ける。相手になってやろう」

「うっ……」

「……う、うるさい！俺たちのことも助けなくて何が天の御使いだ！」

「俺が天の御使いでないとして、俺が死んだところで本当に助かると思う奴は前に出ろ」

「う、うおおおお！！！！」

「腰が抜けてる！」

包丁を持って仕掛けてくる街人の一人を、急所を避けて木刀で突く。

「うぐう……！！」

「お、おい、大丈夫か！」

「一気にかかれよ！一人一人で相手できねーよ！」

後から賊の小隊長の声を聞いて、もう自分たちで考えることを諦めた街人たちは同時に何人も持つてる武器をふるってくる。

「離里、無闇に離れるな。くつついてろ」

「あ、はい。一刀さん！」

「分かってる。傷は付けない。所詮は平民だ。罪はない」

が、厳しいな。この状況。

遠くで来る恐ろしい賊は相手にできなくて、群れになって自分たちを助けてあげると言った男と子供一人には手が出せるか。

「うぐうつ」

「ぶぐおっ！」

考えることをやめてただ人が言うことを聞くことは楽だ。だが、そこに自分たちの幸せがあることはまた少ない。

「ちっ！」

「一刀さん、これ以上は……」

「仕方がない。何か方法を考えないと……」

賊が来る前に俺の手で街の人たちを全部倒すはめになる。所詮は恐怖に押されて何の技もなくものを振るう雑魚敵だ。何重重ねて来たところでこっちが負けることはない。ただ、

「うわあああああ……！」

「ちっ！」

行かない。あの姿勢だと、急所狙いじゃないと後の離里まで傷つく。

「済まん！」

「うげっ！」

木刀で喉を突くと、槍を振るっていた相手はそのまま無様にこけ倒れた。

「おい、貴様ら！何やってんだ！何人がかりでも倒せねーとか、もう時間がねーんだぞ！」

「う、うおおお！！！」

後の賊の小隊長の声を聞いて、ない力まで振り絞って自分たちの最後の希望の炎を吹き消すために仕掛けてくる人たちを見てみると、その姿が可哀想とさえ覚えてきた。

人間は恐怖に満ると所詮はこれだ。何も考えず言う通りに従う獣と化す。そして命じられたからって、自分たちの為だからってその罪を隠すことになるだろう。

「現実を見る！時間はもう少ない！まだ分からんか！俺を殺したところでお前たちが助かることはないということを自分たちでも分かっているはずだ！」

「だ、だけど、他に方法がない！」

「方法があった。だけど、お前たちは易い道を選んだ。厳しい現実を敢えて避けて幻のように、夢のように楽な道を選ぼうとした。そんな道選んだところで一步も進んでないのと同じだ！」

「うぐうつ……！！！」

恐怖は人を不合理にする。愚かにする。

自分たちがしていることがどれだけ無駄なことなのかを知っているながらも敢えて考えないようとする。そして、こうして死んだら自分たちを救ってくれなかった天を呪うだろう。

ほんと、どれだけ馬鹿なんだろうか。人って。

その点、あの賊の小隊長は確かに自分が言った通りだ。

ずる賢く生きて、自分より強いものを利用して、弱いものは踏みこむ。

そういう生き方は、たしかにこの乱世にて有用な物なのかもしれ

ない。

「ええい、何やってるんだ！早くあいつを殺せ！お前らも死にたいのか！」

……いや、待って……

「違うな」

「へ？」

「そういつことか！」

お前は世の生き方を知ってるわけじゃなかったんだ！

「そこを退け！」

「なっ！」

俺は倒れていた人の槍を持って柱に縛られて叫んでいた賊の小隊長の首筋直ぐ横に槍を刺さった。

「ひっ！」

「そうじゃないんだ！実は本当に焦っているのは、本当に恐怖に満ちてるのはお前なんだ。だからそうやって急いでる。余裕満々なじゃない。焦ってるんだよ」

「な、何を言ってるんだ！俺んちの総大将が来れば貴様らはお終いだ！」

「いや、始末されるのはお前だけだ」

「！！！」

「これだけの兵たちを、しかも完全武装させて連れてきたんだ。なのにこんな無様に負けてしまった。責任を取って殺されるだろう」

「！！！」

凶星かな。

「じゃ、じゃあ、一刀さんを殺せと言ったのは…？」

「ただの八つ当たりだ。悪あがきなんだ。こいつはこのままだとうせ死ぬ。恨みがある俺も道連れしようとしただけさ」

「ふ、ふぎけるな！貴様なんか…！裴元紹さまに出会ったら一捻りもない！」

「そうか、総大将の名は裴元紹か。これはまた中々の人物が出たものだ」

「そ、そうだぞ！何時かは張三姉妹の一人、張宝さまの武将だった方だったけど、ある戦いで負けてバラバラになったところを、あの人は俺たちと一？に荊州に来た」

「そして、山にでもこもって静かにそこんところ通る商人を襲って部下たちを養っていたところ、貴様が街で変な騒ぎ起こして俺に八つ当たりして」

「！」

「勝手に兵を連れてここに来て負けてしまった。いや、負けたことはどうでもいい。彼にとつては見事な軍令違反だろう」

「……貴様さえなければ、この街を襲ってこの財宝を持って帰れば、きつとお頭も喜ばずだった。俺を副頭に付けたかもしらねー」
「もう遅いかな。貴様さえあいつに付け出せば、裴元紹は大人しく戻ってくれるだろう」

「ほ、本当ですか、御使いさま！」

「やった！これでこの街は助かったぞ！」

俺の言葉を聞いた街人たちはやっと武器を下ろして喜んだ。

「へん！俺が大人しく連れて行くと思うなぐはっ！」

「口が多い奴だ……まあ、その舌三寸で今まで生きてきただろうけ

「ど、これでおしまいだな」

鳩尾を拳で叩くと、武装も解除された賊の小隊長はそのまま気絶した。

> p f <

「み、御使いさま」

「…何だ？」

「さつきは本当に申し訳ありませんでした」

小隊長の奴を気絶させたところで、街の人の一人が俺にそう言った。

「何を謝っているのかさっぱりだな」

「で、ですが…」

「お前らはただ怯えていただけだ。何をしていない」

「お、俺たちを許してくれるのですか？」

「……………こいつは自分がこの街を攻撃したのは俺のせいだと言っ
たな？それは事実かもしれない」

「…へ？」

呆気無い顔になったその人と、後で騒ぐ人たちを見て俺は言った。

「まだ街が助かるって決まったわけではない。所詮は賊だ。下手を
するとこのまま街を焼かれるかもしれない」

「そ、そんな…！！」

「じゃあ、俺たちはどうすれば…！」

「…俺がこいつを連れて賊たちに当たる。もしもの時を備えて、お
前たちは急いで街を防御する準備をしろ、離里が手伝ってくれる」

「あ、あわわ！」

突然呼ばれた雛里が驚いた顔で俺を見た。

「出来るな、雛里」

「……………はいっ、頑張りましゅ！」

「よし、それほど緊張した方が丁度いい」

「あわわ、か、からかわないでくださいよお」

「ふふっ」

俺は気絶した賊の小隊長を持ち上げて人たちに言った。

「一度無様な姿を見せてくれたことはいい！だけど、二度目は駄目だ！もうお前たちを説得している時間はない！護りたいものがあるのなら、自分たちの力を搾り出せ！俺に先出していた殺気をお前たちを傷つけようとする賊たちに回せ！街を、家族たちを守るために全力尽くせ！そしたら俺もそこに力を添える。天もお前たちを助けてくれる！」

「……………わかりました」

「雛里、ここを任せた。俺は前に出て時間を稼ぐ」

「はい、わかりました。もううまくいかなかったら……………」

「ああ、その時は直ぐに戻って皆と戦う。無茶はしない」

「…わかりました」

まあ、大人しく戻ってくればいいのだがな。
そううまくはいかないだろう。

「急がないとな…」

俺は賊の小隊長を持ったまま街の外へ向かった。

第一章 九話 弱き人Ⅱ悪人（後書き）

人を奮い立たせ、街を守るといふのは天の御使いとしての第一歩を飾る大事な儀式（？）ですが、

そのことがうまくできなかったこの北郷一乃、

果たして彼には天の御使いになる資格はあるのでしょうか。

そして、雛里の思いとは裏腹に、彼女から逃げようとする一乃はどんな選択をするのでしょうか。

という話をしつつありますが、

実はTINAMIだと、ここから本格的にエキストラの人が出てくるのですが、ここでは黙黙と同時に上げてますから、できるだけあの人たちの登場はできるだけ抑えます。これからは黙々シリーズみないとわけわからないところも出るかも……しれません。この外史を完全に楽しむには、TINAMIに行って自分の黙々・恋姫シリーズを見て来る方を推薦します。でも、見なくても大体問題はありません。ただ、ちょっとアノ人テンションおかしいのでついていけないか怖い……

第一章 十話 分かれ道

雜里SIDE

初めて見た街を襲う盗賊。

…いいえ、経験したのは初めてではないです。

私たちのお父さんやお母さんも、盗賊たちによって殺されました。

私は盗賊たちの姿を見たことはありませんでした。ただ、死んだご両親のことを考えると、こんなことをする盗賊たちが憎くて仕方がなかったです。

でも、自分に武の才能がないのはわかったから…そんな時水鏡先生のところに来て、自分が軍略や、軍師としての才があることをわかりました。あの時から思いました。

これに私の全てを賭けよう。これ以上私みたいな親を失って悲しむ娘たちができないようにしよう。人たちが悲しむ盗賊なんて居なくすればいい。

そう思っていました。

だけど、実際こんな時が来てしまうと、私に出来ることが何もありませんでした。

私なんて、他の人たちが戦う気を持たなければ一人じゃ何もできなかったのです。

むしろ、街を守ろうとする一刀さんの気持ちを邪魔するばかりで…私がもし、この街の人たちに一刀さんが天の御使いだなんてことを言っただけならば、ものがこんなに難しくならなかったかもしれませ

ん。
一刀さん自身で、人たちが奮い立たせることができたかもしれませ

私は知らなかったのです。

人たちが自分が知らない何かにあんなに無茶な願いを持つなんて思
つてなかったです。

まるで相手を人として見ていませんでした。

昂くみようと、それとも自分たちより低い位置に見ようと、結局同
じく自分たちの良いようしてしまうのでした。

結局天の御使いというのはなんなのでしょう。

朱里ちゃんたちの言う通りなのでしょうか。

一刀さんはたしかに強いですけど、普通の人間です。

そんな人に、何か天からの凄まじい力を求めることは、不可能な願
いなのです。

それでも、人たちはそれを願い、それができないと不満をだしてき
ます。

…人って、こんなに自分勝手だったのですね。天が人たちを今まで
苦しませてきた理由がわかります。

天は人を助けなかったわけではないです。天はきつと、今までも何
度も何度も人を助けようとしたはずです。だけど、その助けを伸ば
した手を振り切りもつと下へともぐりこんできたのは……私たちの
方もかもしれません。

「お嬢ちゃん」

「……へっ？」

ふと現実から頭が外されて居ました。

「それで、俺たちやこれからどうすればいいんだ？」

「…あ、はい」

そうでした。

何はともあれ、今は現実には立ち向かわなくてははいけません。自分を罵ることもまた、何の意味な成さないことですから。

「それでは、街の入り口に賊の移動を防ぐための柵を立ててください。材料は壊された家とかでなんとかしてください。それから、街の自己警備に使う武器があるはずですよ。何人か行って持ってきてください」

「わかった。…おい！その三人、俺と一？に倉の方に行くぞ」

「おう」

「おい、こいつらはどうする！騒いでるうちに逃げたらやべえぞ。いつそこで殺しまえば…」

「それはいけません！」

一刀さんが連れて行ったこの群れの隊長以外、まだ捕縛されている賊の人たちが居ました。

たしかにこの街に被害を与えた罪はありますが、こちらではまだ奇跡的に死人は居ません。

そんな状況で賊だからと言って殺してしまえば、こっちの方がもう非道なようになりますし、それに一刀さんが賊との協商に行っている時に仲間を殺したりしたら不味いです。

「殺してはいけません。何人が常に警備しておいてください。何かあったら直ぐに他の人たちも集めてください」

「わかった」

賊たちを縛っている縄は家や城壁を建てる時とかに使う太いもので、それを何重に重ねて縛られた賊の人たちが荒ぶるとしても、中々外されることはありません。

ただど万が一の状況もまたあり得ます。

もし一場所でも脱出できたら後はあつという間に皆解放されてしま
うかもしれません。

ここで私ができることは、もしも一刀さんが失敗した時、街の防衛
戦が出来るように、街と街人たちを準備させておくことです。

もちろん、一刀さんが思った通りに、賊の人たちがそのまま引いて
くれたら尚いいですけど…

だけど、

御願います、一刀さん。

無理はしないでください。

> p f <

一刀SIDE

「ちっ！」

先、旗を見ていた丘に、街を襲った賊の大将を連れて上がってみる
と、もう敵の騎馬隊はその前まで来ていた。

「うまく行ったらいいが」

その逆なら…正直雛里に言った通りにはならないかもしれない。

この無茶な作戦は、あくまであの盗賊の群れの大将、つまり裴元紹
が元々この街を襲うつもりでなかったことを前提する。

彼がここに来たのは、単に自分の命なしでこの街を襲った連中を裁
くため。

でも、もしそうでなくてこの街を襲うことに加勢するためだったり、

もしくは最初は裁くつもりだっただけでも、途中で気が変わっていたりすればあの街は正直守りきれない。
もしその場合は……大将の裴元紹の人なりに頼るしかないだろう。

「どつちにしろ、世の中片方が考えるようにばかり動いてるものではないからな」

今回だけ、今回だけでいいからうまく言ってくれ。

あの街には雛里も、他の多くの人たちもいる。

これ以上血を流すわけにはいかない。

賊のものでも、民間人のものでも……

どんどん騎馬隊が近づいてくる。

俺は、賊の小隊長の頭巾を木刀に巻いて旗のように振った。

こつちのことを知らせるためだけに、うまく行くが正直分らない。知らないで突っ込んで来そうだったら……悪いが馬一、二頭ぐらいは犠牲になってもらう。

「！」

だけど、俺の予想とは外れ、騎馬隊がここから数十歩前のところで止まった。

そして、その中で前にあった一頭だけが前に進んでくる。

「……………」

あれが裴元紹か。

一人の騎馬はゆっくりとこつちに向かって来る……

そして、俺に向かつてどんどん速度が上がて来る。
念のために姿勢を……

「しゃおらあああ!!」

「ふっ!!」

騎馬状態の相手が走りながら薙いで槍を木刀で返しながら馬の向き先から離れた。

重い……馬に加速されたのもそうだけど、相手自身の力もまたすごい。

流星は賊の総大将も名乗れるものだ。

一合終わって通り過ぎた騎馬はこつちを振り向いた。

そして今度はゆっくりと歩いて来る。

「……何者だ、貴様は!!」

「……俺は北郷一刀、あの街の代表だ」

馬の上ののつて勢いを持った声でこつちを薙ぎ払うかのように叫んでくる。

「お前がこの群れの総大将と聞いている」

「そうだ!俺がこの山賊の大将だ」

「……山賊?」

「そうだ!山に潜って通る商人らを襲って生きる山賊よ」

たしかに、裴元紹といえば三国志演義でも黄巾党の張角らが死んだ後、周倉と一?に山賊になったという。

でも、黄巾党ではなく山賊を名乗るといふのなら、ますますこつちまで出てくる理由はないはずだ。

ああ、これで明らかになる。この街を襲った連中は勝手に出回っただけだ。

「山賊なら山に居ればいい。何故街を襲おうとしているんだ」

「……そいつらは俺の部下じゃねえ」

「？」

「俺の命を無視して勝手に街を襲うために出ていった。武装や武器など持ってよ。まったくんでもねー連中だ」

「なら、こいつの勝手な攻めだったと言うのか？」

俺はまだ気絶している小隊長の奴をさしながら言った。

「……ああ、違いねー、他の奴らの言った通りだな。…殺したか」

「いや、殺してはいない。他の連中も街の中に捕縛してある」

「……ほお……」

裴元紹は鋭い目でこっちを見た。

「この街を攻めるつもりでなかったとしたら話は早い。お前らの部下を連れて帰ってもらいたい」

「は！例え予定でない街奇襲だったとしても、賊の俺たちがそんな条件で帰るとでも思うのか。それに、そいつらは裏切りものだ。連れ帰ることなく全員切り落とす」

「なら、それもまだ構わんとしてだ。このまま街を放っておけ。既に街は大きな被害を受けている」

「…断るとすれば……？」

「……ここで貴様を斬らせてもらおう」

「がはははっ!!!」

馬の上の裴元紹は豪快に笑い始めた。

「中々度胸のいい奴だ！気に入った！俺の部下にならねーか」

「……は？」

一瞬、奴が何を言っているのか分からなくてつい真面目な顔から素に戻って問い返してしまった。

「そいつは中々気に入ってる奴だったが、あんな狐みたいな真似をする奴ならもう用はねー。代わりに貴様を俺の部下に入れてやると言っているんだ」

「…断るとすれば？」

「その時は遠慮なくあの街を襲ってもらおう」

「ちっ！」

そう来るか。

いや、しかし、

俺一人で引いてくれるとすればまだ良い話だ。

どうせこの街を出るつもりだったではないか。

賊というのは少し気に入くないけど、街を守るためなら一応はその条件を飲むことも考えられる。その後のことはその時になって考えればいい。

「……分かった。貴様の部下になろう。街には手を出すな」

「いいだろう……ははっ！こいつは裏切り者を処理した代わりに大物を釣ったぜ」

「……一度街に帰らせて頂こう。持つてくる者もある」

「構わん！だが、俺の部下も何人が連れていってもらうぜ。残りの裏切り者どもを連れていくためにもな。安心しろ。俺の言うことなら聞く連中だ。街に害することはさせん」

「……ならいが」

「おお、そうだったな。部下にするのなら名前をしつとかねーとな」「裴元紹だろ？既に聞いている」

「何だ、知っていたのか。まあ、俺のことはお頭でもなんとでも呼ぶといい。名で呼ぶ連中は居ないがな。がっははー！」

見た目としてはかなり威圧ありそうな顔だったが、言うことは割り
と街のちよつと豪快のおじさん並だ。

「お前の名は何だ」

「……姓は北郷、名は一刀。字はない」

「北郷一刀か。珍しい名前ではないか」

「……………」

俺が何も言わないで黙っていたら、裴元紹は後で待機している部下
の何人かを呼ぶ寄せた。

「こいつとー？に街に行つて他の連中を連れて来い。後で陣に戻つ
てまとめて裁くから殺したりするな」

「……………はっ！」「……………」

「後、お前はこいつとー？にこいつの私物を持って来い」
「わかりました」

他に俺の監視役を命じられた者と、他の四人ぐらいは乗馬したまま
頭を下げた。

「お前、馬は乗れるか」

「…嫌、乗れん」

「そうか。まあ荊州の者はそれほど変でもない。ほらよ！」
「なっ！」

裴元紹の手が俺を無理やり引つ張って馬に乗せた。
なんとという力だ。

「行くぞ！」

「ま、まっ…うわあっ…！」

「がっはは！しっかり捕まえてるよ。落ちて馬に踏まれたらもった
いねーからな！」

無茶言え！

何だ、どうして人間は他の動物の背に乗って移動することなんて考
えやがっ……って落ちる！

> p f <

雞里SIDE

「お嬢ちゃん！！彼処から何か来るぞ！」

「！一刀さんですか？」

「いや、馬がいくつか……」

私は街の人の言葉を途中まで聞いて簡易で作った柵の上に乗って

砂塵がする方を見ました。

馬が何匹かこっちに向かってます。

攻めてくるわけではなさそうですけど……警戒はしておきます。

馬たちは柵のちょっと前に止まりました。

「！一刀さん！」

その中で、一頭の馬の後側に一刀さんが乗っていました。

「どうなってるんだ？」

「知らん。あの数で来たと言っわけでは……ないだろうが」

「……多分、一刀さんが協商に成功したのだと思います」

ここに攻めてくるつもりなら、あの数だけでここまで来るはずはありません。

「ホンマか！」

「よっしゃー、これで街は無事だぞ！」

「俺たちは助かったー！」

「あわわ！まだ気を抜いてはいけません。決まったわけではありませんから」

取り敢えず一刀さんのことを聞かなければ……

「雜里」

「一刀さん！」

他の賊の人たちをー？に來た一刀さんを見て私は柵を越えて走って行きました。

「大丈夫なんですか？」

「ああ……こいつらに仲間を渡してくれ。それで帰ってくれるそう
だ」

「…そうですか」

よかった。

「一刀さんも無事みたいですし、街もこれ以上襲われることもないで
しょう。」

「後……」

「…はい？」

「引き取り条件に連中の仲間になることになった」

「……………え？」

自分の耳を疑いました。

「一刀さんが……」

「一刀さん……」

「麓に置いてあった鞆を取ってそのまま行くつもりだ。悪いが、こ
こでお別れにしよう」

「ちよっ……ちよっと待ってください……」

「一刀さんが…盗賊の仲間入り……？」

天の御使いになると思った人が……

「…？にその道を行きたいと思った人が、盗賊に……
そんな……ことが……」

「あうう……」

「！雛里！？」

> p f <

一刀SIDE

「雛里！」

俺の話を聞いていた雛里がそのまま倒れてしまい、俺は倒れる彼女を支えた。

「おい、そのお嬢ちゃん、大丈夫なのか」

後から裴元紹が声をかけた。

「……大丈夫だ。気にする必要はない」

「……衝撃だったようだな。貴様が俺の部下になるといっのが」

「……」

「何なら、そいつもー？につれて来てもかまわねーぜ。なあに、女はあまり居ない物騒なところだが」

「ほざけ」

俺は鋭く木刀を裴元紹の頸に指した。

「貴様！」

「やめんか、お前ら！」

部下たちが俺にむかって槍を薙ぐのを裴元紹は厳しく止めた。

「悪い、今の言葉は謝ろう」

「……もう一度そんな話を口にしてみる。街も何も貴様のその頸を胴体から切り落としてくれる」

「厳しいやつぢやな。まあ、俺もそんな気持ちを知らないわけではないからな。大事な娘を守りたいというのは……」

「……そういうものではない」

俺は木刀をおろしながら言った。

「……用事だけ済ませてここを去ろう。俺が戻ってくるまで雛里や街人に傷一つでもさせたら……」

「心配すんな。これでも俺は約束を大事にする男だ」

「……その言葉を信じよう」

俺は気を失った雛里を抱き上げて街の中の方を向かった。

そして、街の人に雛里の面倒を見させ、彼らが仲間たちだけ返せばおとなしく帰ってくれろと説明した。

俺のことについては言わなかった。そうする必要もないし、言ったところで良いこともない。

悪い、雛里。

あまり良くない別れ方だが、これで潔くお前から離れることが出来る。

> p f <

街から塾の間に置いてあったキャリアケースは倒れたせいで開かれていたけど、特に問題はなかった。

「何だ、それは……」

「……私物だ、大したものではない」

いや、正直すごく大したものだけだな。

今はまた中に何も入ってなかった。

でもこの前は木刀があつて、その前は時計が入ってたり、そしてさつきは雛里がスタンガンを持ってきていた。

どう考えても、普通の品物ではない。

ないが……

深く考えないことにしようと思っている。

考えたところで何かわかることもなければ、今はそんなことは別にどうでも良かった。

「……そういえば、塾では街のことを知っているのだろうか」

今孔明は他の人に会ったらすごく変な状況だからな。

街人もそこまで考えが回らなかったらうし、後で話すようにしておくか。

「帰るぞ」

「用事はそれだけか？」

「構わない」

「お頭は度胸がある奴が好きだ。さつき捕まった奴はお頭に媚ってばかりだったが、こんな独断なことをして許されるほど愛されてはいない」

「彼はそうとして、付いて来た連中はどうなる」

「それは君次第だろう。恐らく、お頭は君にあいつの代わりをさせるおつもりだろうからな」

「……………」

盗賊の幹部にさせるといふのか。

……あまり良い気になる話ではないな。

どうするべきか……

「用がそれだけならさっさと戻ろう。この上には水鏡先生の私塾があると聞く」

「それがどうした」

「お頭は学問はないが、その御方がどれほど徳望ある方がは知っていらっしやった。だからこの街を今まで攻めることがなかったのだ」

「……なら、他の街は……？」

「……詳しい話はお頭に聞くがいい。だが、俺たちは君が思っているようなそついう賊の群れではないとだけしれ」

「……ふん」

まあ、行ってみればわかることさ。

・

・

・

第一章 十一話 ……と思ったら結局後でまた会う道だった(前書き)

編集して出来るだけ音とかで表現するのをやめようとしています。

第一章 十一話 ……と思ったら結局後でまた会う道だった

雛里SIDE

「説明してもらおうか」

「……まあ、そう怒るな。北郷」

「俺は警告したはずだ」

「一刀さん、落ち着いてください。これは……」

「雛里は黙ってる」

「うっ……」

今、この山賊の巢にて、一刀さんは他の山賊の人たちに囲まれた状態で、裴元紹さんの頸を（しかも木刀で）狙っています。

その原因は、疑うこともなく私のせいです。どうして、私がここに居るのかは一刀さんが鞆を持って来るために街から居なくなった時に遡ります。

> p f <

「うん……うん？」

気がついた時、私は街のある菜館の椅子を並べたところで眠っていました。

「どうして……!?!」

その時、私は直ぐにどうして自分が気を失ったか思い出してしまいました。

一刀さんが……山賊に加わると言ったのです。

「どうして……」

どうしてこんなことに……

また一刀さんに行つて確認しなければなりません。

行つて、話を……

「でも、今の一刀さん、私の話全然聞いてくれない」

だからつて、このままだと一刀さんとこの先永遠にあえなくなつて
しまいます。

それは嫌です。

私は……

もつと一刀さんと一？に居たいです。

一刀さんはとても不思議な人です。

強いはずなのにとても弱そうな人です。

だけど、自分のためだけに何かができる人じゃないです。

嘘も下手で、実は優しいのに仮に人に厳しく当たろうとします。

それはきつと自分の弱い部分を隠すためです。

だけど、実は一刀さんは優しい人です。

私が願っていた人。

あの流れ星に願った願い。

私は、自分が付いていく人が優しい人でありますようにと、そう願
っていました。

それなのに、その流星が塾の手前に落ちてきて、そこに一刀さんが
居て……

今に考えると、つまりそういうことなんです。

一刀さんのここに連れてきたのは、私なんです。

一刀さんが居る天の世界から、一刀さんを連れてきたのは私なんです。

だから、私は一刀さんに付いていきます。

例えそこが盗賊の巣の中だとしても……

「……………うん」

そう決めてしまったら、もう後することは決まっていました。

> p f <

「お嬢さん……自分が何と言ったのか分かってるのか」

「はい、ちゃんと分かっています」

一刀さんは街に居ませんでした。

私はその間、街の少し手前で一刀さんを待っていた盗賊の大將の人に、私も連れて行くようにお願いしていました。

「俺の群れは山賊だ。生きるためとか、どんな言い訳を付けたって下衆の真似よ。お前のことは水鏡先生の塾の生徒だと聞いているが、先生の名に恥をかかせるつもりか」

「あわわ……………」

いきなり先生のことを言うてくるとは思ってませんでした。

でも……先生もたしかに言うていました。自分が思ってるようにすれ

ば良いと。
だから私は……

「私の気は変わりません。一刀さんを連れて行くとすれば私も連れて行かせてもらいます」

「じゃが、本人に厳しく言われているからな……お嬢さんを連れて来たことを知った途端、また俺の頸を狙うことは目に見えている」

「……仮にも賊の大將でもあろう人が、それほどのことを恐れるとは心外です」

「うむ？」

「それとも、私がこのまま塾に帰って、街であつたことを水鏡先生に教えることを望んでますか？」

「……！」

「国に仕えている先生の弟子たちは荊州だけでも多く居ます。先生の言葉なら、官軍でここに討伐に来てもらうことも難しくはありません」

「はっ！俺はその官軍というものを何度も見てきた。今の時代に官軍など完全な武装をしている俺たちの敵ではない」

「だけど、そこに先生や私たちの策が加わるとすれば……」

「……」

「水鏡先生がいらつしやる街を狙ったことは、例えそれが間違いによつて起こつた事態としても、返り討ちに会う可能性は高いです。でも、私が付いて行けば、その可能性を防ぐこともまた可能でしょう」

「……お嬢さん、言葉に刃が立ってるな」

「……」

私も必死なんです。

ここで一刀さんを逃すわけにはいかないのです。

例えそれが先生の名を勝手に借りる蛮行を犯すことになるとしても

……

「仕方ねーな。確かにお嬢さんの言う通りだろう。水鏡の名は荊州にて強い。あの方に一度逆らえば、荊州で賊なんてやってられないつてものだ」

「…それじゃあ、」

「だが、付いて来たところでどうするつもりだ、お嬢さんは？結局あいつを説得しないことには、また追い出されてしまうだろう」

「そこは私があんとかします。だから、今はまず、一刀さんにバレないように私をあなたたちのところまで一？に行かせてください」

> p f <

そうやって一刀さんにバレないように賊の巢がある山まで入ってきたところまではよかったのですが、

山に到着して半刻も経たない中で、一刀さんのことを歓迎する準備で忙しい賊の人たちの中をうろろしていたらすっかり一刀さんに居ることをバレてしまいました。

それを見て頭に来た一刀さんは……

「これを木刀だと思って甘く考えていると困る」

現状に至ります。

「……………」

裴元紹さんを睨んでいた一刀さんはそのそこにあつた岩に木刀を向けて、その岩に木刀を突きました。

「ひゃっ！」
「なっ！」

そしたら、木刀はまるで真剣のように岩に入って、一刀さんが木刀を抜けると岩にはぽっかりと穴が空いてました。

「後に街や何もなければ、俺は貴様の軍をあゝの荒野の上で全滅させることもできた。だけど、街にアレ以上の被害を受けさせたくなかったからこんな手をとったのだ。なのに何だ？ どういうつもりあの娘をここに連れてきた！」

「あのお嬢さんの意志なんだよ。俺の脅かされただけさ」

「そんな話があるか」

「本当です、一刀さん」

「！」

一刀さんは驚いて私の方を振り向きました。

「……私が先生の名を売ってあの人を脅迫したんです」

「離里、何故そこまでして俺の後を……」

「だって一刀さん、いきなり居なくなるうとしてばかりで…私がそんなことで易々諦めると思ってるんですか」

「……くうっ！」

「いいから、話なら私としてください。他の人に八つ当たりなんてみつともないです」

「……………」

でも、まだ一刀さんは剣を裴元紹さんから離してくれませんか。

「ヤー！！」

その時、突然一刀さんに迫ってくる影がありました。

「っ！」

「あわっ！」

いきなり裴元紹さんと一刀さんの間に誰かが割り込んできて一刀さんを攻撃しました。

一刀さんは突然のことに驚いて一歩離れました。

「はぁーっ！」

「っ！この！」

でも、いきなりの攻撃に続いた攻撃に、一刀さんも姿勢を正して反撃します。

顔がちゃんと見えない、少し小柄なその人は端に何の刃物も付いてない、ただの棒を持って一刀さんに当たりました。

ですが、何合かやりあったと思うと、

「はぁぁぁっ！！」

「…ぁ」

相手の人が持っていた棒は一刀さんの木刀に叩かれて真っ二つにされてしまいました。

武器を失った空いては慌てて一瞬動きが止まりました。

「はぁぁぁっ！」

「っん！」
「やめんか！」

無防備になった後に倒れたあの人に止めを刺そうとした一刀さんに、今度は裴元紹さんの剣がその間を潜って来て一刀さんの剣を止めました。

「っ！」

一刀さんは裴元紹さんの剣に押されて一歩下がりました。

「倉番！」

「>>ビクツ<<！」

「誰が勝手に男たちの遣り合い割り込んで来いを言った！」

「で……でも……あの人……おじさん……いじめた」

「うるさい！勝手なことするんじゃないねー！」

「……ごめんなさい」

「……？」

良くみると……

「あわわ……？」

「……？」

「あわわっ！？」

「どうした、雛里」

「…一刀さん、あの人、女の子です」

「何?!」

本当でした。

髪があまりにもむちゃくちゃに乱れていてちゃんと見えませんでしたし

たけど、その間で少し見えるその顔はたしかに女の人の顔でした。どうしてこんなところに女の人が……？

「こいつは俺の群れの紅一点だ。倉の護りをさせてるから、皆倉番って呼んでる」

「呼んでるとは……名前は何？」

「ねー。最初から倉の中で寝ていて、あの時からここに居させてる」

「……」

いえ、紅一点と言いましても、あんなんじゃない女の子かどころか、人間なのかもちょっと疑わしいですよ。

髪も女の人のとは思えないぐらいむちゃくちゃになってますし、服もぼぼ形がなく布と一？です。

「……」

「おい、雛里」

私はその娘に近づいてみました。

「……」

倒れていたその娘は私が近づくのを見て少し後ずさってましたけど、結局近くまで行くことはできませんでした。

「……髪とか全然整ってないじゃないですか」

「まあ……こんなところでな。自分で適当に切ったんだろう」

「誰かはさみを持ってきてください」

女の子なのに、これはあんまりです。

「これを使え」
「あ」

はさみを渡してくれたのは一刀さんでした。
ちよつと私知ってるはさみと形が違ってましたけど、使いやすそうだから別に問題ないでしょう。

「!!な……に?」
「いいからじつとしてて」

刃物を持つてるから驚いたのが、倉番と言った女の子はまた逃げようとしたけど、肩を抑えてその場に座らせました。
髪が絡んでいて…これは切るしかなさそうです。

ちよつと短くなっちゃいますけど、まずはそれでもちゃんと前が見えるようにして……
女の子らしさとか考えられる髪じゃまずないですから、整えることを最優先にして短く切ります。

少し時間をかけて、何か朱里ちゃんより少し短いような髪型でなんとか整えることができました。

「はい、できたよ」
「……………?」

邪魔になる髪を切ると、綺麗な赤色の目が姿を現しました。

「……………??」
「あ……」

あの、鏡、こんなところに鏡とか。

「ほら」
「あ」

と思ったら、今度はいつてもないのに一刀さんが何かを投げてきました。

開けてみると手のひらの大きさの小さな鏡です。

「ありがとうございます」
「……………」

一刀さんは肩を少しすくめました。
私はその鏡を女の子に見せました。

「……………！」
「どっ？」
「……………これ…あたし？」
「うん、どっ、ちょっと気に入らないかもしれないけど、先のはマシかな。ちょっと髪が伸びるとその時また整えばいいから」
「……………」

鏡に映った自分の顔を見た女の子は少しその姿に見惚れたように鏡の中の自分を見つめていました。
そして、顔を俯いて、

「……………ありがとうございます」

と、小さくいいました。

> ｾﾌﾞﾙ <

キャリーケースを持って裴元紹のところに戻って、また馬の上に乗って2時間ぐらいを走って行った。

そしたら、鬱蒼な森に覆われた山があつて、その中道らしくもないその道を馬であがつていくと、山賊たちの巢がそこにあつた。

「思ったよりも広いな」

「まあ、俺に付いてきている連中が八百もあるからな…それに馬まで合せると、山一つじゃちよつと足らんぐらいだ」

「にしても、山賊なのに、何故騎馬を持っているんだ。必要ないだろ?」

「馬鹿言え。あいつらは北方でのあの激戦地から一?に生きて来た仲間だ。それに、山の中でもあいつらの使いどころはある」

「……」

そんな風に、少し疑問に思ったことたちを裴元紹に聞いていたら、後から彼の部下が何人か来た。

「お頭、捕まえてきた奴らはどうしますか」

「空いてる倉に縛っておけ。外から閉じて何人かは番人をしてろ。」

「はっ」

「それと、歓迎会の準備をしろ。今日はなかなか骨のある奴が来たんだ」

「……宜しいのですか?」

部下は少し心配が混じった声で問い返した。

こんな山の奥の山賊だ。
毎晩酒を飲みながら遊ぶのが日常ではないのか？
俺の頭の中の山賊は……なんというか、一番いい形を想像しても水
滸誌だ。

「いいだろ！やる時はパーツとやるんだ。早く行け！」
「わかりました」

部下の者はそのまま裴元紹の話の皆に告げるために下がった。

「さて、北郷、ああ、呼ぶのは北郷で構わんな」
「構わん。…言っておくが、お前をお頭と呼ぶつもりはない」
「がっははー！それはまあ、後々やっていくとしようぜ。それより
だ。酒は好きか」
「酒……いや、あまり得意ではないな。好んで飲む方ではない」
「そりゃ損してるな…うーむ。困ったものだ！山賊にもなれば、夜
酒を樽で呑んでも明日にはびっしりしてるもんだけどな」
「……………」

正直な話、やりたくないわ、山賊。

「お頭ー、大変ス」

と言っていたら、また他の奴がやってきた。

「何だー、さつさと宴会の準備しろって」
「それが…倉番がまた寝てるんスよ」
「ああ！？……ああ、あの野郎は……」
「どうしやつスか？俺たちでなんとかしやつスか」
「寄せ。あいつが寝てる時に倉を開けたら死人が出る。後で俺が行

く。お前らは他のに当たったけ
「了解っス」

と行って、部下の者はまた去った。

「今の話は…?」

「ああ、うちに倉番はちょっと変わり者だよ…倉の中で大体生活してるんだけど、いきなり誰か開けると大暴れするんだよ。中から酒とかとつてももらわんと宴会にならねーってのによ」
「……」

変わった人だな、それは。

「ああ、悪いが、ちつとここに居てくれるか。ついてきて事故るかも知らんからな」

「…分かった」

そう言って、裴元紹はあっちの方へ行った。

その後、俺は特にやることもなくて人があまり通らないところであらうろしていたんだが……

「あわっ!」

「?」

なんだろう……

何か、ちつこいものが馬の後を通ったような……

その時、俺が見ていた場所の更に後ろ側の茂みからばさばさと音がした。

「あわわー!!」
「!」

雛里!?

「一刀さん!」
「うわっ!」

何故雛里がここに居るのか知る余裕もなく、雛里は俺に抱きついてきた。

「後から、バサって!へ、蛇!!」
「え?」

雛里が出てきた後の茂みがバサバサつと震えていた。ちよつとしたら下からズルズルと蛇が前に出てくる。

シーっ

「ひいー!!」
「……………帰れ」

シーっ

「帰れ、他の連中に酒の肴にされるぞ」

シーっ

「……………ああ」

いや、なんでこんなところに卵産んだし……

盗賊の巢の手前だぞ？

馬鹿なの？死ぬの？死ぬよ？

「いや、ちょっと、待ってそれより」

今俺に抱きついて震えているこの小動物。

「雞里、どうしてここに居る。ってかどうやってここに居る」

「あわわっ！？え、えっとそれは……あの、その……」

三秒間、

「森の精霊さんが……」

「ねーから」

「あっ……」

かわいい言い訳だけど、今俺ちょっとそれ付き合えないから……。

「お前がここに居るといふことはつまり俺が知らないように付いて来ようと仕組んだわけだ。なら協力した者があるわけだが、ここまです身の安全を確保しながら俺に付いて来れるようにした者は……」

裴元紹……

「…ブチ殺す」

> 0 f <

そこから、倉の前にいた裴元紹にとりかかって、
そしたら突然倉の中から誰かが棒を持って仕掛けてきて、
倒したら雛里ちゃんが何か近づいて

「誰かはさみを持ってきてください」

と言ってきて、

もしかしてとしてまたキャリーケース開けてみるとはさみと鏡が入
ってあった。

雛里にハサミを渡して後で雛里がそいつの髪を切り始めるのを無言
に見ていた。

五分ぐらいしたら大体形が整ってきた。

正体はなんと女の子。

肌はちよっとくらい森の中でもはつきり解るほど白い肌。

白いと言つのは、あまり綺麗というよりは、日を浴びなさ過ぎた、
白人種のような白さだった。

あ、これは決して白人種に何だと言っているわけではない。でもち
よっとアジア系から見ると痛そうに見えるのは事実。

とか思っていたら今度は雛里が何か欲しそうにキョロキョロとして
いたので、ハサミと一？にあった鏡を渡した。

どうやらあっていたいようで、雛里はそれを彼女に見せた。

「…娘か？」

そこまでして俺は裴元紹にそう聞いた。

「あ？まさかよ、俺たちがここ来る前からここに居たんだ。元々、ここは他の賊の群れが使っていたそうだったんだが、あいつが入っていた倉だけがちゃんと残っていた。最初は手を出そうとする連中もあつたが、見てのとおり中々手ごわい娘さんだよ。その後はずっとこんな風に―？に過ごしているさ」

「…………それはなんというか…………」

なんなんだ、その関係は？
謎な娘だな。

「はいっ」
「…………あ」

やっと終わったように雛里は倒れているあの娘の手を引つ張って起こした。

背は雛里と同じかちょっと上。

…………あ、ごめん帽子まで合わせて計算してた。あの娘の方が上。

「おお、思ったよりずっと別嬪じゃったんかー」
「くっそー、こうだったらもっと積極的にやるもんだっただー」

何か後で賊の連中が騒いでるが、今はそれよりもだ。

「さて、裴元紹、説明してもらおうか」
「おい、おい、またそれかよ。もう勘弁してって」
「するもんか。どういふつもりで彼女を連れてきたのかは知らんがな…………」
「一刀さん、もういいじゃないですか」

雛里が俺と裴元紹の間を割って入りながら言った。

「雛里、俺はこいつと」

「私は一刀さんと話したいことがあるんです。そのためにここまで来たんです。私がおこまで来たのは一刀さんのせいです。だから変にほかの人に八つ当たりしてしないで私と話してください」

「やつあた…！俺は単にお前が危ないからだな…！」

「危ないなんて一？です。大体なんですか、無理しないって約束したくせに山賊に入るとか言ってきて…約束は絶対守るんじゃないかなかったですか？」

「俺は危なくない。少なくとも誰かさんが忍びこんでくることを想定しなくて済むほどは安全だったよ」

「あわわ！私が心配するのが迷惑だった言いたいんですか？」

「そういう話を言ってるわけじゃないだろ」

俺はただ…！

「ああ、こりやめんどくせーことになったな。倉番、なんとかならんか」

「……誰」

「新入りだよ。歓迎会でもやろうと思ったんだけど、何も痴情喧嘩始まつちまつた」

「「なつ…！」」

あいつ今なんつった！

「貴様、訂正しろ！」

「そんなんじゃないやありません！」

「おお、こわい、こわい。で、もう話は済んだのか？」

「「つつ」」

互いの顔を見る。

いや、なんかもう、…バカバカしいわ。

「取り敢えず…この話は後という方向で」

「そ、そうですね。その方がいいですね。人目も多いですし」
「…え？」

気がついてみれば、山賊群れのほぼ全員がこちらを見ていた。
何かニヤニヤしてるし……

「こんのー！お前ら全員今の忘れるー！」

「うわぁっ！新入りが壊れたぞ」

「誰か止める！」

「くっはっは、こりゃとんでもねー奴が入ってきたもんだな！」

そこからは、あまりおぼえていない。

> 〆 〆 <

……………？

「うん？」

「あ、起きました？」

「ひな……り？」

なんで……

「どうなってるんだ？」

「えつとですね。50人ぐらい倒したところで裴元紹さんと倉^{そう}ちやんがふたりがかりでなんとか一刀さんを抑えて、その後皆さんで勝手に歓迎会始まっちゃいますよ…今は、こうです」

頭を横に逸らすと、地面に倒れてる群れがいた。
何人かはまだ呑んでる。

ってか、何か視界がおかしいのだが…

「でも、一刀さんって思ったよりずっと強かったんですね。裴元紹さんがそう言ってます。あの時あいつが俺の条件を受けてなかったら、皆殺しにされるのは自分たちの方だったかもしれないって」

「……………雛里」

「はい」

「どうして…俺を真上から見ているんだ？」

おかしい。

雛里と俺だとこんな目線になるはずがないのに。
しかも真上で……………

「あ、今ちよつと膝枕してますから」

「……………え？」

ちよつ！

「なっ！」

「あ、……………うーん」

ちよつと後頭部が痛いけど、なんとか無理やり起きる。

「なんで俺が雛里の膝に……」
「え、でも、地面だと固いですし……そのほうがいいかと思って……」
「……………」
「あ」

やばっ、俺今熱上がってる。

「どこ行くんですか？」

「裴元紹のところだ。明日雛里が帰れるように準備しろって行ってくる」

「私はここに残ります」
「……………」

行く足を止めて後を向く。

雛里の顔は真剣になっていた。

「なんで……………」

「私は……………決めました」

「何を……………」

「一刀さんとー？に居たいです。一刀さんがここに居るといっのな
ら、私もここに居ます」

「……………」

皆最初はそう言った。

でも、結局皆居なくなるんだ。
父も、母さんも、祖父さんも、

「なんで」

「何がですか？」

「俺が、鳳雛と呼ばれる鳳土元が付いて行くに値すると」

「……逆に、こっちが聞きたいです。どうして、私が付いて行っ
ちやだめなんですか？天の御使い様」

「……………」

「……………」

沈黙。

こんなこと、今までなかった。

俺の存在に興味を持って近づいてくる人たちが今までいなかったわけではない。

だけど、そのうち皆居なくなった。

俺が無視したら、或いは、冷たく接すれば皆居なくなった。

そしてそれ以上俺の存在に割り込んでくることなんてなかった。

及川ぐらいだろ。何をやっても俺の側から消えなかったのは…………

だけど、雛里にはそういうことができない。

無視することもできないし、冷たくすることも限界がある。

無視しようとするほど意識してくるし、冷たくしようとする
とあつちからもっと激しく出てくる。

こんなの…今までなかった。

なんでこんな時に…………

何でよりによって雛里が…………

こんなにも俺に近づいてくるんだろ。

これが、

これが運命だと言ったんですか、水鏡先生？

俺がまた傷つく運命だって…………

「…起きた？」

「っ！」

「あ、倉ちゃん」

「……こんにちは……鳳統ちゃん」

突然後から出てきた、さっきの女の子はほぼ動かない口で雛里に時間合わない挨拶をした。

「うーん、こんな時間だと…もうお休みの時間だけどね」

「……お休み……は…挨拶じゃない」

「そ、そうだね…何か、おかしいね」

「……変」

「雛里、何だ。そのそうちちゃんって」

「え、あ、何か、皆さん、倉番くわいばんって呼んでるみたいで…だったら名前なまえで倉くらでいいかなと思ひまして……本人も名前はないうっていつてましたので……」

「そう…？…倉くらって書いてそう…？？」

何か思い出せそうで……出せない……

ああ、後頭部ごうぶが痛い。

「ね」

「うん？」

静かな声で、倉が俺の手を掴つかまった。

「…こつち」

「え、おい、ちょっと」

「一刀さん」

あいつが引つ張るまま、俺は連れて行かれた。
体は小柄なのになんで力なんだ。

> p f <

倉くらが連れてきたのは倉の中だった。

暗くて何も見えないのだが…

「こっ、ち…」

「おい、ちょっと待て。暗くて何も見えないぞ」

「……………」

だけど、倉は何も言わずに中に入っていった。

「あの、これ使ってください」

「あ、ああ、ありがとう」

雛里ちゃんが後からランタンを渡してくれた。

わざわざキャリーケースから持ってきてくれたようだ。

ガチッ

「！」

灯りを付けた途端、倉はすごいスピードでこっちに走ってきた。

「うわっ！」

「火……………だめ…危ない」

何か、すごく怒ってる。

中になんかあるんだろうか。

火薬とか…それとも爆発するようなものでも？

「これは火じゃない。灯りにしかないんだ。ほら」

「…？」

ランタンを見せると、倉はキョトンとした顔でそれをじっと見つめた。

そして、光に向かって手を伸ばすが、熱さもなく、ただ光だけを発するランタンの光を防いで、倉の壁の方に手の模様の影を作るだけだった。

「……………」

「問題ないよな」

「……………>>コクツ<<」

倉は頷いてまた中に入っていった。

俺と雛里もランタンの光に依存して倉の後を追う。

「……………」

「…！これは……………！」

「剣……………おじさんが……………見つけた……………反ヶ月ぐらい前……………」

倉が中で俺に見せた物は……………

鳳雛だった。

鳳雛と言うのは、雛里の道号のことではない
日本刀氷龍と、鞘の鳳雛。

祖父さんの遺品として、北郷流師範の証。

「一刀さん、その剣、知ってるんですか？」

「鳳雛……俺の刀だ」

「え」

「……あなたの？」

「ああ……こういうとちょっと変かもしれないが、俺は反ヶ月ぐら
い前にこの世界に落ちてきた。この剣も反ヶ月前に見つけたって言
ったな？」

「……おじさんが、そう言った。…錆びてて使えないから、倉に置
くって……」

「錆びてるわけじゃない」

「……でも…抜けない……あたしも…やって…みた」

「誰でも抜けるような剣じゃないんだ。これは……そんな風にでき
た刀」

呪われた刀。そして、それを抑えるために嵌められている鞘鳳雛。
祖父さんの遺言、この刀を鞘から抜けるようになってみせること。
俺はまだ、祖父さんの遺言を果たしてはいない。

「雛里、ちょっとこれを……」

「あ、はい」

俺は雛里にランタンを渡して、鳳雛を両手に握った。
そして、刀の柄を掴んで……

「！」

すんなり……抜け……た？

・

・

・

第一章 十一話 ……と思ったら結局後でまた会う道だった（後書き）

雛里の脳内日記

今日は本当にいろんなことが起きちゃいました。

塾から出ようとする一刀さんを追って行ったら、街が賊に襲われていて、その賊たちを退治したらまた新しいのが来ようとしてました。

でも、一刀さんが動揺してる人たちをなんとか落ち着かせて、一人で山賊のお頭の人で協商して、街を襲うことはなかったです。

だけど、代わりに一刀さんが山賊の一員になるはめになって、あまりにも驚いて気絶してしまいました。

起きた後、こうしてはいけないと思ってこっそり一刀さんの後を追いました。

結局一刀さんにバレて大騒ぎになりましたけど、最終的に倒れた一刀さんに膝枕できてよかったと思います。

倉ちゃんはちょっと話すのが苦手なのですが、実はいい娘です。

飲み過ぎて倉からもっと酒を持ってこようとする人たちを倉に近づけないようにして、近づこうとするとぶっ飛ばします。

私と同じぐらい（？）の年のはずなのに、あんなに強いなんてすごいって思いました。

明日は一刀さんがどうして私のことを避けようとするのか、絶対に問いつめたいと思います。

実は、ちょっと心配にもなります。

本当は一刀さんは私のことは嫌いなのに、私があまりしつこく張り付こうとするのではないかって。

ああ、でも、もし本当にそんなのだったらどうしよう。

一刀さんは優しいから、きっとそういうことだと私の前では言ってくれないのに…

だけど、これほど積極的にしないと一刀さんはきっとまた私を帰らせようとする。

あ、でも、そしたら本当に私のこと嫌いになるんじゃないかな。しつこい女の子って思われたらどうしよう。

いや、そんなこと考えていても、一刀さんは離れていくばかりだし、やっぱり問い詰めた方が…

でも、でも、あまり一刀さんを困らせるとまたあの時みたいに演技混じって私を追い払おうとするかもしれないし。

え、じゃあ、また…き、キヌされちゃうんじゃない？

あわわ、どうしよう！

(ここから解読不能)

という話がありました。

第一章 十二話 ちっぽけな幸せを求めて……

殺せ……

殺せ……

血が……

血が欲しい……

絶望に、悲鳴に満ちた血が……

冷たい……凍りつくような冷血が……

その血を吸って……俺は……俺は……

殺せ……

目の前の人を……殺せ。

ただ、それだけでいい。

何も考えなくていい。

悲しみも、嬉しさも、愛、友情も何も感じなくていい。

冷たいまま、人でないまま、

俺のために血を流す人形に……

殺せ……

「!?!」

> p f <

シャリーン!

残っている最後の意識で剣を鞘に抑えた。

「はぁーっ! …… はぁ …… はぁ ……」

今のは……

「一刀さん?」

「…どうしたの?」

「…なんでもない……」

雛里と倉がこつちをキョトンとして見つめていた。

二人には分からなかったのか?

これが……これが氷龍の力なのか。

恐ろしかった。

こんな武器と二年も過ごしていたというのか…俺は?

祖父さんは……あの時祖父さんも、このような感情を感じたのだからか。

いや、感情……ではない。

感情も、何もかも刀に吸い取られてしまいそうになっていた。ただ殺すことだけど、目の前の敵を殺せと、刀がささやいていた。いや、敵とかそんなのも関係ない。目の前にいる者はすべて敵だった。自分以外はすべて敵だと。

殺すべき存在だと……そうささやいていた。

……もう二度と抜きたくない。

> p f f <

「倉、この刀……もらっていいか」

「……いい」

あれ、あっさりだな。

「裴元紹には断らなくていいのか」

「……倉の中にあるのは……全部あたしの」

「そうか……」

「……>>コクツ<<皆、準備性ないから、あたしがないと……直ぐ

倉が空に……なる」

「そうか。大変だな」

「……」

倉は黙々と俺の顔を見つめていた。

「な、何だ？」

「……代わりに」

「え？」

「代わりに……欲しいの……ある」

「な、何だ？」

「……あの、おっきいの……欲しい」

「え」

キャリーケースのことか。

嫌、でもあれは……なんというか……

「あれがないと、ちょっと困るんだけど……」

そもそもあの鞆って本当何なんだろう。

「頂戴とは言わない……借りるだけ……」

「借りるって……何に使うんだ？」

「………寝る」

「え、寝る？」

「………うん」

いや、待って、寝るって。

「寝るって、あの鞆の中で寝る？」

「………寝心地良さそう」

「寝心地って………」

いくら小柄だと言って、あんなところに入って寝たら起きて頸とか肩とか痛むぞ。

「………駄目？」

「いや、ああ………うん………そういっのなら、良いかな」

「………>>「クっくく」

俺が良いと言った途端、倉は外に行つて、外に置いてあつた俺のキヤリーケースを持ち込んだ。
倉が開けてみると……

「……………何か入ってる」

「何だ？」

また何か他のが入ってるのか。
今度は何だ？

「……………これって……………お布団ですよね」

「……………」

お布団か……

この際、このサイズのをどうやってケースに詰め込んだのかは置いといてだ。

このケースって何か地味じ器用じゃないか。
その時必要なもの取ってくれるし。

「…要らない」

が、倉はケースの中から布団を持ち出して、ケースの中に入り込んだ。
中に入って、頭を少し前にかしげて両足を胸のところまで立てると、
ぴったりって感じだった。

「おい、本当にそんなところで寝るつもりか？」

「痛むよ、倉ちゃん」

雛里も心配そうにしているが、倉は何も言わないままケースの蓋を締めた。

あ、ちょっと待って、中から開けられるの、これ。

「倉？」

俺が外から鞆にノックすると、中から開く音がして倉ちゃんがひよこっと顔を出した。

「…何？」

あ、開けられるんだ。

「いや、何でもない。お休み」

「……お休み……お休み……鳳統ちゃん」

「うん、お休み、倉ちゃん」

「……」

倉はまたケースを閉じた。

> p f <

「何か、不思議な娘だな」

「そうですね……」

残されたのは俺と雛里と…後は刀鳳雛とともふかふかそうなお布団だけ。

「これ、どうしましょうか」

「使ったらいいんじゃないか？それじゃあ、俺は外で寝るから」
「ふえ、一？に寝ないんですか？」
「…は？」

いきなり何を言うんだ！？

「……あわわ！い、いえ、今のはその……ただ、私はあまり固い地面で寝るのは慣れてませんので…一刀さんはそうじゃないんですか？」

「俺は大丈夫だ。別にどこでだって寝られる」

「そ、そうですか……というか、やっぱり駄目ですよ。一？の布団とか…あはは」

雛里は作られた笑みをしながら笑った。

一瞬、本気で考えたというのは秘密にしておこう。
というか、後になって孔明に殺されたくなければ馬鹿な真似は控えた方がいいぞ、俺。

「それじゃ、雛里もここで寝てって」

「はい、お休みなさい、一刀さん」

「お休み」

そう言っつて、俺はランタンを持って外に出た。

> pf <

雛里SIDE

一刀さんがランタンを持って出ると、倉はまた暗くなってしまいました。

布団を倉のできるだけ平たいところに広げてみました。

「何か…ちよつと広いな」

明らかに布団は一人用のものではありませんでした。ちよつと一人で寝るには広すぎる気がします。

それにしても、

「あわわ……なんてこと言っちゃったんだろ、私」

一？に寝るだなんて。

何であんなこと言ったのか自分でもわかりません。無意識的…そんなこと言っちゃって…

でも、良く良く考えてみると、今まで一人で寝たことなんて…ないかもしれません。塾ではずっと雛里ちゃんが近くにいたし…一人で寝てるというのを感じたことありませんでした。

あ、でも隣に、倉ちゃん居ますよね。

何か一刀さんの鞆の中に入って寝てるけど…

何か、面白い娘です。

髪切ってくれただけなのに、直ぐに赤面になったり、その後も色々助けてもらって、他の山賊の人たちが騒いでも、そんなに不安は感じ無くて済んだし…倉ちゃんが居て色々助りました。でも、一番良かったのは、倒れてる一刀さんの介抱していたところです。

何故か、一刀さんが側にいるってことだけで、すごく落ち着きました。きつと、一？の布団で寝るとか、そんなとんでもないことを言ったのも、無意識的に一刀さんに依存していたのかもしれない。

「明日は…どうしよう……」

今日はいろんなことがありすぎて大変でした。

先生と朱里ちゃん、今頃何があったか全部分かつちゃったかな。

私が出発のところに居るって知ったら、どうなるんだろう。

皆驚いて……心配するかな。

朱里ちゃん、泣かなければいいのに……

> p f <

同じ時刻、

奏里SIDE

「はわわー」

「孔明ちゃん、孔明ちゃん？」

もしもし、聞こえています？

駄目だね、完全に現実から目を閉じてしまったのですよ。

まあ、そうもしたくなる報告だったのでよ。

まさか、一刀さんに付いていった鳳統ちゃんが、一刀さんと一？に街を襲っていた賊に攫われて行くだなんて。

「それで、あなたたちはそれをみすみす見送ったというわけですか」

「お、俺たちでもどうにかできるものではなかったんよ！ただ…」
「ただ…なんですか？」
「ひいっ！」

いつもは穏和な先生が、これほど怒っているなんて…カナはびつくりしちゃうのですよ。
いつもは優しく接する街の人に、これほど威圧感を出すなんて…いつもの水鏡先生の姿を知ってる人なら考えられないのですよ。

「…わかりました。明日私が行くと、街の長老さんにお伝えください」
「は、はい」

あーあ、完全腰抜けになつて街であつた話を伝えにいてくれた街人は逃げるように出ていってしまいました。

「元直、朱里を部屋まで連れて行ってもらえますか？」
「キャハ、わかりましたですよ。でも…先生はどうするのですか？」

一方、話を聞いた水鏡先生の目にも、心配の色はみえていますけど、カナにはわかるんですよ。

先生は今、すごく怒っていらつしやるのですよ。

それは、鳳統ちゃんを攫った賊に対してのものではなく、だからって鳳統ちゃんのことをそんな目に合わせてしまった原因となる一刀さんでもないのですよ。

それは、誰でもなく、この街の人々たちへ対しての怒りなのですよ。

「この街は、先生の人望でこそ今ほどの潤沢さを保っていられるの

ですよ。そんなことが分からない街の人たちが、易々とこの生徒に剣を向けたり、ちゃんと守ることもできずに自分たちの身の安全のために賊たちに攫わせるなどの仕業。ゆるすまじですよ」

「……カナ」

「キャハー、大丈夫なのですよ。カナはなぐんにも見てないのでですよ」

「……あなたはこういう時だけは本当に強いんですね。朱里や雛里よりも……」

「キャハー、カナは現実派なんですよ」

この戦いで、先生が失ったものは鳳統ちゃんと、天の御使いと呼ばれた一刀さんだけではないのですよ。

それは、この街の人たちへの信頼。

それを失ってしまったのが、この街の人たちにとっては、村を賊たちに襲われること以上に恐ろしいことになりうるかもですよ。

「カナ、明日私は少し出掛けます。皆には休みと伝えといてください」

「山賊のところに行くのですか？」

「……あその山賊の方々は、中々紳士的な人たちを聞いています。

雛里に下賤な真似はしないでしようけれど、今はまず二人を取り返すことが先決です」

「キャハー？」

気のせいでしょうか。

何故か先生が早まっているように見えるのですよ。

> p f <

「う……ん」

カナは孔明ちゃんを連れて孔明ちゃんと鳳統ちゃんが使う部屋に入ってきたのですよ。

……昔はカナの寢床だった場所……今は鳳統ちゃんが使ってるのですよ。

「ひな……り……ちゃん……」

「……………」

大丈夫なのですよ、孔明ちゃん。

鳳統ちゃんには一刀さんが居るのですよ。

だから、孔明ちゃんはカナだけ見ていてくれればいいのですよ。

「…キヤハ」

いえ、ちよつと待つてみるのですよ。

今、この塾には鳳統ちゃんが居ないのですよ。

つまりこの部屋に入って来るような人は皆無なのですよ。

今倒れている孔明ちゃんを、カナが好き放題にできるのですよ。

あんなことや、こんなことしても……いいのですよ？

「……………じゅるり」

「……………づうう」

「……………」

ああ、でもいけないのですよ。

魔されているような孔明ちゃんの顔を見ると、何だかそんなことは

どうしても良くなるですよ。

「孔明ちゃんは……カナは孔明ちゃんがカナだけ見て欲しいのですよ」

だから、一刀さんには絶対に、鳳統ちゃんのことを孔明ちゃんから離してもらわなければいけないのですよ。
でなければ、孔明ちゃんはいつまでもカナのところには戻って来てくれないですよ。

「カナは……こんなに孔明ちゃんが好きなのに……孔明ちゃんはいつも他の女の子のことばかり見てるのですよ」

鳳統ちゃんが羨ましいのですよ。

鳳統ちゃんばかり可哀想な娘なぶりをして……
カナだって……カナだって孔明ちゃんに愛されたかったのに……もつとカナも孔明ちゃんと……に過ごしたかったのに……
鳳統ちゃんが居なければ……

「ううん……ううん？」

「あ、気がついた？」

孔明ちゃん、起きちゃったみたいですよ。

あともうちよつと寝ていたら襲ってしまいそうだったのに、よかったですというか……惜しいというか……。

「元直……ちゃん」

「孔明ちゃん」

「……雛里ちゃんが……」

「大丈夫だよ。一刀さんが……にいるんだから」

「…元直ちゃんは、あの人のことを信じられるの？」
「キャハ？」

孔明ちゃんは何を言いたいのか？

「私は…私には分からないよ。雛里ちゃんがどうしてそんなに北郷さんに近づこうとするのかも…そんな雛里ちゃんを北郷さんが守ってあげられるかも…分からないよ」

「…カナはね、別に一刀さんを信じてるわけじゃないよ」
「え？」

「でも、初めて見た時確信したの。あの人はカナと同じ人なんだって…それなら、自分が好きな人のことを放っておけられないもん」

「…好き…？」
「うん、一刀さんはきつと鳳統ちゃんが好きだよ」

まだ、そうだと気づいてないのか、確信できないのか、それは分からないけど。

一刀さつもカナみたいなら、
例えそれに気づいてないとしても解るのですよ。

「孔明ちゃんが他の娘たちにいじめられるのを見た時ね。まるで心臓が燃やされるように痛くて、何も考えられなくなったの。ただ、孔明ちゃんが苦しんでいる、その事だけが頭にいっぱいになって…それからは…その人のことが一番大事。他のはどうでもいいの」
「……………」

「だからね、一刀さんもきつと、鳳統ちゃんが危険な目に会ったら、自分や他の誰がどうなったって、まずは雛里ちゃんを助けようとするの。だから…きつと大丈夫」

「……………」
「ありがとう、カナちゃん」
「……………」
「キャハ」

久しぶりに、孔明ちゃんに感謝されちゃったのですよ。
以前、あの雌犬たちから助けた時はすごく泣いていたのに、今回は
すごく安心したように、カナの真名を呼びながらありがとっつて言
ってくれたのですよ。

「孔明ちゃんがてーれたー！」

「はわわー！か、カナちゃん！？」

「また真名で呼んだね！ねー、今日ー？に寝ていい」

「え？！」

「いいじゃない、今日は鳳統ちゃんも居ないし、昔みたいに裸の絡
み合いしよう」

「あ、あの時はまだ幼い時で…ちょっと元直ちゃん脱がさないで」

「キヤハー」

「せ、せめて自分ですからー！はわわー！！」

カナは孔明ちゃんが笑顔で居られるならそれでいいのですよ。

例え、カナのことをまた好きになってくれないとしても、ただ……
孔明ちゃんが笑って居られるなら、何でも……するの……ですよ。

> p f <

雛里SIDE

翌朝

「……………ううん……………」

冷えた空気に目が覚めました。

「あ」

でも、まだ暗いです……

あ、違いました。

暗いのは倉の中だけです。

この倉、外から全然光が入ってきません。

倉の門を開けて外に出ると、やっぱりいつものような時間に起きたようです。

習慣って怖いですね。

朱里ちゃんも居ないのに、こんな時間に起きちゃって……

「あ」

そういえば、一刀さんは昨日どこで眠ったのでしょうか。探しに行くのも一苦労になりそうです。昨日膝枕していた辺りで寝ていたらしいのですが……

「あわわー！」

「……………」

後から掴まってびっくりして振り向くと、片手で目をコシコシともんでいる倉ちゃんが居ました。

「……おはよう……鳳統ちゃん」

「おはよう、倉ちゃん。……あの、大丈夫なの？」

昨日あんなところで寝ちゃって…

「……………何？」

「その…首とか痛くない？」

「……………痛くない。元気」

「そうなんだ……………」

絶対体に良くないと思うんだけどな……………まあ、大丈夫なことに越したことはないし…

「……………何処行…くの？」

「私、一刀さんのこと探しに行こうかと思って…心当たりない？」
「……………」

無言のままです。

多分、知らないのかな。

そっだよね。

「そっか…じゃあ、私だけで探すよ」

「……………こっち」

「え？」

「……………多分…こっち」

倉ちゃんがさした場所は…

「えっと…あそこは森の奥じゃない」

「…かず……………と？…今寝てない」

「え、何で解るの」

「……………おじさんと、一？に…行った…聞いた」

「もしかして、倉ちゃん前から起きてたの？」

「……寝心地良くて……二度寝しちゃった……」

倉ちゃんは何か恥ずかしそうに顔を俯きました。

「……こっち」

「あ、うん」

でも、直ぐ開き直った倉ちゃんが向いた方向に私も付いて行きました。

> p f <

一刀SIDE

「これは……！」

「どう思うか？」

「………すごい」

朝はやく裴元紹にたたき起こされて連れて来られた場所は…

山の奥に広げられている広い……畑だった。

畑…少なくとも何百人を養えるほどの……。

「部下たちと一？に少しずつ森に火を付けながら広げた畑さ。すべて自分たちの手で……賊と言っても元々は農民だった連中は中々腕が立ったな」

「こんなものがあるなら……賊なんてしなくていいじゃないか」

「それが俺の目標さ。この山の奥で……腐った官吏どもや朝廷、他の賊たちにも邪魔されずに俺たちだけの村をつくり上げるんだ…

…ここに部下の連中がちょっと器用で女でも連れてこれるようになれば、この山に立派な村を立てることができるさ」

「……山賊だというのは嘘だったのか。実は……」

実はここで新しい生活を…普通の人に戻るための準備をしていたわけなのか？

「もうすぐだ。まだ俺たち全部が食えるほどの作物が収穫できない。でも、周りも街に金になる作物を売って他のと交換すれば…なんなく賊の仕事をやらなくてもやっていけるようになるだろう」

「貴方に対しての態度を訂正しなければならぬ。あなたは賊などではありません。ここに居る人たちの救世主だ」

「寄せ！俺はただ戦で逃げてきた負け犬の盗賊さ………だけど…あの戦は本当にひどいものだった」

裴元紹はそこにあつた岩の上に座つて言った。

「あの時俺は黄巾党の本隊に所属していた。連勝で勢いが増している俺たちは何も怖くなかった……でも、違つたんだ」

「…何が会つたんですか」

「…女一人」

「…え？」

「たつた女一人の手によつて、3万もしていた黄巾党の本隊は壊滅された。あの女は鬼だった。…たつた一人で……俺の隣にいた仲間たちも……殺されてしまった」

裴元紹はあの時のことを思い出したのか体を震わせた。

「死んだ連中は俺を臆病ものだといつかもしらねー。でも俺は生き残るために盗賊になつて、生きるために逃げてきた。ただ一つだけ心配になることがあるとすれば、地和ちゃんがその時どうなったのか未だに知らないって話さ」

「……………」
「大丈夫だろうか……あの娘たちはそんな軍の中には居てもまったく賊の魁首などやっていけそうな娘たちじゃなかった。俺たちや、他のただ人たちから奪うことが好き盗賊たちに乗せられて、あんな風になつたけど、実は……ただ歌うのが好きな娘だつたのに……」
「……良く分からないが、好きだつたのか？」
「好きだつたさ。そこにいた全員があんな娘たちに惚れ惚れだつたさ……長三姉妹の歌を聞いていると、現実の苦しさをすべて忘れてしまいそうになつてたさ……だから、あの娘たちの夢を叶うために戦つた。でも……俺は今ここに居る」

歴史にて、裴元紹と言えば、張宝の部下であつた。恐らく、彼が地和といつたのは張宝の真名ではないだろうか。

「と、昨夜の酒がまだ聞いているのか。変なことを言つちまつた」

裴元紹は開き直つて、俺を見た。

「でも、今はそんなことよりだ。俺は養う部下たちがある。もうすぐでこの夢を叶えるんだ」

「……俺にして欲しいものでもあるのか」

「お前さえよければだ、俺の部下が襲つたあの街。あそこに俺たちと引き取りをしてくれるように言つて欲しい」

「……………」

街と賊の間の引き取り……

「恐れながら、賊と内通しているということが知らされると、官軍が黙つては居ないはずだ。街の人たちがそんな話を飲むはずもないし、俺もこれ以上街を危険に晒すようなことはしたくはない」

「……………そうか」

「……………済まない」

「いや、良いんだ！そんな返事ぐらい考えていたさ！」

裴元紹の顔には一点の俺に対しての怨望とかはなかった。

俺もできることなら彼らを助けたいと思ってきていた。

だってこれほどの苦勞をしたんだ。

過去はどうであって、彼らはもう賊ではなくなるうとしている。

賊になった頃も、それもまた苦しくて飢えてる生活が我慢できなく

て成り立ったものじゃないか。

ただ、運が悪かっただけだ。

官吏たちの圧政、重なる天災、そこに凶作が加わると、人たちは飢えて死ぬか、それとも他の人を襲って自分が生きるか選ばなければならぬ。

その中で、人を襲って生きたことは間違っていて、そのまま飢え死に死ぬ方が正しい方法だと言える者が居るだろうか。否、そんなことと言えるはずがない。

だけど、何か、何かないのか。

この人たちを助けられる方法が……

「できます」

「……」

「その街との引き取りというもの、出来るかもしれません」

俺と裴元紹が振り向くと、そこには雛里と倉が立っていた。

>ロチ<

「雛里…」

「おはようございます、一刀さん」

「あ…おはおう…というか」

さっきの話は…

「お嬢ちゃんよ、それはほんとか！」

「はい、と言っても、自身を持っていえるほどではないのですけれど…」

「何でもいい！俺たちを助けられるのなら、小さな希望だって良いんだ。言ってくれ」

「あわわっ！」

裴元紹はあまりにも興奮して雛里の両肩を掴まって雛里を振った。

「裴元しよ………」

「おじさま……落ち着く」

「っ！お、おお、そうだったな」

俺が止める前に、雛里の後にいた倉が手のひらで裴元紹の額をペチツと叩くと、裴元紹は我に戻った。

「それで、何か策があるのか？」

俺が雛里に聞き直すと、

「策…と言えるほどじゃないですけど…あくまで希望的な話です」「言ってくれ。雛里も聞いただろ。この人たちは…」「はい…一刀さんが何を考えているのかは大体わかります。私もできればこの人たちを助けたいと思います。だけど、本当にそううまく行くかはわかりません」

雛里は私をいつものまっすぐな目で見ながら話を続けた。

「私の先生、水鏡先生は荊州でかなりの人望を持っています。だから、先生が上げる言葉なら、官軍だとしても先生の言葉を無視することはできません」

「つまり、水鏡先生の人望を盾にして引き取りを成り立たせるというのか？」

「いいえ、それだけでは足りません。いくら先生の言葉でも、盗賊と組むという話を飲む荊州の官軍ではありません」

「それなら…」

「…裴元紹さん」

「…何だ？」

雛里は、ゆっくりと裴元紹を見て、後にいた倉を前に出した。

「倉ちゃん、この盗賊のお頭の座を譲ってください」

「…は？」

「…鳳統ちゃん…どういうこと？」

倉も裴元紹も、そして俺もキョトンとした顔で雛里を見つめた。

「水鏡先生は、以前から女の子しか自分の門下に起きません。ですから、倉ちゃんをまずここのお頭にさせて、その後水鏡先生の弟子に入れさせてもらうんです。そしたら、こここの賊の群れのお頭が、

先生に感化されて賊の仕事をやめて、その部下の人たちも賊をやめて街の人たちを一？に暮すようになった、という話を作るのです」
「……！そうか！」

たしかにそういう話になると、言い訳として成り立てる！

「……おじさま？」

「……ほんとに、お嬢ちゃんの言う通りにしたら、俺たちはこれ以上賊と呼ばれないようになるのか」

「はい。もつとも、先生が許してくれれば、の話ですけど……そこは、私が高んとか先生を説得してみます。それに、倉ちゃんは全然勉強とか受けてないし、この際先生の弟子入りさせてもらえば、もつといい環境で暮らせると思います」

「頼む！俺たちを……助けてくれ！」

裴元紹は雛里の前で土下座までしながら言った。

裴元紹の声からその必死さが感じられた。

彼は本当に、この負の循環から脱出したいんだ。

飢えて、人を殺して養って、そしていたら人が増えて、まだ飢えて……そんな盗賊たちの悪循環。

戻りたくても、既に遠いところまで来てしまったせいで、戻ることもできない。

世界からは悪人として決め付けられてるけど、本当はほんの少しだけ、運が悪かったただけだ。

「あわわ！立ってください！そんなにまでされるほど自身があるわけじゃないんです。できるだけやってみますからそんなことまでしないでください」

「雛里にあまり負担をかけてくれるな、裴元紹」

「……はっ！そう、そうだな。すまん、お嬢ちゃん、つい嬉しくて

我を失つちまった」

土下座していた我に戻って立ち上がった。

「しかし、もしお嬢ちゃんが言う通りになると、倉番がこの群れのお頭になるわけだが……」

「なにか問題でもあるんですか」

「流石に部下たちが黙ってはいないだろう」

「いや、それはまあなんとかなる。なにせ建前でそうだと言ってやれば納得してくれるはずだ。だけど、そうなると今まで俺たちがやったことの罪をアイツに背負わせるハメになるのだろ」

あ、そうか。それは考えてなかった。

「……あたしはいい」

が、倉は案外あっさり引き受けてしまった。

「いいのか、倉番」

「……おじさまがそれで幸せになれるなら……いい」

「倉番」

「倉ちゃん」

「今までおじさまのことずっと見てた。…おじさま、いい人。だから……」

「……ありがとう、倉番」

「倉……それはあたしの名前」

「……ああ、ありがとうよ、倉」

「……>>>コクツ<<<」

その後、俺たちは陣地に戻り未だに酔いつぶれていた部下たちへの話を説明した。

大体の者たちは離里の策に賛同した。

意外と、倉の人気はすごいものだったらしく、裴元紹を排除して倉をお頭にしようっていう話も実存してらしく、裴元紹は胸をなで下ろしていた。

賛同できないという連中もいたが、裴元紹の説得があつてなんとか説得してもらった。

もし、離里の言った通りにうまくいければ、彼らはもはや山賊ではなくなるわけだ。

いや、もしではない。

なんと少しでも成功させよう、と俺は心の中か思った。

•

•

•

第一章 十三話 願いを込めて（前書き）

ここは皆あつさり過ぎると言われたところではありますけど、まあ……自分は初心なのもいいですけど後々平然と鳥肌たつほどの愛情表現する二人になったらいいなと思ってました。

そう、あの時までには……

第一章 十三話 願いを込めて

倉SIDE

あたしの頭の中で一番古い記憶の中で、あたしは燃える炎の中にいた。

目に映る何もかもが燃えていて、赤い世界は広げられていた。

あたしは、その炎の中で恐れながら固まっていた。

熱かった。

熱かったけど…何故か苦しくはなかった。

怖かったけど、それは別に炎に囲まれていたからではなかった。

むしろ、炎はまるであたしと遊びたがってるように私に寄ってきて、またすり抜けていった。

炎を触ると、その火が猫の尻尾のように私の指に絡まってきた。

そうやって私の体に這い上がって来て、私の中に入ってきた。

赤い炎が口の中に広がると、何故かそれをすごく美味しく感じた。

今まで食べたものよりも、火は熱くて、懐かしい味だった。

炎は怖くなかった。

だけど、あたしを怖くしたものは、あたし以外にこの炎の中で誰もいないってこと。

何人かの人たちは動かないまま、炎の吞まされて言った。

炎はすごく欲張りな子で、過ぎた所にあるものを全て喰ってしまふ。

その時、私は気づいた。

あたしが一人に居るのは、きつとこの炎のせいだって。

赤くて、熱い炎があたしを囲んでいる限り、誰もあたしに近づくとができないのだった。

あたしは永遠に、この炎の中で一人で居なければいけないんだ。
それが分かった瞬間から、あたしは火を遠のけていた。
そしたら、たくさんの人たちがあたしに寄ってきた。

赤くて情熱的な炎の中もクライじゃないけど、暗くて涼しい倉の中
はもっと好きだった。

それに、ここに居るといつも誰かが居てくれる。
そう、おじさまも…

おじさまはいい人。

おじさまはこの山にたくさんの人たちを連れてきて、山の中に畑を
作った。

おじさまがそうする前にそこには鬱蒼な森があった。
だけど、おじさまと皆が何年をかけて作った畑は、とっても広くて
そこから出るジャガイモやニンニク、ニンジンとかで作った料理は
すごくおいしい。

でも、いつもそういうものを食べるわけではなかった。
山の間に通る商団を襲って、その人たちが売ろうとしていた肉や食
べ物を奪うこともあった。

おじさまはこんなことが本当にしたくとするわけではなかった。
でも、こうでもしないと皆が飢えて死んでしまう。

人は食べないと死ぬ。死ぬことを喜ぶ人なんていない。
だからって、人を殺して喜ぶ人も居ない。

生きていくためには人を殺さなければならぬ人生なんて、どうし
ても嬉しくならない。

あたしは、

おじさまの力になりたい。

おじさまはいい人。

おじさまは本当に頑張っここまで来た。

あたしは今まで何もできなかった。何をすればいいのかも分からなかった。

でも、あたしに出来ることがあるとしたら、

あたしがおじさまのために出来ないことなんてない。

> p f <

一刀SIDE

「何い！？奴が逃げた！？」

「すいあせん！どうやら昨日見張りをしていた奴が少し酔っている隙に逃がされたみたいす」

おれたちが畑から帰ってきたら、昨日捕まえた街を襲った連中の小隊長が一人で逃げていた。

「ちっ！怪我した奴は？」

「ありません。見張ってた奴も、他に縛られていた奴が助けてくれたそうで…何日分の食糧と武器を持って行かれたぐらいです」

「……誰も死んでないならいい。追う必要もない、ほっとけ」

「ですが、このままあいつが仕返しするつもりで官軍にでも突くと…」

「もうええんだよ。もう俺たちは山賊じゃなくなるんだ」

「……はい？」

「全員集める。俺が話がある」

「わ、わかりました」

裴元紹はそう言うと部下の者は皆を集めに走っていった。

「なあ、お嬢ちゃんよ」

「はい」

雛里が裴元紹の声に答えた。

その声はいつもの、どこか少し不安げな声ではなく、すっかり真面目な声になっていた。

「なんだかんで言っても賊やってた連中だ。頭がかてえ。うまく説得できるかわからねえ」

「そこは私も裴元紹さんの人望に頼る他ありません。もし皆さんがこの考えに反感を持つとすれば、いくらいい話だとしても街の人たちを話し合うことができません」

「先ず身の安全が確保できないなら街の連中は絶対にここと組もうとしないだろ。昨日あれほどやられたんだ」

「死んだ奴は居ないって言ってたな」

俺が加えると裴元紹はそう聞いた。

「ああ、街の人の中で死んだ奴は居ない。怪我人は分からないが…死人が出たのは襲った連中の方のみだった」

「もしそうだったならこんな考えはできなかつたかもしれない。でも、幸に死んだ人はなく、街の被害もそれほどではありませんでした。なんとかして街の人たちに、裴元紹さんたちを受け入れることが街に利になるということを説得すればきっと聞いてくれると思

ます」

「そうか……まあ、そこは俺がなんとか出来ることじゃねーな。俺はあいつらを説得することからするか。倉、ついてこい」
「……うん」

裴元紹は倉と一？に昨日宴をした広場に向かった。

「俺たちも行くか」

「ちよつと待ってください、一刀さん」

> p f <

裴元紹に付いて行こうとすると雛里が俺の足を止まらせた。

「どうした、雛里」

「……もし、ここの人たちと街との商談が出来るようになって、この人たちがもう盗賊じゃなくなると、一刀さんはその後どうするつもりですか？」

「……？」

どうするって…それとこれとは関係ないだろ。

ここの一員になるって約束したのだ。

「ずっとここに居るとかは言わないでください。そんなことだったら、私そもそもここの人たちを助けようとも思っていないせん」

「！」

「ここの人たちが普通の人に帰ると、一刀さんも自由になれます。そしたら、その後一刀さんはどうするつもりですか」

「……俺は……」

どうする…って

分からない。考えてない。

俺がここに来たのは、ただ雛里、お前から逃げるためだったよ。

なのに、今こうしてお前に助けてもらっているこの時にも、俺はお前と一？に居る。

何をしているんだろ、俺は…

彼女から逃げるつもりが、結局また彼女を巻き込んでいた。

「もしあの時賊が街を襲ってなかったら、一刀さんはどこに行くつもりでした」

「……………分からない。ただ…どこでもいいと思った」

君が居ないところなら、またいつもの自分に戻れるって…。

だけど、雛里は俺に付いてきた。どうして？何故君から君から離れることができない？

「どこにも行く当てがないのなら、ずっと私たちと一？に居たらいんじゃないですか」

「それは…駄目だ」

「どうしてですか？」

「……………」

「私は、一刀さんと一？に居たいです。だけど、一刀さんがそこまですることを拒むのだとしたら私も一刀さんに無理言っただけで付いていこうなんて思っています。ただ、理由ぐらひは教えてください。私をそんなに嫌う理由を…」

「嫌ってるわけじゃない！」

「！」

思わず大声をだしてしまった。自分でも驚くくらい…。

「そんなんじゃないんだ……雛里が嫌いだとか、そんなこと全然思
つてない」

「え……じゃあ、どうして……」

「……………」

あ……

なんでだっけ……

> p f <

雛里SIDE

「嫌ってるわけじゃない！」

「！」

びっくりしました。

あまりにも急に大声をだしてくるものですから、思わずびっくりし
ちゃいました。

「そんなんじゃないんだ……」

一刀さん自身も、自分がそんなに大声を出したことに驚いたかのよ
うにちょっと惚けた顔をしていました。

「雛里が嫌いだとか、そんなこと全然思っでない」

「え？」

え？……それじゃあ。

でも、今まで、あの街に行った時から、一刀さんは私に怒ってばか

り居ました。

私が一？に居ることが嫌そうに、ずっと怒鳴って、帰れと言われて…それでも私がかここまで付いてきたのは、ただ、自分の気持ちに従っただけでした。

この人と一？に居たいって。

一刀さんと一？に居たいという気持ちがあまりにも大きくて、このまま一刀さんから離れることができなかったのです。

せめて、そんなに嫌がる理由でも聞けるのなら諦めることが出来るだろうかと思っただけ聞いてたのですが…帰ってきた言葉はまったく別の言葉でした。

「じゃあ、どうして……」

私のことが嫌いじゃないとすれば、どうしてあんなに私のことを……

「……………」

一刀さんは口を開けて何か言おうとしましたが、その口からどんな声も出てきませんでした。

ただパクパクと動いているだけで、一刀さんは私を避けていた理由を教えてくださいません。

「俺は……………」

一刀はそれ以上何も言わずにただぼかんと開けた口で私を見つめました。

「俺は……………ただこのままだとお前の事が好きになりそうだから……」

「……………」

また祖父さんや両親のように彼女が居なくなることが怖いから？
そんなものなら…もうとつくに遅すぎている。

このまま離里から離れるとしても、それは死を持って別れるのと同じことのはず。

それなのに、俺はまだ彼女から逃げようとしている。
何故？

初めて会った時には面白い娘だと思っていた。

孔明や土元みたいな歴史に残る天才たちが、こんな幼い女の子な世界で、それに一々彼女はすることが可愛かった。

そして、彼女が俺のせいで塾でいじめられていることを知って、そこから確信した。俺がここにずっと居たら離里に迷惑になりかねないって。

そして街に行く途中で賊が街を襲っていると分かって行ったら、離里が付いてきちゃって…賊に命狙われて…

あの時は口ではそう言ったけど、もしあの時ほんとにあいつが離里に傷一つでも与えてたら俺は頭が真っ白になって何かでもやらかしたかもしれない。

そして、恐らく街をこういう形で助けることもできなかっただろ。

そして、ここ裴元紹のところまでこっそり彼女が付いてきて、危険なことを分かっているくせにここまで付いてくる離里が理解できなくて、ついつい怒ってしまった。

逃げられなかった。どうしても…逃げようとしてもずっと離里は俺に付いてきた。

でも、もし俺が望んだ通りになったらどうだったのだろう。

ほんとに離里が俺のことをついてこなかったとしたら…それなら俺

は安心して自分の道を行けたのだろうか。

嫌、きつとずっとハラハラしていた。

俺が居なくなっても、ずっといじめられるだろうかと心配したり、帰って水鏡先生や孔明に怒られないだろうかと心配して……

拳句には彼女から離れたことを後悔したに違いない。

それは、死を迎えて離れてしまった仕方のない別れと違って、雛里と別れることを自分の手でやってしまっているからだ。

……ああ、そうか。

もう遅かったんだ。

もう、彼女から逃げたりして、彼女の存在を自分の記憶から薄めていくって考えはできないぐらいに……おれは雛里のことを……

「俺は……ただこのままだとお前の事が好きになりそうだから……」

「ええええええ?!」

ふと気がつくと、雛里が真っ赤つ赤な顔で叫んでいた。

え?何?もしかして、俺今口にだして言った?

「えええええ!」

ま、待て待て!

だとしたら俺は今一体何を言ったんだ?

「あわわー！あわわ！／＼／＼／＼／＼」

「え！？待って？！今の無し！／＼／＼／＼／＼」

「もう聞いてますからー！」

雛里はほぼ涙目になって、顔も完全に赤面になっていた。きつと、それは俺も同じはず。

こんなこと、前にもあったような気がする。

いや、そういうことがどうでも良くてだ。

この馬鹿が！俺は一体何てこと口にしたんだ。

会って一ヶ月も経ってない女の子に、

今までそんなこと思ったこともないのに、

他の人のことが好きだとか……祖父さん以来にそんなこと全然……

「あわ……」

「おい！雛里！」

ついに、熱が充満した雛里は地面に居座ってしまった。

支えはしたけど、駄目だ、もう意識がない。

「あ……あわ……」

「………ばっかじゃねーの、俺／＼／＼／＼／＼」

こんな子供同然な娘に、俺はなんてことを考えてしまったんだ？

「おーい！話が着いたぞ。これからでも………おい、お嬢さんどうしたんだ？」

裴元紹が戻ってきた時……俺はなんて答えればいいか分からなかった。

雛里SIDE

「うん……………うん……………」

「起きた……………」

「…倉ちゃん？」

地面が揺れている感覚がして目を覚ましたら、真上に倉ちゃんの顔が見えた。

…なんか地面ががたがたと揺れています。

あ、これ、地面じゃない。木材の床……………そうか、荷馬車の中だ。

「あわわ!？」

「あうっ!？」

と、思ったら一度大きく揺れて私と倉は一瞬宙に浮かんでまた床に落ちました。

「あ、ごめん!ちょっと慣れなくて……………」

「……………危ない」

「悪い。気をつけるから」

頭を打ちました。痛いです。

倉も不機嫌そうに一刀さんに文句を言いつけてます。

「一刀……………鳳統ちゃん起きた」

「あ、ほんと?雛里、大丈夫?」

「は、はい……………」

どうやら一刀さんは外で馬を操っているみたいです。
あまり器用ではなくて、馬車の揺れが激しいです。

「あの、どうなってるんですか？」

「今街に行ってるんだ。裴元紹から馬と荷馬車を借りたよ。そこにあるのは親善用の賄賂」

荷馬車の片方には樽がいくつかありました。

ガタガタする中でなんとか近づいて中身を開けてみると、中には畑から今収穫した野菜などが入ってました。

「ちよつと急だったけど、裴元紹もかなり急いでるし、俺も早くした方がいいかなと思ってね。相談せずに話進めちゃってごめん」

「…いえ、大丈夫です」

これぐらいなら丁度良いです。

善は急げですし……。

あれ？でも私何で倒れていましたっけ………

あれ？

・

・

・

「あわわー！……！」

「一刀…鳳統ちゃんが…発狂してる」

「今忙しいからなんとかしろ！あと発狂とか言つな！」

「一刀さんが！一刀さんが私のことが好きって…！！」

しかも、あんななんともしない顔で！

私は一？に行きたいと思うだけでも散々悩んだのに、あんなに平然と好きなんて言われて…！！

「鳳統ちゃん」

倉に私の名前を呼びながら私を抱きしめて動きを止めました。

「そ、倉ちゃん」

「落ち着く…暴れると危ない」

「あ…うん…ごめんね…」

「…>>ふるふる<<」

倉ちゃんは頭を振ってから外の方を見ました。

「…こんな風に来てるんだ…外って」

「え？どういこと？」

「…あたし…あそこから出てみたことがない。あの山の中から」
「え？」

「そんな…一度も…？」

「そつえば、他の人たちに比べて、倉ちゃんの肌はとても白くて、ちよつと痛そうに見えるほど白い肌をしていました。」

「陽の光をあまり浴びなかつたせいなのかもしれません。ずっと倉の中に籠って生活していたから…」

「……眩しい」

「どうして…一度も出なかったの？」

「……分からない……何故か……出ちゃいけない気がした……それだけ」

「……」

「でも…おじさまのためだから……今回は特別なの……」

「今までずっとあそこに居たの？……外に出たいと思ったことは……？」

「外『が』危ない」

「…え？」

どういっ…

「……うん？」

「倉ちゃん、今なんて言ったの？」

「……外に出るのが初めてって」

「いや、その後」

「……おじさまのためだから」

「その後」

「……何も言っていないよ？」

「さっき外が危ないって……」

「……??？」

どうして……

「ひゃっ！」

「……」

今度は馬車が急に止まって、私と倉ちゃんは馭者台近くまで転びま

した。
野菜が入ってあった樽も、いくつか倒れて中身が床に散らばってしまいました。

「ごめん！」

もうちょっと安定した運転はできないのですか!?

「危ないじゃないですか！」

「いや、それがさ……」

「雛里！」

「！」

この声は……」

「雛里！」

「…先生……」

「雛里……！」

水鏡先生が馬車の前に居ました。

「先生ー！！」

「雛里」

私は馬車の前から飛び降りて先生の胸に飛び込みました。

「大丈夫ですか？怪我とかは……」

「大丈夫です…怪我もないですし…ずっと安全でした」

「そう…よかった……」
「……水鏡先生」

一刀さんも、馬車から降りて水鏡先生の前に立ちました。

「……申し訳ありません。雛里を危険に晒したのは自分の責任です」
「大丈夫です。…あなたがしたことは街の人たちから全て聞きまし
た……雛里があなたに付いて行ったのは雛里自身の選択です。…そ
うでしょう？」

「…はい」

そうです。

私は自分の選択で一刀さんに付いて行きたいと思いました。

それは……一刀さんとなら一？に行きたいと思ったから……
それは……

「／／／／／／／／／／」

「雛里、どうしたんですか？顔が赤いですが…」

「あ、いえ…あわわ……あの！」

「ここは日差しが強くて良くありません。街に戻りましょう。先生
にお願いしたいことがあります」

慌ててる私に代わって、一刀さんが先生に言いました。

「その方がいいですね」

「中に入ってください。少し運転が慣れていなくてガタガタするか
もしれませんが、出来るだけ安定させます」

「お願いします」

「こ、こっちです」

私は早く今考えたことを忘れてたくて、先生を連れて荷馬車の後に回って中に入りました。

「……あ」

「あら……あなたは？」

「……倉……です」

「水鏡先生、彼女はあの山賊群れのお頭です」

「！」

「一刀さん？」

一刀さんの方を向くと、一刀さんは目を私に合わせました。

なるほど、そういうことに話し合うようにもう話付いているわけですね。

私も話合わせないと……

「あそこで私と一刀さんで話していたら、倉ちゃんはもう山賊をやめて街の人たちと仲良くしたいようです」

「……なるほど、雛里は私の名を使って、街の人たちと山賊群れの間を結ぼうとしているわけですね。この娘を私の弟子として受け入れさせて……」

「あ」

流石水鏡先生……こんなに早く私が思った考えをわかってくださるだなんて……

「あそこに居る人たちは街を襲うような賊とは違います。ただ自分たちが生きるために森の中にもつていただけです。あの街を襲ったのも、一部の人の独断によって起こった事故です。だけど、こうなってしまって私と一刀さんがあの群れに入ってみると、実はあそこの人たちはもう賊の下衆な真似はやめて、また普通の庶民に戻る

うとしていました。だから、先生、お願いします。あの人たちを助けてください」

「…………… 雛里が人のことにここまで自分の意見を言うだなんて驚きました…………… わかりました。詳しい話は、先ず街に付いてからにしましょう」

「…………… はい！」

そうやって私たちは、水鏡先生と一？に街へ向かいました。

・
・

・

・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404w/>

真・恋姫†無双 雛里 鳳凰一雙舞い上がるまで

2011年10月1日13時02分発行